大淀川流域

地名いわれ事典

国土交通省　九州地方整備局　宮崎河川国道事務所

大淀川流域 地名いわれ事典

大淀川（おおよどがわ）の名前のいわれ

江戸時代のように、多くの藩が分かれていた時代には、一つの川がいくつもの藩領を流れて通過する。それで、同一の流れであるのに、場所によって呼び方が変わっていた。

大淀川は、都城では「竹之下川」と呼ばれた。宮崎の跡江あたりでは、「大川」と呼んでいた。下流部では、「赤江川」と呼んだり、赤井川と呼んだりしていた。

名前のいわれには諸説ある。『日本書紀』に書かれた「小戸（おど）の橘」から「小戸川（おどかわ）→おぉどがわ→おおよどがわ→大淀川」に転訛（てんか）した説や、大阪の淀川に「大」を冠して大淀川になったとの説、大淀川は広くて深い川という説、小戸、大渡の渡し名から付けられたという説などがある。

大淀川流域の市町村

大淀川は宮崎県で一番長い川で、流域には約60万人が住んでいます。
鹿児島県の中岳（なかだけ）から流れはじめ、いろいろな川と合流しながら都城盆地から宮崎平野へ、そして日向灘（ひゅうがなだ）に注いでいます。

九州の川の長さ・ベスト5	
1番 筑後川（ちくごがわ）	143km
2番 川内川（せんだいがわ）	137km
3番 球磨川（くまがわ）	115km
4番 大淀川（おおよどがわ）	**107km**
4番 大野川（おおのがわ）	107km

九州の流域面積・ベスト5	
1番 筑後川（ちくごがわ）	2860km²
2番 大淀川（おおよどがわ）	**2230km²**
3番 球磨川（くまがわ）	1880km²
4番 五ヶ瀬川（ごかせがわ）	1820km²
5番 川内川（せんだいがわ）	1600km²

数字で見る大淀川	
河川数	126（支川を含む）
長さ	107km
流域面積	2,230km²
流域内人口	約60万人

序　文

大淀川の流域は、宮崎県の中部から南西部を含んで2230km²に及びます。

九州第２位の広い流域面積を持っているのです。

平成17年９月６日、九州に上陸した台風14号は、大淀川流域に甚大な水害を引き起こしました。いつもは、穏やかで美しい眺めを見せている大淀川が、ひとたび台風によって大雨がもたらされると、恐ろしい濁流（だくりゅう）となり、人間の生活環境を破壊してしまうのです。

私たちは、大淀川の様々な姿を、もっと知らなければなりません。

今回は、大淀川を広い視野から理解し、流域の土地に親しみを持ってもらうために、この事典を作ることにしました。

地名は、自然の様子から生れたり、歴史上の出来事から生れたり、町村合併のような行政上の事情から生れたり、神話・伝説に由来して生れたりしています。調べていくと大変面白いものです。また、人々の姓（名字）も、地名から出たものがたくさんあります。

しかし、調べてもその出来方がよく分からない地名も数多くあるのです。

この事典では、大淀川流域の土地に関心を持ってもらうために、流域の主な土地の地名を収録しました。紙数に限りがあるので、細かい所まで取り上げることが出来ませんでした。

取組んだ執筆者も、地名の専門家だけではありませんが、大淀川の流域に住み、地域の歴史や、暮らしの文化に愛着を持っている人たちが、できるだけ地名のことを考えてみようと取り組んだものです。

用語や解説がある程度難しいのは、自然や歴史の内容を含んでいるので、やむを得ません。しかし、皆さんが関心をもって読んでくだされば、理解できていくことと思います。

読者の皆さんが、この事典を手がかりにして、さらに大淀川やその流域の土地や地名に関心を深め、その自然や歴史や人々の生活について考えてくださるようになることを願っています。

なお、もっと詳しく調べたい方は、巻末の参考文献を利用して、さらに勉強してください。知識は無限に広がります。

平成19年3月20日

監修者　甲斐　亮典

目　次

五十音順

ページ

あ

001 青井岳(あおいだけ)　都城市山之口町 …… 1
002 赤江(あかえ)　宮崎市 …… 1
003 吾妻町(あづまちょう)　宮崎市 …… 1
004 油田(あぶらだ)　宮崎市 …… 1
005 余り田(あまりだ)　宮崎市 …… 1
006 阿耶・亜椰(あや)　綾町の古名 …… 1
007 菖蒲原(あやめばる)　都城市 …… 2
008 嵐田(あらしだ)　国富町 …… 2
009 有水(ありみず)　都城市高城町 …… 2
010 阿波岐原(あわきがはら)　宮崎市(神話地名) …… 2
011 粟野(あわの)　宮崎市高岡町 …… 3

い

012 飯田(いいだ)　宮崎市高岡町 …… 3
013 生目(いきめ)　宮崎市 …… 3
014 石峰(いしみね)　国富町 …… 3
015 石山(いしやま)　都城市高城町 …… 3
016 石山戦場川原(千町川原)(いしやませんじょうかわら)　都城市高城町 …… 4
017 一万城(いちまんじょう)　都城市 …… 4
018 一里山・小田元(いちりやま・こだもと)　宮崎市高岡町 …… 4
019 犬熊(いぬくま)　国富町 …… 4
020 犬ノ馬場(いぬのばば)　宮崎市 …… 5
021 射場川原(いばがわら)　綾町 …… 5
022 今町(いままち)　都城市 …… 5
023 入野(いりの)　綾町の大字名 …… 5

う

024 浮島(うきしま)　国富町 …… 5
025 浮田(うきた)　宮崎市 …… 6
026 牛之脛(うしのすね)　都城市 …… 6
027 牛之峠(うしのとうげ)　三股町 …… 6
028 後河内(うしろかわち)　高原町 …… 6
029 内山(うちやま)　宮崎市高岡町 …… 6
030 内山(うちやま)　小林市須木 …… 6
031 梅北(うめきた)　都城市 …… 7
032 浦之名(うらのみょう)　宮崎市高岡町 …… 7
033 瓜田川(うりたがわ)　宮崎市高岡町 …… 7
034 瓜生野(うりゅうの)　宮崎市 …… 7

え

035 江後口(えごぐち)　綾町 …… 7
036 江佐原(えさばる)　宮崎市 …… 7
037 えべすけ溝(えびすけみぞ)　国富町 …… 8
038 江平(えひら)　宮崎市 …… 8
039 江平(えひら)　都城市高崎町 …… 8

お

040 皇子原(おうじばる)　高原町 …… 8
041 大井手(おおいで)　都城市高城町 …… 8
042 大岩田(おおいわだ)　都城市 …… 9
043 大瀬町(おおせまち・おおぜまち)　宮崎市 …… 9
044 太田(おおた)　宮崎市 …… 9
045 大塚(おおつか)　宮崎市 …… 9
046 大坪(おおつぼ)　宮崎市 …… 9
047 大橋(おおはし)　宮崎市 …… 9
048 大牟田(おおむた)　都城市高崎町 …… 10
049 沖水(おきみず)　都城市 …… 10
050 御城下(おしろした)　宮崎市 …… 10
051 落水(おちみず)　国富町 …… 10
052 小戸町(おどちょう)　宮崎市 …… 10
053 小戸の橘(おどのたちばな)　神話地名 …… 11
054 表馬場・下馬場(おもてばば・しものばば)　宮崎市 …… 11
055 小山田(おやまだ)　宮崎市高岡町 …… 11

か

056 梶山(かじやま)　三股町 …… 11
057 柏田(かしわだ)　宮崎市 …… 11
058 春日(かすが)　都城市高城町 …… 12
059 勝岡(かつおか)　三股町 …… 12
060 合戦原(かっせんばる)　宮崎市 …… 12
061 蟹町(がにまち)　宮崎市 …… 12
062 金崎(かねざき)　宮崎市 …… 12
063 樺山(かばやま)　三股町 …… 13
064 蒲牟田(かまむた)　高原町 …… 13
065 上北方(かみきたかた)　宮崎市 …… 13
066 上倉・下倉(かみくら・しもくら)　宮崎市高岡町 …… 13
067 上長飯(かみながえ)　都城市 …… 13
068 上野町(かみのまち)　宮崎市 …… 13
069 上別府(かみべっぷ・かみのびゅう)　宮崎市 …… 14
070 紙屋(かみや)　野尻町 …… 14
071 唐崎(からさき)　宮崎市高岡町 …… 14
072 仮屋(かりや)　宮崎市 …… 14
073 仮屋(かりや)　都城市高崎町 …… 14
074 川口(かわぐち)　宮崎市高岡町 …… 14
075 川中(かわなか)　綾町 …… 14
076 川端(かわばた)　宮崎市 …… 15
077 河骨(かわほね)　宮崎市高岡町 …… 15
078 川原町(かわらまち)　宮崎市 …… 15
079 観音瀧(かんのんだき)　小林市須木 …… 15
080 勘場(かんば)　国富町 …… 15
081 観音瀬(かんのんぜ)　都城市高城町 …… 16

き

082 木浦木(きうらぎ)　小林市 …… 17
083 祇園(ぎおん)　宮崎市 …… 17
084 祇園台(ぎおんだい)　宮崎市高岡町 …… 17
085 北川内(きたかわち)　宮崎市 …… 17
086 北俣・南俣(きたまた・みなみまた)　綾町の大字名 …… 17
087 京塚(きょうつか)　宮崎市 …… 17
088 霧島(きりしま)　宮崎市 …… 18
089 霧島(きりしま)　宮崎市 …… 18
090 木脇(きわき)　国富町 …… 18

く

091 崩瀬・平瀬(くえんせ・ひらせ)　綾町 …… 19
092 久木ヶ尾(くきがお)　綾町 …… 19
093 郡司分(ぐじぶん)　宮崎市 …… 19
094 楠見(くすみ)　宮崎市高岡町 …… 19
095 国富(くどみ)　宮崎市 …… 19
096 国見山(くにみやま)　都城市高城町 …… 19
097 倉岡(くらおか)　宮崎市 …… 20
098 蔵西(くらにし)　国富町 …… 20
199 蔵原町(くらはらちょう)　都城市 …… 20
100 蔵元(くらもと)　都城市高崎町 …… 20
101 栗須(くりす)　野尻町 …… 20

こ

102 神下(こうげ)　綾町 …… 20
103 郡元(こおりもと)　都城市 …… 21
104 五ヶ所・十ヶ所(ごかしょ・じゅっかしょ)　綾町 …… 21
095 九瀬(ここせ)　小林市須木 …… 21
106 小島(こじま)　宮崎市 …… 21
107 五反田(ごたんだ)　宮崎市 …… 21
108 五町(ごちょう)　宮崎市高岡町 …… 22
109 後東寺迫(ごとうじざこ)　宮崎市 …… 22
110 木之川内(このかわうち)　都城市山田町 …… 22
111 木場谷(こばたに)　高原町 …… 22
112 小林(こばやし)　小林市 …… 22
113 小林市須木(こばやししすき)　小林市須木 …… 23
114 小松原(こまつばら)　都城市 …… 23

さ

115 境谷(さかいだに)　綾町 …… 23
116 桜木(さくらぎ)　都城市高城町 …… 23
117 佐土瀬(さどせ)　野尻町 …… 24
118 薩摩迫(さつまざこ)　都城市山田町 …… 24
119 狭野(さの)　高原町 …… 24
120 去川(さるかわ)　宮崎市高岡町 …… 24
121 山王原(さんのうばる)　三股町 …… 25
122 三名(さんみょう)　国富町 …… 25

し

123 椎屋(しいや)　綾町 …… 25
124 塩浜(しおはま)　宮崎市 …… 25
125 四家(しか)　都城市高城町 …… 25
126 志比田(しびた)　都城市 …… 26
127 下北方(しもきたかた)　宮崎市 …… 26
128 下水流(しもづる)　綾町 …… 26
129 宿神(しゅくじん)　綾町 …… 26
130 城ヶ崎(じょうがさき)　宮崎市 …… 26
131 城ノ下(じょうのした)　宮崎市 …… 27
132 城の下(じょうのした)　宮崎市 …… 27
133 城ノ下(じょうのした)　宮崎市 …… 27
134 城ノ下(じょうのした)　宮崎市 …… 27
135 志和池(しわち)　都城市 …… 27

す

136 須志田(すしだ)　国富町 …… 27
137 ズンブリ(ずんぶり)　宮崎市 …… 28

せ

138 瀬頭(せがしら)　宮崎市 …… 28
139 関之尾(せきのお)　都城市 …… 28
140 千丈(せんじょう)　宮崎市 …… 29
141 戦場坂(せんじょうざか)　宮崎市 …… 29
142 千町(せんちょう)　都城市 …… 29

そ

143 杣山(そまやま)　宮崎市 …… 29

た

144 大工町(だいくまち)　宮崎市 …… 30
145 高木原(たかぎばる)　都城市 …… 30
146 高崎(たかさき)　都城市高崎町 …… 30
147 高崎新田(たかさきしんでん)　都城市高崎町 …… 30
148 高城(たかじょう)　都城市高城町 …… 31
149 高洲(たかす)　宮崎市 …… 31
150 高千穂峰(たかちほのみね)　高原町 …… 31
151 高浜(たかはま)　宮崎市高岡町 …… 31
152 高原(たかはる)　高原町 …… 31
153 竹之下(たけのした)　都城市 …… 31
154 竹原田(たけはらだ、たこんだ、たごんだ)　宮崎市 …… 32
155 田島(たじま)　都城市山之口町 …… 32
156 田尻(たじり)　国富町 …… 32
157 田代八重(たしろばえ)　小林市須木 …… 32
158 橘通(たちばなどおり)　宮崎市 …… 32
159 谷頭(たにがしら)　都城市山田町 …… 33
160 田之平(たのひら)　宮崎市高岡町 …… 33
161 田平・平田(たひら・ひらた)　綾町 …… 33
162 タンポリ(たんぽり)　宮崎市 …… 33

ち

163 血捨ノ木(ちしゃのき)　高原町 …… 34
164 千代ケ崎(ちよがさき)　宮崎市 …… 34

つ

165 津蟹ヶ迫(つがにがさこ)　宮崎市 …… 34
166 塚原(つかばる)　国富町 …… 34
167 堤(つつみ)　小林市 …… 34
168 堤下(つつみした)　宮崎市 …… 34
169 東霧島(つまきりしま)　都城市高崎町 …… 35
170 水流(つる)　宮崎市 …… 35
171 鶴島町(つるのしまちょう)　宮崎市 …… 35

て

172 出来床(できどこ)　宮崎市 …… 35
173 出水口(でみずぐち)　宮崎市 …… 36

ページ

174 寺ノ前(てらのまえ)　宮崎市 …… 36
175 寺ノ前(てらのまえ)　宮崎市 …… 36

と

176 働馬寄(どうめき)　宮崎市 …… 36
177 遠目塚(とうめづか)　綾町 …… 36
178 ドウメン(どうめん)　宮崎市 …… 36
179 堂屋敷(どうやしき)　小林市須木 …… 37
180 轟(とどろ)　都城市高崎町 …… 37
181 富吉(とみよし)　都城市山之口町 …… 37
182 鳥居原(とりいばる)　都城市高城町、高原町 …… 37

な

183 中河間(なかごま)　小林市須木 …… 38
184 中霧島(なかきりしま)　都城市山田町 …… 38
185 永久津(ながくつ)　小林市 …… 38
186 長田(ながた)　三股町 …… 38
187 永田(ながた)　小林市須木 …… 38
188 中水流(なかづる)　宮崎市 …… 38
189 永野(ながの)　都城市山之口町 …… 39
190 中之坪(なかのつぼ)　宮崎市 …… 39
191 中村(なかむら)　宮崎市 …… 39
192 中山(なかやま)　宮崎市高岡町 …… 39
193 流合(ながれあい・はきあい)　宮崎市 …… 39
194 奈佐木(なさき)　小林市須木 …… 40
195 夏木(なつき)　小林市須木 …… 40
196 波島(なみしま)　宮崎市 …… 40
197 縄瀬・塚原(なわぜ・つかばる)　都城市高崎町 …… 40
198 七日市(なんけち)　都城市高城町 …… 40

に

199 錦原(にしきばる)　綾町 …… 40
200 西能登越(にしのとごえ)　宮崎市 …… 41
201 仁田尾(にたお)　宮崎市高岡町 …… 41

ぬ

202 温水平(ぬくみずでら)　高原町 …… 41

の

203 野首(のくび)　宮崎市 …… 41
204 野尻(のじり)　野尻町 …… 41

は

205 吐合(はきあい)　綾町 …… 42
206 花木(はなのき)　都城市山之口町 …… 42
207 花見(はなみ)　宮崎市高岡町 …… 42
208 馬場崎(ばばさき)　宮崎市 …… 42
209 馬場田(ばばだ)　宮崎市 …… 43
210 早水(はやみず)　都城市 …… 43
211 原(はら)　小林市須木 …… 43
212 祓川(はらいかわ)　高原町 …… 43
213 原(はる)　宮崎市 …… 43
214 番所下(ばんしょした・ばんどこした)　宮崎市 …… 43

ページ

ひ

215 東方(ひがしかた)　小林市 …… 44
216 東麓(ひがしふもと)　野尻町 …… 44
217 提原・堤原(ひさげばる・つつみばる)　綾町 …… 44
218 一ツ葉(ひとつば)　宮崎市 …… 44
219 姫城(ひめぎ)　都城市 …… 44
220 広沢(ひろざわ)　綾町 …… 44
221 広島(ひろしま)　宮崎市 …… 45
222 広原(ひろわら)　高原町 …… 45

ふ

223 笛水(ふえみず)　都城市高崎町 …… 45
224 福島(ふくしま)　宮崎市 …… 45
225 船塚(ふなつか)　宮崎市 …… 45
226 麓(ふもと)　都城市山之口町 …… 45
227 麓(ふもと)　宮崎市高岡町 …… 46
228 麓(ふもと)　高原町 …… 46
229 麓(ふもと)　小林市須木 …… 46
230 古城(ふるじょう)　宮崎市 …… 46

ほ

231 法華嶽(ほけだけ)　国富町 …… 46
232 細野(ほその)　小林市 …… 47
233 穂満坊(ほまんぼう)　都城市高城町 …… 47
234 本郷南方・北方(ほんごうみなみかた・きたかた)　宮崎市 …… 47
235 本庄(ほんじょう)　国富町 …… 47
236 本庄稲荷(ほんじょういなり)　国富町 …… 47

ま

237 前田(まえだ)　都城市高崎町 …… 47
238 真方(まがた)　小林市 …… 48
239 牧の原(まきのはら)　都城市高城町 …… 48
240 間越(まごえ)　宮崎市 …… 48
241 松山(まつやま)　宮崎市 …… 48
242 的野(まとの)　宮崎市高岡町 …… 48
243 馬登(まのぼり)　高原町 …… 48

み

244 三ヶ野山(みかのやま)　野尻町 …… 49
245 水窪・水久保(みくぼ)　綾町 …… 49
246 三股(みまた)　三股町 …… 49
247 三松(みまつ)　小林市 …… 49
248 宮王丸(みやおうまる)　国富町 …… 49
249 都城(みやこのじょう)　都城市 …… 50
250 宮崎(みやざき)　宮崎市 …… 50
251 宮水流(みやづる)　宮崎市高岡町 …… 50
252 宮ノ下(みやのした)　宮崎市 …… 50
253 宮ノ谷(みやのたに)　綾町 …… 50
254 宮ノ馬場(みやのばば)　宮崎市 …… 51
255 宮ノ前・宮ノ後・宮ノ元(みやのまえ・みやのあと・みやのもと)　宮崎市 …… 51

五十音順

ページ

256 宮村(みやむら)　三股町 …… 51
257 名田(みょうで)　宮崎市 …… 51

む

258 六日町(むいかまち)　国富町 …… 51
259 穆佐(むかさ)　宮崎市高岡町 …… 52
260 牟田町(むたちょう)　都城市 …… 52
261 無田ノ上(むたのうえ)　宮崎市 …… 52
262 六野原(むつのばる)　国富町 …… 52

も

263 面早流(もさる)　宮崎市高岡町 …… 52
264 母智丘(もちお)　都城市 …… 53
265 本城(もとじょう)　宮崎市 …… 53
266 元町・八日町(もとまち・ようかまち)　綾町 …… 53
267 森永(もりなが)　国富町 …… 53
268 門前(もんぜん)　宮崎市 …… 53

や

269 屋倉下(やぐらした)　宮崎市 …… 53
270 弥次川(やじがわ)　綾町 …… 54
271 安久(やすひさ)　都城市 …… 54
272 柳本(やなぎもと)　宮崎市高岡町 …… 54
273 梁瀬(やなせ)　宮崎市高岡町 …… 54
274 柳瀬(やなせ・やなぜ)　宮崎市 …… 54
275 山下(やました)　宮崎市高岡町 …… 54
276 山田(やまだ)　都城市山田町 …… 55
277 山ノ城(やまのじょう)　宮崎市 …… 55

ゆ

278 柞木橋(ゆすのきばし)　宮崎市高岡町 …… 55
279 柚木崎(ゆのきざき)　宮崎市高岡町 …… 55
280 湯之元(ゆのもと)　高原町 …… 55

よ

281 吉村(よしむら)　宮崎市 …… 55
282 四枝(よつえ)　綾町 …… 55

り

283 龍官須(りゅうかんず)　綾町 …… 56
284 両国橋(りょうごくばし)　宮崎市 …… 56

わ

285 和知川原(わちがわら)　宮崎市 …… 56

ページ

●コラム

綾の名義(あやのめいぎ)　綾町 …… 2
牛之峠論所跡(うしのとうげろんしょあと)　三股町 …… 6
みそぎはらい　神話 …… 11
ままこ滝伝説　小林市須木 …… 15
観音瀬開通と藤崎公寛 …… 16
轟(とどろき)ダムによる洪水被害と撤去運動　都城市高城町 …… 16
祇園(ぎおん)の神 …… 17
島津忠久と祝吉御所跡(しまづただひさといわよしごしょあと)　都城市 …… 21
陰陽石(いんようせき)　小林市 …… 22
迫奇岩群(ながさこきがんぐん)　小林市須木 …… 23
城ヶ崎俳人墓碑群(じょうがさきはいじんぼひぐん)　宮崎市 …… 26
入戸火砕流(いとかさいりゅう) …… 28
関之尾滝祭りにおける「朱杯流し」の行事　都城市 …… 29
田島の「かくれ念仏洞」(たじまの「かくれねんぶつどう」)　都城市山之口町 …… 32
しまうつりの碑　都城市山田町 …… 33
石川理紀之助翁夜学跡地と胸像　都城市山田町 …… 33
前田君開渠記念碑　都城市山田町 …… 33
的野正八幡宮と「弥五郎どん祭り」(まとのしょうはちまんぐうと「やごろうどんまつり」)　都城市山之口町 …… 37
島津寒天製造所跡(しまづかんてんせいじょうしょあと)　都城市山之口町 …… 39
オオヨドカワゴロモ自生地　野尻町 …… 41
内場仏飯講の碑(うちばぶっぱんこうのひ)　野尻町 …… 42
山之口麓文弥節人形浄瑠璃(ぶんやぶしにんぎょうじょうるり)(人形の館)　都城市山之口町 …… 46
寺柱(てらばしら)　三股町 …… 51
高木兼寛(1849～1920)　旧穆佐村小山田出身 …… 52
カワの四つの意味 …… 56

●資料遍

・地図 1（宮崎市(高岡町)・国富町） …… 57
・地図 2（小林市(須木)・綾町・国富町・野尻町・高原町） …… 59
・地図 3（都城市(山田町・山之口町・高城町・高崎町)・三股町・高原町） 61
・参考文献 …… 63
・執筆者一覧 …… 65
・編集後記 …… 65

あ

001 青井岳（あおいだけ） 都城市山之口町　地図3−B−5

昔は「月影（つきかげ）日影もささぬ深山（しんざん）」といわれ、その中を官道（かんどう）ではあるが鬼ヶ山道と呼ばれた道が、水俣（みまた）駅から救仁（くに）駅[※1]に通じていた。この山中で最も高い青井岳（563メートル）にちなんで、青井岳という集落名や地名が付けられた。青井の語は、一年中青々と木が繁（しげ）っていることから出たと思われる。

現在は道路も整備され、温泉・キャンプ場などもできて県民の保養地となっている。

青井岳キャンプ場と国道269号の青井岳大橋

※1 救仁（くに）駅は、現在の国富町（本庄あたり）。
大化の改新（645）によって、都と地方を結ぶ道が整えられ、駅は30里ごとに置かれることになっていた。
駅：日向には16の駅（役所）が設置され、そこには5頭前後の馬が常備され、必要に応じて活用されていた。

002 赤江（あかえ） 宮崎市　地図1−C−1

昔、大淀川は赤江川と呼ばれた。大淀川河口に可愛（かえ）という入り江があって、大淀川とつながっており、川の名前も可愛川と呼んだ。それがなまって赤江川になったという。一説には、那珂江（なかえ）が赤江（あかえ）になまったとの説もある。

さて、可愛はエといい、『日本書紀』[※2]に「ニニギノミコトが亡くなったので筑紫（つくし）の日向可愛之山稜（ひむかのえのみささぎ）に 葬（ほうむ）った」とある。県北部延岡市北川町に可愛岳（えのたけ）という山があり、『日本書紀』にいう山であるという理由で陵墓参考地（りょうぼさんこうち）[※3]になっている。

※2 奈良時代初めにつくられた歴史書。日本の天地のはじまりから、持統天皇（じとうてんのう）までのことが、漢文で書かれている。

※3 天皇家の墓の可能性のある所。

003 吾妻町（あづまちょう） 宮崎市　地図1−D−5

大淀川に架かる鉄道橋の北詰（きたづめ）東側一帯の町名で、旧字（あざ）[※4]は小島、出口といった。明治時代になると松山町は料亭などの歓楽街（かんらくがい）として発展し、新地（しんち）とも呼ばれ、明治32年にさらに東側へと発展した。その地は「東（ひがし）新地」と呼ばれ、やがて「東（あづま）→吾妻」と好い字に変わり、吾妻新地という通称になった。昭和２年に正式な宮崎市の町名となり、現在に至っている。

※4 字（あざ）
一つの村の中にある、さらに狭い土地の名称。

004 油田（あぶらだ） 宮崎市　地図1−B−4

竹原田の西側に接し、大淀川・瓜生野川に挟まれた土地の字（あざ）名である。いかにも油田（あぶらだ）[※5]があったようであるが、用水路を意味する井手（イデ）が「ユデ→油出→油田→アブラダ」に転訛（てんか）したと思われる。井手が湯出という地名に変わって温泉があったと勘違いされる場合もある。現在も細江に「油田」、小松の大谷川に「油出橋」があり、同様の地名転訛と思われる。

※5 油がにじみ出てくる土地。たくさん出ると油田（ゆでん）になるが、日本ではほとんどない。

005 余り田（あまりだ） 宮崎市　地図1−C−4

余り田とは平安時代から室町時代にかけて、荘園[※6]に認められている田地以外の田をいう。台帳記載外の田で、これが公認されると加納（かのう）あるいは加納余田、加納田と呼ばれた。余り田は浮田の近くにあり、西・南・東の三方が丘陵で、その狭間（はざま）にある迫田（現在は宅地）は、浮田と同じように免税地であったことが考えられる。

余り田があった宮崎市浮田付近

※6 平安時代から室町時代にかけて、有力な貴族や寺社などが所有した領地。鎌倉時代になると、守護や地頭になった武士たちに支配されるようになった。豊臣秀吉の時代に廃止された。

006 阿耶・亜椰（あや） 綾町の古名　地図2−C−5

綾（あや）町の昔の呼び名は「あた（だ）のなかや」といい、古代の頃には「阿陀能奈珂椰」「亜陀能奈珂椰」と漢字で表され、その後、最初と最後の１字を取って「阿耶」「亜椰」に２文字化[※7]されたという。「あた（だ）・の・なか・や」は「急傾斜地の中の原野・低湿地」、あるいは「吾田・県（あがた）の中の原野・低湿地」の意味であろう。奈良時代日向国の16駅の一つ、綾町の駅名には「亜椰」が用いられた。綾町立町（たてまち）に「亜椰駅跡」の石碑が昭和７年に建てられた。大昔の呼び名が今なお使われているとは何とすばらしいことであろうか。

亜椰駅跡記念碑

※7 地名の２文字化は、和銅６年（713）元明天皇の命「諸国の郡、郷の名は好き字を用いよ」によって行われた。

綾の名義（あやのめいぎ） 綾町

奈良時代の頃、綾町の地名は「阿椰」「亜椰」であったという。それが「綾」に変わったのは11世紀頃以降と思われる。『三国名勝図会』（さんごくめいしょうずえ）[※1]には、次のようなことが書かれている。

綾という名称については、平安時代に法華嶽薬師寺に来たという伝説の多い女性・和泉式部[※2]が、「油菜の花が美しく咲いているのを見て、綾をおりたるがごとし」と言ったのが、始めであると伝えられている。

あるいは、古代の渡来人が移住して、錦織（絹織物）を伝えた土地であったかも知れない。

綾町全景

※1 江戸時代後期に薩摩藩が編纂（へんさん）した薩摩国、大隅国、及び日向国の一部を含む領内の地誌や名所を書いた文書。

※2 和泉式部は平安中期（977年頃〜1036年頃）の恋愛経験や伝説の多い女性。

007 菖蒲原（あやめばる） 都城市　地図3−C−6

北の境を年見川が西流し、菖蒲橋で年見町と連絡している。戦後市営住宅がたくさん建って市街化した菖蒲原は、それまでは田んぼであった。その中に広い湿田があって、そこに古来のアヤメが多数自生していたので、菖蒲原の地名が起こったといわれる。都城消防本部や市菖蒲原浄水場（じょうすいじょう）があるのも、豊富な水系に恵まれた地形によるものであろう。

都城市菖蒲原浄水場

008 嵐田（あらしだ） 国富町　地図1−A−2

地名の由来は、鎌倉中期に嵐田太郎と称する領主が治めたことによるといわれているが、嵐田の人々は、本庄川の流域の村々と同じように何度も、大雨や台風によって、甚大な被害にあい苦しめられてきた。『日向地誌』[※3]には「川涯（かわきわ）ハ水害多シ」とある。現在も本庄川の対岸に旧嵐田の「川向（かわむこう）」という大字（あざ）地名が残っている所があり、嵐に痛めつけられ、洪水に作物を流された人々の恐怖や無念さが、このような地名を生んだのではないかと思われる。

本庄川と嵐田川の合流点付近にある水門

※3 明治の初めの宮崎県内の郡・町・村の歴史や産業、土地のようすを記録した本。著者・平部嶠南

※4 「地誌」とは、その地方の地理について書いた本。

009 有水（ありみず） 都城市高城町　地図3−A−3

薩摩藩の地誌（ちし）[※4]によると、藩政時代は、有水川流域の田尾付近から西久保辺りまでを有水村、残りの広い区域を宮原村と呼んでいたようである。明治になって全地域を有水村と呼ぶようになった。有水というのは、稲作の水があったことから起こった地名であろう。

この有水地区は高城（日和城）が都城島津領になってからも、下之城（伊東８城の一つ）とともに長く伊東領であり、有水備前守（ありみずびぜんのかみ）が守っていた。しかし元亀２年（1571）都城島津の北郷時久（ほんごうときひさ）軍に攻められ、無念（むねん）の最期をとげた。備前守は有水神社に祭られ、有水小・中学校の児童・生徒たちによって毎年「鉦踊り」（かねおどり）が奉納（ほうのう）されている。

有水備前守を祭る有水神社

010 阿波岐原（あわきがはら） 宮崎市（神話地名）　地図1−C−6

阿波岐原、檍原は同じ意味で「アワ、アオ」は湿地帯を、原（ハラ）は広い土地を意味する。現在の阿波岐原町は大淀川左岸よりかなり北に位置するが、戦前は小戸の橘と同様に漠然（ばくぜん）と大淀川河口付近左岸一帯をさしていた。宮崎では一般に原は「バル」と発音し広い台地を意味するが、この阿波岐原はなぜか「ハラ」であり、広い低地帯である。

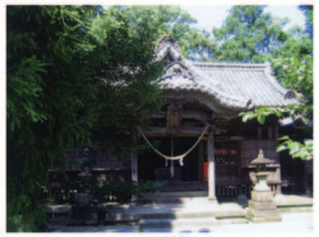
阿波岐原の松林とシーガイア

011 粟野（あわの） 宮崎市高岡町　地図1−B−2

宮崎市から国道10号を都城方面に進み、旧道沿いの高岡市街入口に粟野神社がある。『三国名勝図会』に、次のように書かれている。

「粟野神社はスクナヒコナノミコトとオオクニヌシノミコト及びその御子六体、合わせて八体の神様を祭っている。スクナヒコナノミコトは小さい神様で、粟の穂に乗って去川についたという」。

粟野の辺りは大淀川に沿った砂地だったので、粟がよく作られ、農業の神様としてスクナヒコナノミコトやオオクニヌシノミコトが祭られたのであろう。そのことから生じた地名かも知れない。


粟野神社

い

012 飯田（いいだ） 宮崎市高岡町　地図1−B−1

高岡郷が置かれる（1600年）前、久津良名（くつらみょう）の一農村として、米の良くとれる所という意味で飯田の名で呼ばれたものと思われる。事実良田の広がる地域であり、久津良名としては重要な所であったと考えられる。「飯」は「いい」と呼び、米のことである。

飯　田

013 生目（いきめ） 宮崎市　地図1−C−4

生目神社祭神の一つに藤原景清（ふじわらのかげきよ）がある。景清は平安時代末期の平家方の武将。壇ノ浦（だんのうら）の戦い後、源氏に降参し後に絶食して亡くなったとされている。景清は謡曲（ようきょく）や能、歌舞伎などに脚色されて全国に知られるようになった。それらによると景清は日向国に来るが、源氏の栄える世を見るのは忍びないと、下北方（宮崎市）の景清廟で両眼を抉（えぐ）って投げたところ、現在の生目神社がある所まで飛び、まだ眼が生きていたという。それが地名や社名となったと伝えている。別説にイクメイリヒコイサチ（11代・垂仁天皇）を祭ったからともいう。

生目神社

014 石峰（いしみね） 国富町　地図2−C−6

森永地区の北方に標高約120メートルの山があり、石峰と呼ばれている。頂上に県指定天然記念物の森永化石群がある。この一帯は硬い岩がかたまって地表に出ていて奇怪な景色となっている。これらは地質時代[※1]の新第３紀の中新世の半ば以降にできたといわれ、およそ１億5000万年〜1000万年前に堆積（たいせき）した宮崎層群からなっている。岩には無数の二枚貝や巻貝の破片が含まれている。化石は貝の死後、水に流され堆積したもので化石床（かせきしょう）という。これらの石が出ているので、石峰と呼ばれたのであろう。

山頂の岩石の中の化石群

※1 地球の歴史で、地質を手がかりにして考えられた、大昔から現在までの時代。

015 石山（いしやま） 都城市高城町　地図3−B−3

石山の地名と関わりがあるのは石山観音寺（かんのんでら）である。この寺を開いたのは、応永６年（1399）ごろ遠州（静岡県）浜松から来た旅の僧・実庵（じつあん）で、曹洞宗（そうとうしゅう）の寺として開いた。本尊（ほんぞん）[※2]は江州（滋賀県）石山寺の本尊と同じ如意輪観音（にょいりんかんのん）だから石山寺と名付けたという。昭和６年（1931）発行の『宮崎県史蹟調査第８輯（みやざきけんしせきちょうさだい8しゅう）』は、石山寺の本尊は、江州石山寺の本尊と同じ如意輪観音だから、この地を石山村というのも、石山寺の名称からのものであろうと記している。

※2 中心になる仏様。

石山観音堂

016 石山戦場川原（千町川原）（いしやませんじょうかわら） 都城市高城町　地図3−B−3

国道10号に沿った石山片前公民館前の広い川原である。南北朝時代、高城と石山城を守っていた南朝方肝付兼重（きもつきかねしげ）は足利尊氏（あしかがたかうじ）の命（めい）をうけた畠山直顕（はたけやまただあき）軍に破れ大隅の高山に敗走した。17年後の正平13年（1358）11月、有名な戦記物語「太平記」[※1]は「菊池肥後守武光4000余騎にて畠山直顕親子ノ守ル石山城ヲ夜昼17日間攻メ敗走サセタ」と書いている。直顕親子は志布志に敗走した。その戦場跡で、千町川原といっていたのを戦場川原というようになった。

※1 応永年間（1370）ごろ書かれた本。

戦場川原

017 一万城（いちまんじょう） 都城市　地図3−D−6

都城市街地の東南約２キロメートルの地を一万城という。北よりを柳川原川、南の境を姫城川が流れている。戦国時代、一万の大軍で攻めて来た伊東氏を、梅北城主は近くの小鷹原（こたかばる）で迎え撃（むかえう）った。深い沼地に白砂を敷き、林の中に兵を伏せ、作り物の白鷺（しらさぎ）を置いて無人のように欺（あざむ）き、伊東軍の一万の兵を誘い出して大いに破った戦場跡なので、一万場の名が起こったといわれ、今は一万城と書いている。現在、地域の中央には一万城団地が広がっている。

一万城団地

018 一里山・小田元（いちりやま・こだもと） 宮崎市高岡町　地図2−D−5

現在の小田元・久木野公民館のある高台一帯を総称して一里山という。昔はこの一帯はうっそうと茂った深い山で、その広さは一里（4キロメートル）の山道を歩いても尽きないほどだったので、一里山の地名が付けられたという。

小田元（こだもと）というようになったのは、現在の小田元の中央に約30坪ほどの小さな田んぼがあり、誰言うことなく小田元というようになった。小さな田のある所という意味である。今はその田んぼはない。

一里山入口

019 犬熊（いぬくま） 国富町　地図1−A−2

本庄の万福寺には国指定重要文化財の「木造阿弥陀如来像（もくぞうあみだにょらいぞう）」などがある。縁起書（えんぎしょ）[※2]によれば大昔、山幸彦がこの地で狩をされた時、休息されると連れていた犬が狂ったように吠（ほ）え、今にも襲（おそ）いかかるように思われた。犬は山幸彦の後にいる熊を必死で教えようとしたのだが気が付かず、山幸彦は弓矢で犬を射殺してしまった。熊に気付いた山幸彦はすばやく熊を撃ち取った。山幸彦は犬を射殺したこと

万福寺の山門

※2 神社や寺院の起こりを書いたもの。

万福寺の木造阿弥陀如来像（もくぞうあみだにょらいぞう）

三弓堂（みつゆみどう）の木像薬師如来坐像（やくしにょらいざぞう）

を悔(く)やみ、弓と矢を三つに折って、その地に埋めた。このことから犬熊と呼ぶようになり、後世の人が三弓堂(みつゆみどう)というお堂を建てた。堂には県指定文化財「木像聖観音像(もくぞうしょうかんのんぞう)」などがあり、仏教文化が栄えていたことがうかがわれる。

020 犬ノ馬場(いぬのばば) 宮崎市 地図1−C−4

馬場は馬の調練場(ちょうれんじょう)とか競馬場の意味がある。犬ノ馬場の近くに高蝉城(たかせびじょう)や石塚城(いしづかじょう)があったので武術の鍛錬場があったと思われる。石塚城は高蝉城の北約700メートルの所にあり、城主は門川伊東氏の6世の孫伊東祐武(すけたけ)で石塚殿と呼ばれた。伊東氏48城の一つ。今は、城ヶ丘団地になっている。なお、高蝉城跡は生目南中学校東の丘陵にある。

021 射場川原(いばがわら) 綾町 地図2−C−5

綾盆地(ぼんち)は綾南川(本庄川)と綾北川の間の沖積地(ちゅうせきち)※1で、川にちなむ地名が多い。射場川原は綾盆地の綾北川にかかる小田爪(こたつめ)橋のやや上流の地名で、射場のある川原の意味である。地元では「いばごら」という。江戸時代には弓の練習や流鏑馬(やぶさめ)※2などが行われた。カワラは水がかれて砂や石ころなどの多い川沿いの平地を意味する。

022 今町(いままち) 都城市 地図3−D−5

今町の地名のいわれは不明であるが、一里塚としては九州で唯一の国指定史跡の「今町一里塚」がある。旧薩摩藩鹿児島の「札の辻」を起点とするもので、都城より一里(約4キロメートル)、並木道の続く志布志街道(現国道269号)の今町の外れ、鹿児島の末吉町との境の近くに築かれている、貴重な文化財である。近くの有里には、大淀川から取水した高木原用水路※3の取水口(水門)があるが、用水路の廃止により閉じられた。今町は、今繁盛している町の意味がある。

023 入野(いりの) 綾町の大字名 地図2−C−6

綾町大字(あざ)名の一つで、主として綾盆地の周辺の地域(綾北川左岸東北部・綾南川右岸西部・綾南川右岸東南部など)をさす。江戸時代から明治17年(1884)の綾村との合併までは高岡郷入野村であった。入野は山や谷の奥に入り込んだ原野の意味である。言い伝えでは高千穂神社の祭神である三毛入野命(ミケイリヌノミコト)※4がこの地に滞在されたことにちなむという。

う

024 浮島(うきしま) 国富町 地図1−A−1

県道南俣宮崎線のIT関連工場の西北側カーブ下の田の中に、木立に囲まれた小島があり、その昔本庄川から流れ着いたという弁天様が祭られている。御社(おやしろ)を造ると度重なる洪水にも水に浸からないので、「浮島」の地名になった。もともと弁天様は、豊作の神様として豊漁や豊年を願っていた。この地域では、娘に必ず三味線とともに手習い、礼儀作法を身に付けさせる風習が残っていたので、学芸の成就(じょうじゅ)を願って、娘を舟に乗せ、三味線を弾かせて参詣する神様になっていた。年頃の若い男女の見合いの場でもあったという。

高蝉城跡

小田爪橋上流の射場川原

※1 川の流れの作用で土砂が積み重なってできた土地。地質時代で沖積世という時代は、ほぼ2万年前から現代までをいう。

※2 馬に乗って走りながら、三ヶ所に立てられた的(まと)につぎつぎと矢を射る競技。

今町一里塚

※3 延長16.4キロメートルで、今は高木原緑道として市民に親しまれている。

※4 ミケイリヌノミコトはカムヤマトイワレヒコ(神武天皇)のすぐ上の兄。ミケは食物の意味。

水田の中にある浮島

025 浮田(うきた) 宮崎市 地図1−C−4

浮田の浮(うき)は蘋、宇木、宇喜、有喜などとともに泥深い地、湿地の意味がある。生目中学校の校舎を建設するためにボーリング調査を行ったところ、地下数十メートルまで泥であったので、昔はこのあたりは湿地であったと思われる。また、荘園制(しょうえんせい)の浮免(うきめん)や近世※1の浮地にちなむものもあるという。浮免とは中世※2の荘園で、税が免除された土地のことで、これらから浮田は湿田であったか、税を免じられた田であったと考えられる。

026 牛之脛(うしのすね) 都城市 地図3−A−1

「牛之脛」は、元は西岳町の一部である夏尾町にある。その昔神武天皇が若いころ、このあたりを通ったとき、乗っていた牛が泥沼に入り込み脛(すね)から腹まで埋まってしまい、なかなか這(は)い上がることができずに苦労したという伝説から地名が付いたといわれている。

027 牛之峠(うしのとうげ) 三股町 地図3−D−4

牛之峠は、三股から南那珂郡(みなみなかぐん)へ通じる鰐塚山(わにつかやま)の尾根にある峠(とうげ)で、明治の末まで旅人が往来していた。尾根の東西が2里(8km)近くある坂道は、たいへん険しい急坂で、牛の力を借りなければ登れぬ程であったので、この名が起こったといわれている。

牛之峠論所跡(うしのとうげろんしょあと)

この峠の峰(みね)通りには、江戸時代に隣の飫肥藩が建てた「従是東飫肥領」(これより東は飫肥領)という石柱が残っている。薩摩藩が飫肥藩に抗議した両藩の境界論争(寛永4年・1627年始まり)で有名な場所であるから、三股町教育委員会が建てた「牛之峠論所跡」の標識もある。約40年間の論争を経て、ついに幕府の評定所(ひょうじょうじょ)※3の裁定により飫肥藩の勝ちとなり、薩摩藩はやむをえず従うことになった。

028 後河内(うしろかわち) 高原町 地図2−D−3

河内は全国的にある地名。地形的には、川の上流部で山地に囲まれ川が合流してくる所を河内という。後(うしろ)と付けたのは、高原から見て霞権現(かすみごんげん)のある山地の後(うしろ)にあたるから、後河内と呼ばれたのであろう。県内には、宮崎市に北川内、北郷町に北河内、木城町に石河内、高千穂町に河内などがある。

029 内山(うちやま) 宮崎市高岡町 地図1−B−1

現在、高岡町の中心部を占める所にある。城山の南面あたりは、久津良(くつら)といわれたように火山灰に覆(おお)われ、今にも崩(くず)れそうな崖(がけ)や傾斜地が多かったと考えられる。周囲を山でかこまれているので、内山というようになったのであろう。

大淀川の流域にあったので、米の生産に適した土地ではなかったと思われるが、現在の内山地区は高岡郷が置かれて以来の努力の結果、豊かな水田の広がる地域となっている。

藩政時代は、現在の高岡小学校前の道路から北の天ヶ城一帯の高地を含めた飯田村などは、一つの地域として内山と呼ばれていたと考えられる。

浮　田

※1 鎌倉時代から戦国時代の終わりころまで。

※2 秀吉の天下統一期ころから江戸幕府が倒れるころまで。

夏尾町にある牛之脛中心地

牛之峠境界の石柱

※3 争いを解決する役所。

内山にある穆園館駐車場

030 内山（うちやま） 小林市須木　地図2−C−3

奈佐木橋から横谷・須志原を経て、浦之名（うらのみょう）川に沿ってさらに下ると内山集落の中央に出る。今は高岡からの道路が通っているが、昔はほかの地区からの入会（いりあい）※1を許さず、自分たちの村のみで村中入会する林野であったことが、地名の起こりといわれる。

031 梅北（うめきた） 都城市　地図3−D−5

梅北川流域の農業地一帯を指し、農業を主に発達してきた。梅北の地名は、その昔、この地で栄えていた西生寺（さいしょうじ）の尋誉上人（じんよしょうにん）が中国に留学し、持ち帰ってきた梅の木を移植したことに由来するという。地域内には梅の木が散在している。益貫（ますぬき）地区の崖上には梅北城跡もある。

032 浦之名（うらのみょう） 宮崎市高岡町　地図2−D−5

浦之名は、1600年に高岡郷が創設される以前は、野尻郷の内であった。今の野尻町から見た場合、浦（端の方）の意味で浦之名と呼んだか、または名（みょう）には普通名田（みょうで）の主の名があるが、浦と称する人の名田※2であったかも知れない。また、浦ではなく宇良，有良などの名も考えられるが定かではない。

033 瓜田川（うりたがわ） 宮崎市高岡町　地図1−C−2

瓜田川は、穆佐（むかさ）の西北部の山地から流れ出て宮水流地区で大淀川に流れ込む。この川は、山地の多くの谷川が合流して本流となる川で、ある年に豪雨（ごうう）によるうずまきの作用で、かなり大きな淵（ふち）ができたらしい。年数が経つうちに、その淵が埋まり開墾され「淵田」と呼ばれていたのが、いつしか「瓜田」（うりた）に転訛（てんか）した。こうして、この川は瓜田方面から流れて来るので、誰言うとなく「瓜田川」と呼ばれるようになったという。

034 瓜生野（うりゅうの） 宮崎市　地図1−B−4

地元には景行天皇（けいこうてんのう）が同地で休息した際に、立派な瓜（うり）がなっていることに驚かれ「瓜生える野」と言われたことに由来するとの説がある。地名の意味からは「瓜生」には、瓜のように曲がった地形と湿地帯の二つの意味がある。かつては野首、柏田の台地にさえぎられた大淀川が瓜のように北に弧（こ）を描いて流れていたことに由来すると考えられる。

え

035 江後口（えごぐち） 綾町　地図2−C−5

綾盆地南部の綾南川（本庄川）にかかる三本松橋のやや下流右岸の地名。かつては淀（よど）んだ入江で、大水の時などは釣りや網すくいで面白いように魚がとれたという。エゴは川水でけずり取られた谷の窪（くぼ）みや、袋状の入江のことで、江後口は袋状の淀んだ入江の出入り口の意味である。なお、三本松はかつて江後口南部の小高い所に３本の松の大木があったので起こった地名である。

036 江佐原（えさばる） 宮崎市　地図1−D−1

江佐原の江佐は餌（えさ）からきたのではないかと思われる。江佐原の１キロメートルほど東に蛎原（かきわら）という集落があり招餌大明神（おきえだいみょうじん）が祭ってある。招餌（おきえ）とは鷹（たか）などを招（まね）きよせる餌（えさ）をいう。江佐原と蛎原の間は寛文２年（1662）の大地震※1で陥没（かんぼつ）し入り江となった所で、水鳥や鷹などが多く棲息（せいそく）していたと考えられる。権力者へ献上する鷹を獲（と）ったことにちなむ地名と思われる。

※1　一定の地域の住民が、共同で利用する土地のこと。

西生寺跡の石塔群

浦之名小学校前

※2　本来は、中世の荘園で、税金を納める土地の単位のことだが、次第に名主の名前の付いた田を言うようになった。

瓜田ダム

大淀川が大きく曲がる瓜生野地区

037 えべすけ溝（えびすけみぞ） 国富町　地図1−A−1

昔、綾北川と綾南川が合流して平城の崖をけずり深い淵（ふち）ができた。ある時、この岸にりっぱな恵比寿（えびす）様の木像が流れついたので、村人たちは祠（ほこら）を作り祭った。いつしか淵は浅くなり、大きな池になった。村では「えべすけ」と呼んで、子どもたちは水浴びをしたり、大人は農機具や牛馬を洗ったりした。その下流の「えべすけ溝」は金竹（タケ）の根が張って大きなフナやコイ、ナマズの隠れ場所になり、大水が出ても、田んぼが流されることはなかったという。

038 江平（えひら） 宮崎市　地図1−C−5

現在の江平小学校・宮崎西中学校の地は昭和初期までは江平池があり、西池小学校の地には昭和30年頃までは（江平）西池があった。この二つの池はかつての大淀川が流れていた跡であり、いわゆる河跡湖（かせきこ）※2を利用した溜池（ためいけ）だった。かつての川（江）が平らに、つまり土地になった地が江平であり、まさに大淀川の流れの跡を現在に残す地名である。

039 江平（えひら） 都城市高崎町　地図3−A−3

木下川、炭床川流域を江平という。江平は、大淀川の流域で広々とした平地状の台地が散在することから起こった地名という。川沿いは水田が広がり、台地は畑作が多く、谷間に湧き水のある湿地も多く、畜産も盛んである。地域内の前原には、西・北諸県郡内では最大の前方後円墳（県指定）などの高崎古墳群があり、町の古墳祀（こふんさい）※3も毎年続けられている。明治後期に創建された善長寺周辺に農協や郵便局があり江平の中心地である。

お

040 皇子原（おうじばる） 高原町　地図3−B−1

狭野神社（さのじんじゃ）の背後の小高い台地。ここに二つ並び立つ石がある所を、神武天皇の降誕地（こうたんち）であると伝承している。皇子が生まれた所であるから皇子原という。二つ並び立つものは、二上山、二見ヶ浦のように、イザナキ・イザナミ二神にたとえられて、神の霊地（れいち）として信仰されている所が多い。

041 大井手（おおいで） 都城市高城町　地図3−B−6

大井手の地名は、暦応２年（1339）の軍忠状（ぐんちゅうじょう）※4に「大井手御陣」という文字が見えるが、もっと古く三俣院が開かれた平安時代のころからの地名だと思われる。日和城（ひわじょう）前の水田には大量の水が必要であった。そこで東岳川（ひがしだけがわ）に大きな井堰（いぜき）※5を造り、水を引いたのが地名の起こりで、昔は井堰を井手（いで）といっていた。

※1　寛文2年（1662）、宮崎県沖を震源とするマグニチュード7.6の地震が発生し、大津波によって加江田あたりの周囲7里35町が海底に没した。

中央の祠にえびす（田の神）様

※2　川の中流や下流で流れが蛇行して変化すると、本流から取り残された川の一部は、孤立して三ヵ月形の池になる。このような地形を河跡湖、三ヵ月湖などという。

高崎古墳

※3 古墳のお祓（はら）いとお祈り。

皇子原

※4　鎌倉時代から戦国時代にかけて戦いに参加した武士が功をたてた証拠としたもの。

東岳川と大井手地区の水田

※5 川を横切るように「かべ」を造り、せき止めた水を水田へ引き込むためのもの。

042 大岩田（おおいわだ） 都城市　地図3−D−5

都島町と大淀川を挟（はさ）んだ大岩田集落は、かって「大祝い田」といわれ、上層階級の人たちの祝い田であったという。後に大岩田と書き表すようになった。武門の家が多かったというが、国道10号と国道269号の交差する鹿児島方面の交通の要所であり、鹿児島方面に対する防備の要（かなめ）であったと思われる。現在も都城警察署大岩田検問所（けんもんしょ）が設置されている。

大岩田検問所

043 大瀬町（おおせまち・おおぜまち） 宮崎市　地図1−B−4

本庄川と大淀川の二つの川が直線的にぶつかる所で、堤防が造られる前は「瀬」であったと思われる。大瀬は大きな瀬もしくは早い流れの瀬という意味であり、地名の由来に相当する。正式には「おおせまち」であるが、地元では「おおぜまち」と濁（にご）る。明治32（1899）年の『日向案内記』に「柏田及び大瀬町は戸数多からされとも相応の商業ある市街なり」とあり、郡部ではあるが商業者が住んでいたので「まち」であった。

044 太田（おおた） 宮崎市　地図1−D−5

太田、大田、太駄は大きな田という意味で、田畑の面積を計る太閤検地（たいこうけんち）[※1]以前１反の３分の２以上の広さの田を大田といった。大淀川下流右岸の太田は、鎌倉幕府が建久８年（1197）に作らせた土地台帳である『建久図田帳』（けんきゅうずでんちょう）には「大田100町」とあり、昔から広い水田があったことが分かる。現在は商店や住宅が立ち並び広い水田は見られない。

太田観音堂

※1 豊臣秀吉が全国的に行った検知。統一した基準を用いた。この検知で石高制が確立した。

045 大塚（おおつか） 宮崎市　地図1−C−4

古くは大墓（おおつか）といわれていた。塚（つか）は束とか津賀などと書き、意味は土など高く盛り上げて造った墓とか古墳をいう。明治初期、大塚には古墳が約50基あった。昭和12年（1937）には前方後円墳３基、円墳３基、横穴墓１基があり県の史跡に指定されている。つまり、古墳がたくさんある所という意味で大墓、大塚という地名が付いた。

大塚八幡神社

046 大坪（おおつぼ） 宮崎市　地図1−D−4

坪とは田の一画、古代条里制（こだいじょうりせい）[※2]における小区画などをいう。田の区画が多くあったので大を付けて大坪となったと思われる。中世の土地の広さの単位「せまち（畝町）」が多くあるということで大畝町（おおせまち）となった所もある。大坪も大畝町も同じ意味の地名ということができる。

※2 日本において、古代から中世後期にかけて行われた土地区画（管理）制度。ある範囲の土地を約109m間隔で直角に交わる平行線により正方形に区分するという特徴がある。

047 大橋（おおはし） 宮崎市　地図1−C−5

昭和48年から現在に至る町名で１～３丁目がある。昭和32年に架設（かせつ）された宮崎大橋につながる国道10号北側に接することから起こった名称。しかし、大淀川下流域には昭和46年に大淀大橋が架設されており、大橋があるのは同地だけではなかった。昭和56年に一ツ葉大橋、平成９年に平和台大橋が架設されているが、大橋と橋の違いは橋の長さや幅、語呂（ごろ）[※3]などで決定される。

宮崎大橋

※3 言葉のひびきが良いこと。

048 大牟田（おおむた） 都城市高崎町　地図3−A−2

高崎川の中流域に位置し、国道221号が区域の中央を縦断する。高崎川流域の各地に広い水田があり、谷間の水田も古くから開発されていた。牟田とは湿田のことであり、大は広いことを意味するので、大牟田の地名が付いたという。牟田の付く地名では、都城の牟田町や高原町の蒲牟田も似たような環境だったといえる。高崎町内でもっとも田畑の広い所であり、農業の中心地であるといえよう。大牟田総合運動公園も整備され、「たちばな天文台」もある。

農業が盛んな大牟田地区

049 沖水（おきみず） 都城市　地図3−C−3

大淀川の支流に沖水川がある。太古時代から川の流れが変化し、川が洪水の時、水があふれて沖のように見えたことから沖水というようになったという。以前は、暴れ川としてしばしば大洪水が生じたという。その後、河川の改修や堤防の整備で水流も安定し、両岸には田畑や人家が広がっていった。

沖水支所付近

050 御城下（おしろした） 宮崎市　地図1−D−5

曾井城跡（そいじょうせき）の北に御城下という地名がある。字（あざ）図では御城下とあり、字（あざ）名一覧では御城方（おしろかた）となっているが、どちらにしても曾井城にちなむ地名であることは明らかである。曾井城は伊東氏の支族・曾井祐善（そいすけよし）が築城したと伝えられるがその年月は不明。中世には鹿児島の島津氏と日向の伊東氏が争奪（そうだつ）をくり返したが、天正15年（1587）豊臣秀吉の九州平定で功績のあった伊東祐兵（いとうすけたけ）が曾井城を与えられたので、再び伊東氏の領有になった。

御城下と曾井城跡

051 落水（おちみず） 国富町　地図1−A−3

塚原（つかはら）台地の南側の道路沿いに集落があり、その付近を落水（おてみず）ともいう。昔は人家もなく、山法師（やまぼうし）[※1]の修業の地であったという。斜面の中腹に神社があり、その真下あたりから湧き水が落下していた。木脇赤池の祭礼の時など、神馬、神司、関係役員がそろってお清めのために参拝された。このお清めを「潮かかり」といった。ここから少し東に行くと、「浜向」（はまんこう）という字（あざ）名がある。この先の北東側の県道の上にある神社は、目の前に三つの島があるので、三島神社と呼ぶようになったと言われている。

落水（おちみず）右手奥が浜向

※1 野や山で修行をする僧。本来は延暦寺の僧兵をいうが、山伏や修験者と同じような意味。

052 小戸町（おどちょう） 宮崎市　地図1−D−6

昭和26年頃に誕生した町名で、元来の「小戸の橘（たちばな）」に由来すると思われる地名である。現在、同じ「小戸」という名の「小戸神社」は鶴島３丁目にあるが、元は大淀川下流左岸にあり下別府村に鎮座（ちんざ）していた。つまり神話伝説の「小戸」の地は、元来大淀川下流左岸とされており、小戸町がその地に復活したのかも知れない。

小戸神社

現在、大淀川下流左岸に水門の神として鎮座する松熊神社

053 小戸の橘（おどのたちばな） 神話地名

イザナキノミコトが「みそぎはらい」を行ったという神話から出た地名で、『古事記』※1には「日向の橘の小門（おど）の阿波岐原（あわきがはら）」、『日本書紀』には「日向の小戸の橘の檍原」と記されている。かつて宮崎の人々はこの地が大淀川河口付近左岸にあったと信じて止（や）まなかった。門も戸も「と」であり「小さな門・水門」を意味し、橘は「断鼻（たちばな）」の当て字で「台地・自然堤防の崖」などの意味もある。神話の「橘」は地名をかざる言葉でもある。

みそぎはらえ

「国生み」神話で、イザナキが黄泉国（よみのくに）までイザナミを訪ねて行くが、あまりに醜（みにく）い姿を見て、おどろいて逃げ帰り、けがれを落とすために「みそぎ」をした、とある。

阿波岐原にある江田神社

※1 奈良時代初めに作られた。天皇家に伝わる神話と歴史伝説をまとめた本。日本書紀とともに「記・紀」と呼ばれ、歴史の研究には不可欠の書。

054 表馬場・下馬場（おもてばば・しものばば） 宮崎市 地図1−B−3

倉岡城が近くにあるので馬術の鍛錬場があったと思われる。倉岡城は大淀川左岸に独立した丘陵を城取り※2したもので、高さ40メートル、東は川に臨み、南・西・北は水田をめぐらしている。いつ造られたかは不明、応永年間（1394〜1428）には島津久豊がいたが、永禄年間（1558〜1570）には伊東氏の48城の一つになっている。天正５年（1577）伊東氏が豊後へ落ちた後からは再び島津氏の城となった。大淀川の対岸には白糸城があった。

※2 地形を生かして城を造ること。

055 小山田（おやまだ） 宮崎市高岡町 地図1−C−2

山田という地名は各地にあって、その数は何百に及ぶといわれている。それらは文字通り、山の間の田という意味がある。ただ祭神関係の地名もあるという。例えば鹿児島神宮の鎮座地（ちんざち）の内山田・伊勢神宮の宇治山田など。ここの「おやまだ」も穆佐神社（八幡宮）との関わりが考えられる。もともと穆佐郷（むかさごう）の郷社で尊崇（そんすう）の中心であったから神田（しんでん）が広がり、それを御山田（おやまだ）と呼び、小山田と表記したのではないか。

穆佐神社

か

056 梶山（かじやま） 三股町 地図3−C−4

戦国時代から見える地名で当時は加治山とも書いた。しかし、「かじやま」の名の起こりは明らかではない。梶山城は戦国時代の山城で、もとは樺山氏（かばやまし）の居城だったが、応永元年（1394）高城城主・和田正覚（わだしょうかく）と花木城主・高木久家（たかぎひさいえ）が守っていた時、伊東、今川、北原の連合軍に攻められた。その時都城の北郷義久は、和田正覚を助けるため三男久秀（ひさひで）と四男忠通（ただみち）を梶山へ向かわせた。しかし敵の大軍のため兄弟ともに討死した。のちに義久はこの地へ大昌寺を建てて弔（とむら）った。北郷久秀・忠通の五輪塔（ごりんとう）※3が並んで建っている。梶山小学校はこの近くにある。

北郷久秀、忠通の墓

※3 形の異なる石を積み上げた塔。下から四角（地輪）、円（水輪）、三角（火輪）、半月（風輪）、宝珠（空輪）。密教では五つの形は、地・水・火・風・空の宇宙構成要素を表す。

057 柏田（かしわだ） 宮崎市 地図1−B−4

瓜生野村の旧大字（あざ）であるが、元来は大淀川左岸で相生橋北詰（きたづめ）の直純寺（じきじゅんじ）周辺の台地に付けられた字（あざ）名である。天孫降臨（てんそんこうりん）の地である「笠狭（かささ）」が柏田に転訛（てんか）した説もある。その真偽はともかく、柏（＝樫）には堅い木の意味もあり、多くは自然堤防や崖を意味する。地名では語調をよくするために「田」を用いることがあり、「田」があっても必ずしも田んぼを意味するとは限らない。

相生橋と直純寺のある台地

058 春日（かすが） 都城市高城町 地図3−B−6

万寿３年（1026）ごろ太宰府（だざいふ）※1の役人だった平季基（たいらのすえもと）は島津荘（しまづしょう）を開き、関白（かんぱく）藤原頼通（よりみち）に献上（けんじょう）した。そこで藤原氏は氏神（うじがみ）※2である奈良の春日神社を三俣院の守り神様としてここに祭った。それ以後大井手（おおいで）のこのあたり一帯を春日というようになった。

春日神社

※1 約1300年前、当時の太宰府には九州全体を治める「大宰府」（オオミコトモチノツカサ）という大きな役所が置かれていた。

※2 血筋のつながった人々がその先祖として祭る神。

059 勝岡（かつおか） 三股町 地図3−C−6

戦国時代から見える地名である。明応４年（1495）島津氏は三俣院（高城、山之口、勝岡など田畑約100ヘクタール）を伊東氏に譲（ゆず）った。勝岡城もその伊東８城の一つで、都城攻略（こうりゃく）を目指していた伊東氏にとっては都城に近い最も大事な城だったので、伊東尹祐（ただすけ）は家来の荒武三省（あらたけさんせい）に命じて城を改築（かいちく）させ、麓（ふもと）集落もできた。その後都城島津領となり、慶長19年（1614）には本藩が直接治める土地となり、勝岡郷として地頭館（じとうやかた）ができ、郷士（ごうし）※3屋敷跡も残されている。勝岡小学校が城跡下にある。

勝岡は城を造るのにふさわしい地名であるが、その起こりは明らかでない。

勝岡城跡

※3 江戸時代に藩の防備のために置いた在郷武士。日頃は自分の土地を耕作していた。

060 合戦原（かっせんばる） 宮崎市 地図1−D−5

天文10年（1541）、長嶺城主・長倉能登守（ながみねじょうしゅ・ながくらのとのかみ）は、兄の穆佐城主・長倉上総介（むかさじょう・しゅながくらかずさのすけ）とともに、伊東義祐（いとうよしすけ）に謀叛（むほん）を起こしたが討ち死（うちじ）にしたという。その戦があった所を合戦原というようになったと伝える。

大坪町には合戦原のほかに迫合戦原（さこかっせんばる）、加瀬原（かせばる）がある。椎葉村大河内に合戦原（かせばる）という所がある。

大坪町の加瀬原と同じ読み方である。ただ、合戦（かせ）には鹿瀬、笠、加瀬、忰などの文字を当てて、岸とか川ばた、痩（や）せる、痩（や）せ地の意味もある。単に合戦伝承地ということだけでなく椎葉村や大坪町の同名地の地形から痩（や）せ地ということも十分考えられる。

戦前の5万分の1地図

061 蟹町（がにまち） 宮崎市 地図1−D−6

大淀川が一ツ葉入江へと大きく左に曲がる一帯の地名で、戦前の５万分の１地図にも記載されている。地元の人々は「かつて蟹がたくさんいたから蟹町」という。しかし水路が市内にたくさんあった時代には、各地に川蟹はたくさん生息しており、この地だけに蟹が多かったわけではない。地名学的には「カニ」は曲尺（かねじゃく）と同じで「曲がった」の意味であり、蟹股（がにまた）も同様である。

062 金崎（かねざき） 宮崎市 地図1−B−3

金崎神社背後の山を霧島山というが、古くは金之山もしくは大崎山といった。そのため地元では前者の「金」と後者の「崎」をとって金崎となったとの説がある。地名学的には「金（かね）」は、砂鉄に関することや曲がった地形に付けられることが多い。金崎は、大淀川と本庄川に挟（はさ）まれるいわゆる倉岡郷という曲がった土地の先（＝崎）に位置している。

金崎周辺

063 樺山（かばやま） 三股町　地図3−D−6

鎌倉時代からある地名である。南北朝時代の正平６年（1531）島津氏４代忠宗の４男島津資久（すけひさ）が、樺山に来て樺山姓を名乗り樺山城を宮田地の東に築いた。城跡は現在「上米公園」となっており、その最奥に「樺山城跡」の石碑がある。しかし樺山城は山城ではあるが堅固ではなかったので、資久はすぐに梶山城を築きそこに移った。年見川に近い中米満（なかよねみつ）に「樺山どんの墓」といわれる墓石が残っている。樺山は三股の中央地区で、三股小学校もこの地区にある。樺山・梶山などの地名は、樹木に関係のある地名かも知れない。

樺山城跡（上米公園）

064 蒲牟田（かまむた） 高原町　地図2−D−2

牟田というのは湿田のことである。湿田の多い所で、そこにガマ（蒲）のような植物が生えたので、この名称が起こったのであろう。霧島山地の麓には、伏流水（ふくりゅうすい）が山麓（さんろく）部に湧き出るので湿田が各地にある。土地の状況から出た地名である。

065 上北方（かみきたかた） 宮崎市　地図1−B−5

下北方と瓜生野の間に位置する旧大字（あざ）で、瓜生野村に属していた。勅使[※1]が来たので、上官・下官が来たことからそれぞれ「上北方・下北方」となった説や天孫降臨（てんそんこうりん）の際に多くの「神々が来た→かみきた→上北」説がある。しかし、現実的に北方を下北方と上北方に分けた理由は、大淀川沿いの上流と下流の地で区別したものと思われる。

※1 天皇の命令を伝える使者。

066 上倉・下倉（かみくら・しもくら） 宮崎市高岡町　地図1−D−2

江戸時代の末ごろ、倉永村が上・下の２か村に分かれてできた地名である。あわせて倉永地区と呼ばれている。この地区は昔から穀倉地帯（こくそうちたい）として栄え、今でも広大な農地が広がっている。倉（くら）は蔵（くら）で米蔵（こめぐら）を意味する。米作りの盛んなこの地方には米をたくわえる倉庫がたくさん見られたのだろう。

下倉地域

067 上長飯（かみながえ） 都城市　地図3−D−6

ながえは長江のことであり、江は水の集まる所である。この辺りは、東岳に降り注いだ雨が伏水となり地下を通って湧き出し，それが長池となり流れ出して姫城川になったと考えられる。この川を長江と呼び、上流を上長江，下流を下長江と呼ぶようになった。いつから江が飯となったかは明らかでないが、村名になってから飯「え」と書き表している。上長飯小学校近くの小鷹神社（こだかじんじゃ）は、昔から上長飯村の鎮守（ちんじゅ）[※2]として敬（うやま）われている。

小鷹神社

※2 地域の災害から人々を守る神。

068 上野町（かみのまち） 宮崎市　地図1−D−5

1662年の地震で、大淀川河口付近左岸の下別府村にあった小戸神社は水没したために、上別府村へと遷（うつ）し、その地を上野町と称したとされる。元来の上野町は川原町に連続し、橘通りをまたいで約400メートル大淀川に沿って存在していた。上（高い）の土地というよりも、小戸神社が水没を避けて大淀川上流の土地に遷（うつ）したことから単純に「上流の町→上/町→上野町」と称したと思われる。

069 上別府（かみべっぷ・かみのびゅう） 宮崎市　地図1−D−5

現在の宮崎市の中心市街地とほぼ同じ地域の呼び名で、藩政時代から村の名前として、明治22年以後は大字（あざ）として昭和２年まで存在した。別府（＝別符）とは本来の荘園ではなく、別に許可（＝符）を与えられた開墾地のことで、同地は当初は小戸別府、やがて渡別府と呼ばれた。宮崎では別府を「びゅう」と発音するが、九州各地では「びゅ、べふ、びょ」など様々である。

070 紙屋（かみや） 野尻町　地図2−C−4

元は神谷（こうや）氏から起こり、豊後国（ぶんごのくに）の流れを汲（く）む緒方氏が移住し、紙屋と号したので紙屋となった。

紙屋小学校の近くに紙屋関所跡の碑がある。紙屋関所は薩摩藩9ヵ関の一つとして重視されていた。ここは宮崎方面の天領[※1]に備えたもので、犬1匹でも通すのに通行手形が必要だったといわれている。

紙屋関所跡

※1 天下人（将軍）の領地という意味で、幕府が直接治める領地。

071 唐崎（からさき） 宮崎市高岡町　地図2−D−5

大淀川の急流が山下から直角に東に折れ、直ちに西へと流れを変え、ついにはそこから蛇行を繰（く）り返すその先端に位置している。そのため、小石が多くいわゆる唐州（からす）といわれる場所の突端に位置していたので、唐崎と言われている。唐州の先という意味である。

唐崎の唐州

072 仮屋（かりや） 宮崎市　地図1−B−4

宮の馬場（跡江）の西端にある。江戸時代、跡江は延岡藩・内藤氏の所領だった。延岡から遠く離れた飛び地だったので下北（宮崎市）の代官がこの地方を治めた。年貢を集める時期に代官は跡江に出向いたという。そのとき泊（と）まった所が仮屋で、後にそれが地名になったと伝えられている。

地頭仮屋跡

073 仮屋（かりや） 都城市高崎町　地図3−A−2

仮屋の地名は、地区内の地頭仮屋の史跡に関係する。前田迫川の南西を通る国道には 仮屋橋が架かっている。島津本藩の外城（とじょう）時代、高崎郷を治めていた地頭は高崎に年中駐在することなく、郷の三役たちが代役をしたので本藩の掛け持ち地頭であったから仮屋といった。地頭屋敷跡は狭い空き地になり、標柱も文字が欠け史跡としては改善が必要であろう。

川口バス停

074 川口（かわぐち） 宮崎市高岡町　地図2−D−6

川の流れ込む所に出来る地名。浦之名川（うらのみょうがわ）が大淀川に合流する所に、川口の地名がある。浦之名川は須木に源を発し本流大淀川に注ぐ一級河川。流域に谷底平野は見られず、わずかに須木の小平野をのぞいてはほとんどが深いＶ字谷である。

075 川中（かわなか） 綾町南俣　地図2−B−4

綾町中心部（役場）から西へ主要地方道宮崎須木線を約15キロメートルさかのぼった所の、川中キャンプ場あたりの山地の地名。川中は川上や川下に対して綾南川（本庄川）の中流域の意味。川中キャンプ場から山道を約１キロメートル登った所に川中神社があり、阿弥陀如来坐像（あみだにょらいざぞう）が安置されている。南側の斜面には綾町の梅の名所・川中梅林がある。

綾町南俣の川中神社

076 川端（かわばた） 宮崎市　地図1−B−5

大淀川左岸上北方の「大淀川学習館・里山の楽校」[※1]より上流側、県道宮崎須木線沿いの地名で上北方の字（あざ）名である。川端は文字のごとく川の横（端）の土地の意味であり、低地帯と考えがちである。しかし、地名学的には端（はた）は発音が同じ「畑（はた）」の意味もあり、自然堤防[※2]などでできた小高い土地も含むことがある。同地にでは「里山の楽校」から上流に連続する丘陵地も含んだ地名である。

077 河骨（かわほね） 宮崎市高岡町　地図1−B−2

永享４年（1432）６月島津忠国（ただくに）の軍は、都於郡（とのこおりぐん）六野原で伊東祐立（すけはる）の軍と戦って、内山に退いた。７月14日両軍河骨（かわほね）に戦って薩摩軍は大敗した。このとき飯田川は、両軍の戦死者で埋められたという。それ以来、この場所は河骨といわれている。

078 川原町（かわらまち） 宮崎市　地図1−D−5

かつては上野町、大工町とともに上別府村の字（あざ）地であったが、明治８年（1875）に分離独立し、現在に至っている。川原とは、水が流れていなくて砂や石が表面に出ている所をいう。大淀川左岸において小島・松山・瀬頭に連続する川沿いの土地で、地名学的には浅瀬を意味する瀬頭よりも高地帯で、松山よりも低地帯であったと考えられる。

079 観音瀧（かんのんだき） 小林市須木　地図2−B−3

ままこ〈継子〉滝とも言われる。江戸時代に書かれた『三国名勝図会』にも「須木瀑布（すきのたき）」として見事な木版画が載（の）っている。昔から須木を代表する名勝で、昭和８年（1933）には県の名勝に指定された。かつては53メートルの高さから落下していた瀧（たき）も、戦後昭和の小野ダム完成によって、その瀧は高さが低くなりみすぼらしい瀧となった。瀧の上に観音像（かんのんぞう）が置かれているところから、観音瀧と名付けられたといわれる。

ままこ滝伝説

かつて、ある山師の嫁（よめ）が亡くなった。この山師[※3]には女の子がひとりおり、山師は後妻（ごさい）を迎えたが、この女の子にとっての継母（ままはは）は、だんだん女の子にいじわるをするようになり、女の子はつらい日々を送っていた。あるとき、瀧の上に遊びに行こうと母から誘われた女の子は、うれしさに、いつの間にかひもで継母と自分の着物を結んでいた。それとは知らぬ継母は、ころあいをみて瀧の上から女の子を突き落とした。着物は、ひもで結ばれていたから、継母も女の子もろとも谷底に落ちて、還（かえ）らぬ人となったという。後世人々は、継子瀧（ままこだき）と呼んで女の子の冥福（めいふく）を祈ったといわれている。

080 勘場（かんば） 国富町　地図1−A−2

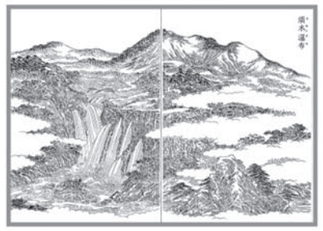
勘定場が詰まって地名になった事例。昔は道路が整備できず、水運に頼って人や物が運ばれることが多かった。各川筋の船着場で人・物が舟に乗せられ、決められた運賃、代金が支払われ、不審な人物、品物があれば番所で調べられるよう決められていた。本庄川では淵脇勘場、榎瀬勘場、吉野勘場、三名川では宮本勘場、大田原勘場などがあり、これらの地域の特産品を宮崎、赤江方面に送り、宮崎と関西方面では盛んな取り引きがあった。

※1「大淀川学習館」は、自然観察・自然体験や環境教育など大淀川の自然を広く学習・体験でき、子どもも大人も楽しめる施設。そのすぐ隣に里山の復元をめざし、森と水と人との関係を学ぶ「里山の楽校」がある。

※2 川が洪水になって溢れると、多量の土砂を河道の両側に堆積する。それらの土砂は、長い間に河道に沿って堤防状の地形を造る。
　このようにして出来た川沿いの地形を、自然堤防という。平地に住む人々は、自然堤防に居住してきたが、現代では自然堤防より河道に近い低地まで、堤防を造成して宅地として利用するようになっている。

河　骨

観音瀧（ままこ滝）


『三国名勝図会』に描かれた観音瀧

※3 山の立木の売り買いや鉱山の採掘事業を経営する人。山主や山で仕事をする人を指す場合もある。

本庄橋の右手あたりが勘場跡

081 観音瀬（かんのんぜ） 都城市高城町　地図3−A−3

観音瀬はよく知られた名所であるが、名前の由来は定かではない。広大な都城盆地の水を１ヵ所に集め漏斗口（ろうとぐち）のように吐（は）き出す所である。ここは滝（たき）になっており、急流で眺めもよい。観音瀬という名称（めいしょう）は江戸時代以前からのものと思われる。また、高崎側に昭和13年（1938）のダム建設のころ中国から持ち帰ったという仏像を祭った石の祠（ほこら）堂がある。（これはダム工事で亡くなった人を供養するための祠（ほこら）堂で、中国の当時の奉天から持ち帰ったもので、地名とは関係ない。）

都城領主島津久倫（ひさとも）は、ここを開削（かいさく）して舟の通る水路を開こうとした。家来の藤崎五百治公寛（いおじきみひろ）に命じて、寛政３年（1791）に着工し、同６年完成した。その後明治22年（1889）から２年間の県営工事でさらに右岸側に幅約２メートル、長さ約100メートルの水路を開削した。しかし、大正13年（1924）電気工業株式会社がこの観音瀬に水力発電のための堰堤（えんてい）を造った。それ以後上流の水田地帯は台風や大雨のたびに大被害を受けた。昭和36年（1961）約４キロメートル下流に新設ダム完工。轟ダムは撤去（てっきょ）され、昔の開削あとが見られるようになった。平成17年２月県指定史跡として指定された。

手前 寛政水路・後 明治水路の開削跡

観音瀬開通と藤崎公寛

開通の当日、藤崎公寛（ふじさききみひろ）は、早瀬船（はやせぶね）[※1]が荷を積んで下っていく姿を岩の上で裃（かみしも）姿で刀を差して正座して待った。岩に当たって舟が沈んだら、その場で切腹して責任をとる覚悟であった。

船頭の櫓（ろ）さばきや竿（さお）の操り方一つで、無事に川下へ下っていく舟を見届けることができ、皆は大いに喜び合った。

※1 流れの速い川で使用する幅の狭い舟。

絵　故・片ノ坂 登

高岡から河口に向かった帆かけ舟
（天ヶ城歴史民俗資料館に展示）

轟（とどろ）ダムによる洪水被害と撤去（てっきょ）運動

大正13年（1924）に、民間の電気工業会社が、大淀川の観音瀬（轟）下流に堰堤（えんてい）[※2]を造り、高崎側に発電用の導水路（どうすいろ）を設置して、笛水の前山に発電所が建設された。しかし、その後ダムの上流地域では、大雨などによる大洪水がしばしば起こるようになり、轟（とどろ）ダムが原因ではないかと大問題になり、高崎町はじめ周辺の町村でダムの撤去運動が県もまきこんで盛んになった。その結果、昭和36年（1961）話し合いにより轟ダムは撤去され、翌年轟ダム跡記念碑が川岸に建立された。その後、昭和42年（1967）、下流に岩瀬ダムと大淀川第一発電所が建設されたが、この時、笛水の椎屋地区はダムの中に水没し住民は各地に移住した。

昭和36年に撤去された轟ダム

※2 水流をせきとめるコンクリートの堤。

き

082 木浦木（きうらぎ） 小林市　地図2−A−2

小林の最奥部にあり、木材搬出（はんしゅつ）のための木馬路（きうまみち）[※1]が多く作られていたことから、そのように呼ばれるようになったと思われる。能登（のと）半島突端（とったん）にも木浦木海岸、木浦木トンネルの名があり、山の奥の土地という意味と思われる。小林の木浦木も同様の場所にあるから、同じ意味の土地と考えてよいだろう。辺路番所[※2]が置かれていたという。

083 祇園（ぎおん） 宮崎市　地図1−C−5

昭和２年に誕生した祇園町は、同域にある祇園社（現・祇園３丁目）に由来するとの説がある。さらに祇園４丁目の北端は元・下北方町字祇園下という字（あざ）であり、県道南俣宮崎線より北側には今も同じ字（あざ）名が残されている。京都にあこがれ、全国に祇園神社、祇園町は存在しており、祇園社の存在とは無関係に「祇園」という言葉にあこがれ、町名としたのかも知れない。

084 祇園台（ぎおんだい） 宮崎市高岡町　地図1−C−3

ここは、高岡町で最初の大規模住宅造成地で、標高13〜60メートルの小高い山林を切り開いて造成した。地区名はこの地の「祇園」から付けられた。祇園（ぎおん）の地名は、全国各地にあるが、もとは京都の八坂神社（やさかじんじゃ）別名・祇園神社のある周辺の地名をいう。祇園の神が祭ってあるから、祇園の名が付いている。

祇園の神

八坂神社の祭神・牛頭（ごず）天王はスサノオノミコトとおなじ人ともいう。牛頭天王は、諸行無常（しょぎょうむじょう）と鳴ることで知られるインドの祇園精舎（ぎおんしょうじゃ）の鐘の守護神であるともいう。八坂神社を祇園社というのもここからきている。

085 北川内（きたかわち） 宮崎市　地図1−D−4

全国的には川内、河内などの字をあて、カワチやコウチなどと読み、文字通り川の内で、川の流域の平地である。宮崎県内では川の近くや川が蛇行している所に多くあり、呼び方は「カワチ」「ガワチ」がほとんど、「コウチ」という呼び方は奥川内（北浦町）がある。県内には川内・河内の付いた地名が61か所、宮崎市には６ヶ所ある。

086 北俣・南俣（きたまた・みなみまた） 綾町の大字名　地図2−C−6

大淀川の支流本庄川をさかのぼると、国富町と綾町の境で綾南川（本庄川）と綾北川の二俣（また）に分かれる。綾町大字南俣は綾南川筋（すじ）の地域、大字北俣は綾北川筋の地域である。国富町深年川上流の三名（さんみょう）川筋にも同じ地名があり、区別するため八代南俣（南俣川筋＝三名川上流）・八代北俣（北俣川筋）という。「俣」は「俟（し〜待つの意〜）」の字形（じけい）を変えた日本製の漢字（国字）で、川や道などの分かれめの地形をさす。

087 京塚（きょうつか） 宮崎市　地図1−D−5

経塚（きょうづか）の経の字が京に変わったもの。経塚は経文や経筒を埋めた塚、またはそういう伝承のある塚をいう。仏教が衰（あとろ）えると考えた

※1 木材運び出しのため、丸太〈盤木（ばんぎ）〉を敷き並べ木馬を滑走させる道。

※2 江戸時代には、本道（街道・往還）の番所や関所が設けられた。
しかし本道以外に、裏道も使われるのでそこに番所を設けることもあった。本道以外のところに設けられた番所を辺路番所という。

祇園台

綾南川（本庄川）と綾北川

ことから、世の中が不安になり経を入れた筒などを埋めて塚にした。中国では隋時代に、日本では平安時代後期から鎌倉時代にかけて流行した。宮崎市郡司分の霧島山では金属製の経筒が出土し、県内でも17個出土している。

088 霧島（きりしま） 宮崎市　地図1−C−5

昭和２年に霧島町が誕生しているが、南九州では霧島信仰[※1]が強く、各地に霧島神社・霧島社があり、同町周辺にもかつては霧島社があった。さらにかつて同域に霧島前、霧島という字（あざ）名があり、現在も皇宮屋（こぐや）付近に霧島という字（あざ）名がある。どの霧島が同地の由来かはわからないが、どの字（あざ）名も霧島信仰が関与していたことは間違いないだろう。

089 霧島（きりしま） 宮崎市　地図1−C−4

近くに建立されていた霧島寺にちなむものと思われる。霧島寺は明治初めに廃寺となった禅宗（ぜんしゅう）の寺で、大淀川右岸の堤防下に仁王像や供養塔（くようとう）が残っている。寺名ははるか西方にある霧島山に由来する。県内には広く霧島山信仰があり、霧島神社とか小祠を祭って霧島山と称する所が各地に存在する。それらの神社からは霧島山が望めるか、霧島山が見えない地域はその方角を向いているという。

090 木脇（きわき） 国富町　地図1−A−3

伊東祐頼（すけより）は建長４年（1252）に、初めて日向の領地に赴任（ふにん）した。日向に来る前に遠江國（静岡県）「久野脇」を領地として「きわき又八郎」と名乗っていて、このことから「木の脇」の地名になった説がある。また、この地は昔から、養蚕（ようさん）[※2]の盛んな所で、絹分（きぬわけ）とか絹脇（きぬわき）と呼ばれていたことも、ここの地名に関わりがあるのではないかともいわれている。

※1 日本では古くから山を神として祭る山岳信仰があり、霧島山も神として崇（あが）められた。10世紀の半ばに性空上人（しょうくうしょうにん）が入山してから特に盛んになり、六所権現の形となった。権現とは、神仏習合の考え方で、仏が化身して日本の神として現れることをいう。

霧島寺跡石塔群

木脇小学校前の日待・月待・庚申（こうしん）待の併刻塔（いろいろの石塔が併せて建っている）。

※2 絹織物に使う生糸は「まゆ」から作る。その「まゆ」をとるために「カイコ」を飼うこと。

霧島連山全景

く

091 崩瀬・平瀬（くえんせ・ひらせ） 綾町　地図2−C−5

綾町中心部（役場）から西北に県道田代八重綾線を６キロメートル余りさかのぼった所の、綾北川Ｖ字渓谷の流域地名。昭和45年（1970）４月に急傾斜地崩壊（ほうかい）対策危険区域に指定された。「崩瀬」は崖地を流れる瀬の意味。崩瀬の１キロメートルほど下流にある「平瀬」も「崩瀬」と同様の地形であり、同様の意味であろう。あるいは、ヒラ（急傾斜地）・セ（狭い所）、またはヒラ（平らな）セ（瀬）の意味も考えられる。

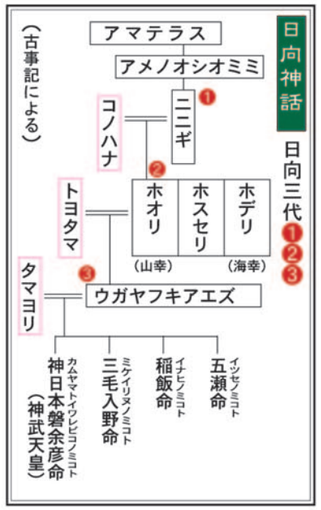
綾北川Ｖ字渓谷の平瀬

092 久木ヶ尾（くきがお） 綾町　地図2−C−6

綾盆地綾北川下流北部の山地の地名。久木ヶ尾はミケイリヌノミコト（三毛入野尊）が数年間宮原に住まわれた時の地元の伝説にちなむという。

ある日、ミケイリヌノミコトが川で釣りをしていると、上流の淵（ふち）近くに住む童女の化身（けしん）が現われて助けを求めた。ミコトはさっそく淵に住む大蛇の九鬼王（くきおう）を退治したが、不思議にも一夜にしてもとの体にもどり、また悪事をなした。困ったミコトが天の神にうかがいを立てると、「頭部と手足を百尋（ひゃくひろ）※1離して埋め、頭部を埋めた所にお宮を建て祭事に少女を奉仕させよ」とのお告げがあった。その通りにすると、九鬼王の怨霊（おんりょう）はしずまり、童女の化身はもとの姫の姿にもどり、ミコトの妃（きさき）になったという。九鬼王にちなむ久木ヶ尾の淵は、今は灌漑用の池として使われている（公民館報「亜椰」平成３年12月、松元捨男）。

久木ヶ尾は洞穴のある尾根、あるいはクヌギの生えた尾根の意味であろう。



※1 尋（ひろ）は長さの単位で、両手を左右に広げた時の手先から手先までの距離。普通1.5〜1.8メートルぐらい。

093 郡司分（ぐじぶん） 宮崎市　地図1−D−1

郡司分は建久８年（1197）の『建久図田帳』に出てくる地名。郡司（ぐんじ）は律令制（りつりょうせい）の郡政務を執った役人で、国司の下にあって郡を治めた役人のことをいう。郡司分は国富荘の中心となった地域だったので、郡を治める役人がいたことが考えられる。当時の役人郡司にちなむ地名と思われる。現在でも郡司姓の人がいるが先祖は郡司の役にあった人といわれる。

094 楠見（くすみ） 宮崎市高岡町　地図1−C−1

広大な広葉樹林（こうようじゅりん）が広がり、昔は林業が盛んで集落周辺に炭窯（すみがま）があり、山からあがる煙はこの地区の風物詩となっていた。昭和30年代までは樟脳（しょうのう）工場があったことから、広葉樹林帯にはたくさんのクスノキ（楠）がおい茂っていたと思われる。植物分布から付いた地名ではないだろうか。今は竹林が楠見の代名詞になっていると地区の人々は語っている。

楠見地域

095 国富（くどみ） 宮崎市　地図1−D−1

鎌倉時代初期の日向国には、島津荘（しまづのしょう）、宇佐宮領（うさぐうりょう）、国富荘（くどみのしょう）の三大荘園があった。国富荘は面積1,502町で、宮崎郡・那珂郡・児湯郡にわたって分布し、宮崎平野の中心部にあった。その中に国富本郷240町があり、この国富が地名なったものである。

096 国見山（くにみやま） 都城市高城町　地図3−A−4

国見峠ともいう。有水川上流岩屋野から約４キロメートル登った標高407メートルの、薩摩街道※2では最も高い所である。慶長５年（1600）関ヶ原の役後、島津義弘が去川の関の前面に関外４郷（高岡、穆佐（むかさ）、倉岡、綾）を設け、高岡、穆佐などと鹿児島との行き来が多くなったころからの地名であろう。この山の位置から広く国が見渡せる意味である。

去川の関を通って高岡や上方（かみがた）へ向かう旅人は、ここから都城盆地や、はるかに桜島をながめ故郷との別れを惜しみ、薩摩へ向かって旅してきた人は、眼下に広がる故郷を見て喜んだという。ここは旅人の休けい所であり、昔は茶店もあった。国見山（岳）、国見峠は全国的に分布する。

※2 鹿児島から福山、都城、高城、国見峠を通って去川に出、高岡から佐土原に通じていた藩政時代の幹線道路。

国見峠の山の神

097 倉岡（くらおか） 宮崎市　地図1−B−3

『三国名勝図会』には、「同地の諸所の丘には土を穿（うが）いて窟居（くっきょ）した跡が多くあり、倉岡の名もこれによって起こった」と記されている。つまり、丘に倉（＝家？）が数多くあったことが倉岡の地名由来であるが、地名の意味からは倉は「崖」の意味が強い。これに従えば倉岡は崖で切り立った丘陵地を意味し、『三国名勝図会』の示す倉岡古墳群の丘に名付けられたものと思われる。

三名川から蔵西まで水路があった

098 蔵西（くらにし） 国富町　地図1−A−3

東諸県各地と宮崎地区をつなぐ水・陸交通の要所は太田原であった。明治30年に木製の橋が架けられたが、それ以前は渡し舟が活躍した。現在の橋から200メートルほど下に太田原の「渡し場」※1があり、そこから水路が引かれ西北に倉庫が立ち並び、「蔵西」と言った。今、太田原橋の西側には「大蔵元」、さらにその西隣に「万所」＝政所（まんどころ）＝船着場倉庫の事務所などの字（あざ）名が残っている。

※1「渡し舟」が発着する場所

蔵　原

099 蔵原町（くらはらちょう） 都城市　地図3−D−5

「くらバイ」とも呼び「倉原」とも書いた。都城では原を「ハイ」とも呼び、野や畑の広く続いている所をいう。地名の由来は江戸期の「倉之馬場」に発するものであろう。この中にポツンと米倉ができたから蔵原と呼んだ。今は病院が多く住宅地となっている。

蔵元「地名の碑」

100 蔵元（くらもと） 都城市高崎町　地図3−A−3

縄瀬地区の大淀川の左岸、高城町との境に蔵元橋が架かっている。藩政時代、高崎郷（たかさきごう）の縄瀬村は、鹿児島の垂水（たるみず）島津領に属（ぞく）していて、１万５千石の内１千３百石余の飛び地（とびち〜藩外の領地〜）であったことがある。そのための大きな米倉があったので蔵元という地名が生じたという。平成15年（2005）地元の高齢者会により、蔵元橋の近くの三さ路の角地に「蔵元地名之碑」の記念碑が建立されている。

101 栗須（くりす） 野尻町　地図2−C−3

三ヶ野山の中心は栗須で、城の下川の下流は左カーブになっており、そのような地形の所が栗須と呼ばれた。東麓の岩瀬川沿いにも小字（あざ）黒須があり、小林にも栗須野があり同じような地形である。

こ

102 神下（こうげ） 綾町　地図2−C−5

国富町から綾町に入って川久保橋を渡り、西へ１キロメートル余り行った主要地方道宮崎須木線の北側あたりの地名。19世紀の初めには「高下」とあり、幕末頃から「神下」となったらしい。『日向地誌』には「神下　郷鳴ノ西ニ接ス

家24戸」とある。高下はコーゲ（芝草）の意味で、芝の多い土地や草原になっている所を意味する。江戸時代の頃の「高下」は短い草の生えた畠にも水田にも開きにくい土地であったのであろう。本県では川・河はコー・ゴーと発音する地名が多いから、コウゲ（川下・河下）にはカワシモの意味も考えられる。

103 郡元（こおりもと） 都城市　地図3−C−6

北の境を沖水川が西流する。国道269号が沖水川に架かる東郡元橋を経て縦断している。平安時代「島津」と呼ばれ、当地周辺が全国最大の荘園「島津の荘」の中心であったことから郡の元（地方の中心地）と呼んだと思われる。鎌倉時代に荘園の役人としてやってきた惟宗忠久（これむねただひさ）は、島津の地名を自分の姓とした。忠久の館跡地には島津之荘発祥（はっしょう〜初めての起こり〜）の地の碑と、祝吉御所跡記念碑文が建立されている。

島津忠久と祝吉御所跡（しまづただひさといわよしごしょあと） 都城市

島津家始祖惟宗忠久は、一説には源頼朝の子の一人といわれる。建久７年（1196）頼朝から日向・薩摩・大隅の三州守護職（しゅごしょく）※1として、最初は薩摩の出水郷（いずみごう）の木牟礼城（きむれじょう）に入り、翌年、安久の島津荘堀内御所を経て、祝吉に館を建てて治所とした。ここに居ること２年で鹿児島に去り、晩年は鎌倉で死んだといわれ、その墓は頼朝の墓の近くにある。

祝吉御所跡

※1　頼朝は全国を治めるため、ご家人の中から有力な者を守護に任命し国ごとに配置した。守護の主な仕事は、幕府に反逆する者や悪いことをした者を捕らえたり、朝廷を警護することだった。後に政治も行った。

104 五ヶ所・十ヶ所（ごかしょ・じゅっかしょ） 綾町　地図2−C−5

綾盆地南部の綾南川橋の上流・下流辺りの地名で、景行天皇の熊襲征討（くまそせいとう）※2の伝説にちなむ。五ヶ所は熊襲軍が綾南川の南岸に５本の旗を立てた所、十ヶ所は天皇軍が北岸に10本の旗を立てた所、また両軍が入り乱れて戦った川を乱川という。地元では五ヶ所（せ）・十ヶ所（せ）という。『日向地誌』に「十ヶ所（せ）渡　綾南川ニアリ幅一町平水深二尺余…冬月一本木橋ヲ架ス」とある。所（せ）は瀬（泡立つ浅い所・狭い所）の意味もあるか。

綾南川橋下流の十ヶ所あたり

※2　支配に服さなかったクマソタケルをヤマトタケルノミコトが征討した伝説。

105 九瀬（ここせ） 小林市須木　地図2−A−2

本庄川の支流や八重尾川と九瀬川の合流点が、下九瀬の中心部で、ここから九瀬川をさかのぼると上九瀬。両集落を合わせて九瀬と呼ぶ。九瀬の九というのは多いとか集まるの意で、古文書には、文化・天保のころから九瀬と書かれている。麓（ふもと）を表（おもて）、この九瀬を裏（うら）と呼んでいたと伝えられている。麓にやって来る九瀬の人々を「裏の誰々が来る」と麓ではいったと伝えられている。この表（おもて）から裏（うら）に行くのに九つの瀬※3（浅瀬）を渡って行ったという。

※3 九つの瀬とは（1）宮の瀬（2）平野（3）深瀬中河間（田代氏宅と天石氏宅の間）（4）田尻（5）釘水流（6）吐合（7）現在の島田町保育園の下（8）こやし坂（9）現在の下九瀬の中心部八重楢男氏宅前をいう。

106 小島（こじま） 宮崎市　地図1−D−5

大淀大橋から鉄道橋北詰（きたづめ）一帯に位置し、松山に連続する瀬頭村の字（あざ）地であったが、昭和２年から同41年までは宮崎市の町名であった。『日向地誌』には松山から小島に続く長さ550メートルほどの「小島堤」という堤防があったことが記されている。浸水時にもこの付近は小さな島となり、水没しない小高い土地であったことに由来すると思われる。

107 五反田（ごたんだ） 宮崎市　地図1−C−3

五反の田のある所のことで、起源は中世や近世の開墾（かいこん）に伴うもの

のといわれる。五反田は長嶺や生目、本郷北方などにあり、また、六反田も小松、糸原、柏原、古城、本郷南方、郡司分などにある。八反田は跡江に、四反田は糸原などにもある。

108 五町（ごちょう） 宮崎市高岡町　地図2−C−5

古記録に三日町、八日町、仲町、下町、上町、新町の呼び名が残っている。しかし、三日町、八日町の呼び名は現在使われていない。五町は五つの町で呼んだものか、多くの町の意味か、いずれか分からないが商人の住んでいた町を意味するものであることは確かのようだ。現在の総合支所南側の大淀川寄り一帯が大字（あざ）五町であり、昔の五町村である。

五町商店街

109 後東寺迫（ごとうじざこ） 宮崎市　地図1−D−4

後東寺迫西の丘陵にあった護東寺（ごとうじ）が地名の由来である。真言宗護東寺は延宝５年（1677）に伊満福寺49世頼雄法印が開山した寺で、頼雄法印没後はその弟子の南照院が継いでいる。南照院は宮崎やその周辺に多くの仏像を残した串間延寿院（くしまえんじゅいん）・円立院（えんりゅういん）の祖で、延寿院・円立院は本寺の住職を勤め、後東寺迫墓地には円立院一族の墓石が残っている。迫（さこ）というのは、谷または谷のいきづまりをいう。

後東寺迫

110 木之川内（このかわうち） 都城市山田町　地図3−B−2

木之川内は源（みなもと）を霧島山の東麓に発して、西岳村を通り木之川内に流れ込む木之川内川に沿った集落である。これと同じように是位川内川（じがわちがわ）に沿った是位川内、麓川内川（ふもとがわちがわ）に沿った麓川内があり、川名が集落名になっている。川内（河内）の付く地名は多いが、いずれも川と関連づけられての地名が多い。木之川内は、樹木の多い川内ということかも知れない。木之川内小学校もここにある。

木之川内集落

111 木場谷（こばたに） 高原町　地図2−D−2

木場は、山で切った木を集めて置く山間の小平地をいう。谷に沿って木を集めるから、谷の出口付近に木場ができやすい。木場は、山林で働く人の休憩場所にもなった。木を切り出す山には、必ず出てくる地名である。

112 小林（こばやし） 小林市の市名　地図2−B−1

慶長年間（1596〜1615）から小林と呼ばれたという。当時霧島山麓に大樹の少なかった土地の自然の地形から生まれた名称と思われる。戦国時代にこの地に築かれた城を三ツ山城と呼んでいた。古来辺境守備の地で夷守（ひなもり）の古名が残されている。小林は大きく分けると真方（まがた〜北の方〜）と細野（ほその〜南の方〜）の二つに分かれていた。

※1　明治15年茨城県生まれ。童謡・民謡詩人として活躍し、「七つの子」「赤い靴」「青い目の人形」など63年の生涯に2,000余りの詩を残している。

※2 まさり劣りのない二つのすぐれもの。

陰陽石（いんようせき） 小林市

浜の瀬川にあり、詩人野口雨情（のぐちうじょう）※1が訪れた時に、即興で作った「浜の瀬川には、天下の奇岩、人にゃ言うなよ語るなよ」の詩で有名な名勝（めいしょう）である。これは同じく野口雨情が詠（よ）んだと言われる能登半島の「能登の金剛のゆべしのもちは、誰が引くやら切れはせぬ」と並んで双璧（そうへき）※2といわれている。

陰陽石

113 小林市須木（こばやししすき） 小林市須木　地図2−A−3

旧須木村。平成18年３月20日小林市と合併。現在は小林市須木大字（あざ）○○といわれている。天文年間（1532以降）以前より、須木の名称はあったが、天正（1573）以後、島津の領有となった。明治22年正式に須木村となった。須木は樹木の多い所の意味であろう。

須木村には大字（あざ）がなかったので、昭和50年前後に、五つの大字（あざ）が付けられた。

永迫奇岩群（ながさこきがんぐん）

今から約30〜35万年前、霧島の旧期火山（きゅうきかざん）の大爆発で、大規模な加久藤火砕流（かくとうかさいりゅう）※1が噴出（ふんしゅつ）した。火砕流は固まって溶結凝灰岩（ようけつぎょうかいがん）※2となり、上部の方は固まらないシラスのような火山灰層となった。その結果、上部の火山砕屑物（さいせつぶつ）は浸食（しんしょく）によってほとんど流失し、現在加久藤火砕流を示す地層としては、小林市からえびの市に分布する下部の溶結凝灰岩のみということになった。「陰陽石」や「須木の観音滝」は、この岩石が地上で浸食された姿である。

この小林市須木永迫（ながざこ）にある奇岩群もその一つで、大淀川上流部の永迫谷川（ながざこたにがわ）にそびえている。

行ってみたい方は、小林市須木庁舎地域振興課（TEL.0984−48−3111）まで。

永迫奇岩群

※1 火山細砕流の略。高熱のガスと火山灰の集合体。
※2 火砕流の熱で固まった火山灰の岩石のこと。

114 小松原（こまつばら） 都城市　地図3−C−5

市の中央部、都城駅の南西に位置する。前田町願蔵寺（がんぞうじ）から神柱神社までの間には、たくさんの小松が生えている野原の丘があったことから、小松原と呼んだ。年見川沿いには島津領主の別荘（べっそう）があったが、明治４年（1871）になって、梅北にあった神柱宮を当地に移し、都城の総鎮守（そうちんじゅ）※3として厚く信仰（しんこう）されている。境内は神柱公園として整備され市民に親しまれている。

※3 大本の守り神。

神柱神社

神柱神社入口の大鳥居

さ

115 境谷（さかいだに） 綾町　地図2−B−4

綾南川上流の綾町の最西部、小林市須木との境にある。須木と綾町との境の谷の意味。『日向地誌』に「南股村　西ハ須木村ト半ハ山嶺（さんれい）ヲ以テ界シ半ハ山谷ヲ以テ界ス」「南裏雑樹林…字大口境ヶ谷賀多（がた）轆轤木（ろくろぎ）ニワタリ…」とある。須木区の東俣谷・西俣谷・南俣谷・桑俣谷などの「俣」は山と山との間の低地、すなわち「谷」と同じ意味であろう。

116 桜木（さくらぎ） 都城市高城町　地図3−B−5

太宰府（だざいふ）から日向花木に平治元年（1295）下向（げこう）※4してきた花木実遠（さねとお）を先祖とした分族（ぶんぞく）※5に高木氏のほかに桜木氏があった。『三俣院記』に「桜木永留の勝軍地蔵（しょうぐんじぞう）は、応永34年（1427）４月16日桜木対馬介（さくらぎつしまのすけ）公頼（きみより）建立、作者山之坊」という書き付けがあったと記している。南北朝争乱後桜木を治めたのが桜木氏であった。古い時代からの地名である。

将軍地蔵を祭った将軍神社

※4 いなかへ下ること。
※5 分かれた家。

117 佐土瀬（さどせ） 野尻町　地図2−C−2

もともとこのあたりは、約２万２千〜２万５千年前に鹿児島の姶良（あいら）カルデラの大噴火によって野尻シラス台地が形成された所で、長い年月の間に現在のような地形となったと考えられている。佐渡（佐土）は、砂土の意味で当て字と考えられるが、砂土は次第に崩壊（ほうかい）し、狭い迫田（さこだ）となり、門地となって佐土瀬門となった。ここにある佐土瀬姓はこの門名（かどめい）を名乗ったものと考えられる。

118 薩摩迫（さつまざこ） 都城市山田町　地図3−B−2

薩摩迫は都城島津家発祥の地（はっしょうのち）※1で、中霧島の古江（ふるえ）にある。島津忠宗（ただむね〜４代領主〜）の6男資忠（すけただ）が、合戦の功により足利尊氏に北郷（ほんごう）300町を与えられ、文和元年（1352）この地にはいった。北郷氏を名乗り都城島津家の祖（そ）※2となった。山手にあって天然の要害（ようがい）※3の地であった。文和元年（1352）資忠の子義久が都島（みやこじま）へ都之城（みやこのしろ）を築き、都城（みやこのじょう）と名付けた。薩摩の方を向いた要害の地というので、この名が起こったのかも知れない。

薩摩迫館跡

※1 最初の起こりの地。
※2 はじめての人。
※3 険しくて敵を防ぐのに適した地。

薩摩迫大手口

薩摩迫館跡

119 狭野（さの） 高原町　地図3−B−1

神武天皇を祭った狭野神社がある。神武天皇は幼名を「狭野尊」（さののみこと〜『日本書紀』）と呼ばれた。この地が狭い野であったからであるという。霧島山麓には、幾筋もの火砕流から形成された段丘が麓（ふもと）に延びているのでそのような地形の間に広がる平地を狭野と呼んだのではないか。

秀吉がおこした朝鮮出兵（16世紀末）で、出陣した島津義弘が帰国後に狭野神社に杉を植えた。樹齢400年以上の狭野杉と呼ばれるみごとな杉の木がある。

狭野神社

120 去川（さるかわ） 宮崎市高岡町　地図2−D−5

大淀川を宮崎では赤江川（あかえがわ）と呼んでいたが、高岡郷では「左流川（さるかわ）」と呼んでいたとある。また宮崎城主の上井覚兼（うわいかくけん）日記※4には「佐理川」「さり川」と書かれている。薩摩街道（さつまかいどう）は、ここで大淀川から離れて（去って）山道に入るので、去川となったという説と、他方ここには薩摩藩の関所（せきしょ）が置かれ、大変きびしい取調べがなされたと言われている。その役所から見て、大淀川が左を流れているから左流川（さるかわ）といったともいう。

去川の関跡

※4 上井覚兼（うわいかくけん）日記
天正5年（1577）伊東氏にかわって島津氏が天正15年（1587）まで日向を支配した。宮崎城は、上井覚兼が城主であった。城中の生活を詳しく記したのが上井覚兼日記（大日本古記録）である。

121 山王原（さんのうばる） 三股町　地図3−C−3

山王原は、もと広い原野だったのでこの名が付けられたといわれている。この地を開拓し、三股町の基礎を築いたのは明治３年（1870）勝岡郷と梶山郷を合わせて下三股郷（しもみまたごう）がつくられた時の地頭（じとう）※1三島通庸（みしまつうよう）であった。この功績（こうせき）を称（たた）えた「三股開拓之碑」が稲荷神社境内（いなりじんじゃけいだい）にある。山王原地区民によって建てられたものである。

三股開拓碑

※1 郷を治める責任者。

122 三名（さんみょう） 国富町　地図1−A−3

名（みょう）とは荘園、または領地の意味。日向地方に絶大な権勢を誇っていた宇佐八幡宮の土地などを記録した『宇佐大鏡』によると宇佐収納使にあてがわれた土地は「伊在生（いざお）」、「衾田（ふすまだ）」、「けいたとい松」の三つの名で、「三ヶ名」または「三名」が衾田神社を中心にした地名になったと言われる。伊在生と衾田は国富町北部三名川沿いにある。「とい松」＝富松、現在は旧宮王丸村の飛び地として北本庄に大字（あざ）名が残っている。「けいた」の地名は残っていない。

中心の衾田（ふすまだ）神社と奉行所跡（現在は宅地）

し

123 椎屋（しいや） 綾町　地図2−C−5

綾町中心部（役場）から西北に県道田代八重綾線を約４～６キロメートルさかのぼったあたりの、綾北川Ｖ字渓谷沿いの山地の地名。大半は山林原野であるが、大正年間までは高地の椎屋原（しいやばる）に牧場があった。シイは断崖や地形のけわしい場所の上にある平地を表す地形語で（『宮崎県史民俗編２』）、「椎屋」は「椎谷」の当て字であろう。都城市の高崎町・山田町、宮崎市高岡町や延岡市北川町に椎屋、日向市東郷町や西臼杵郡日之影町に椎谷がある。

124 塩浜（しおはま） 宮崎市　地図1−D−1

国道220号の宮崎南バイパスが宮崎空港の近くから90度カーブし、広い水田の中を南へ直進する。そのバイパスの左右に広がる水田の大半が、寛文２年（1662）の外所大地震（とんところおおじしん）※2で陥没し入り江になった。元禄２年（1689）の『南方村絵図』に入り江が描かれ、「入海」とか「先年田」「塩浜」などの表記がある。入海とは入り江のこと、先年田とは以前は田んぼであったこと、塩浜は海岸であったことが分かる。入り江は長い年月に埋められ元どおりの水田になったが塩浜の地名は残り、現在でも農家の人たちは田の位置を表す地名として使っている。

※ 8ページ参照。

125 四家（しか） 都城市高城町　地図2−D−4

四家は平家落人伝説（へいけおちうどでんせつ）の村である。島津斉彬（なりあきら）が嘉永６年（1853）高城を見て回った時の案内書『御道中記』（おんどんちゅうき）には、「ここに黒木・井上・永峯・二見の四家あり。むかし源平合戦の折、平家落人としてこの地に住むようになったということで四家村と言い伝えられている」と記している。そのうち井上清盛家だけに系図（けいず）※3が残されていたが、昭和35年（1960）の火災で焼失してしまった。ただ長野神社の大永２年（1522）の棟札（むなふだ）※4に「井上五郎左衛門尉平重頼（たいらのしげより）」と書き残されている。また、平八重（ひらばえ）城跡と井之（いの）城跡は、平家落人の籠城（ろうじょう）※5跡といい伝えられている。

野尻側から四家井之城をのぞむ

※3 先祖から代代のことを書き記した表。

※4 家の棟上げの時、建てた年月日や建築した人の名などを書いて棟木に打ちつける札。

※5 城にたてこもること。

126 志比田（しびた） 都城市　地図3−C−5

大淀川と支流・横市川の流域に位置する。昔、ここには池があり湿田も多かった。当地の方言では「しみでる」を「しびでる」ともいうことから「水がしびでる田」が「しび田」になり，後に志比田と書き表すようになった。その後土地改良などにより土地が整備され、南部には志比田団地が広がっている。

志比田橋

127 下北方（しもきたかた） 宮崎市　地図1−B−5

宇佐宮領宮崎庄の一部が鎌倉時代に「北方・南方・池内方」の３方に分かれ、その後北方が「下北方・上北方」に分かれた。北方（下北方＋上北方）と南方の位置（方角）が逆であるとの指摘もある。なお、北（きた＝喜多・木田など）には崖、自然堤防などの意味があり、北方は方角ではなく、丘陵地を意味していたとも考えると、確かに北方は宮崎平野の丘陵地である。同様の地名は各地にある。川軸にして東方、西方、北方、南方と分かれる所もある。

下北方にある平和台公園

128 下水流（しもづる） 綾町　地図2−C−5

綾町中心部（役場）から西へ1.5キロメートルほど行った主要地方道宮崎須木線沿いの地名。『日向地誌』には「下津留　田２町１段１畝１７歩原野１畝」とある。水流・津留は川沿いの鶴首のような小平地や田に水を引く水路（すいろ）の意味。綾町内には水流・上水流・水流前・桑水流などのほかに、綾南川（本庄川）と綾北川の合流地に水流（みずあらい）がある。かつてはよく洪水に洗われた所であろう。水流は宮崎・鹿児島県に多く、津留は大分・熊本県に多い。

129 宿神（しゅくじん） 綾町　地図2−C−5

綾町中心部（役場）から西へ１.5キロメートルほど行った主要地方道宮崎須木線沿いの地名。『日向地誌』に飛び地（とびち）宿神の記載があり、今も祠が祭られているが、尾原の宿神の飛び地であろうか。地元では神の泊まった所（宿の神の意味）で、なぜか火の神を祭り、サンポコジンともいうと伝えられている。

宿神は「宿世（しゅくせ）結び（＝縁結び）の神」の略語であろうか。国富町深年川上流愛染（あいぞめ）橋右岸山腹に祭られていた愛染権現（ごんげん）は「宿世結びの権現」といい、一つの御名（みな）になったという（『高岡名勝志』）。

愛染は逢初めの意味でもあろう。法華嶽薬師（ほけだけやくし）と和泉式部（いずみしきぶ）の出会いの「縁が結ばれた所」という。なお、シュクは端・境・外れの意味があるので、宿神には「境の神」の意味もある。

今も祭られている宿神さま

130 城ヶ崎（じょうがさき） 宮崎市　地図1−C−1

大淀川下流右岸に栄えた商人町。中国などとの貿易が盛んな中世のころ、赤江港※1をひかえたこの地に太田七郎左衛門が開いたといい、曾井城の前（さき）が地名の由来という。近世は上方との交流で商業が発展し、太田・小村・南村などの豪商が町を治めた。豊かな経済に支えられ、商人たちの間には俳諧（はいかい）※2が盛んになり多くの俳人を輩出した。

※1 昔は、大淀川河口の南側一帯を赤江と呼んでいた。この赤江にあったのが「赤江港」で、江戸時代には、条件に恵まれた良港であった。

※2 仲間で集まって、最初の句に合わせて、次々と句を連作することを、俳諧と呼んだ。

城ヶ崎俳人墓碑群

城ヶ崎バス停から約150メートルの地に、俳壇で活躍した俳人たちの墓碑25基及び石経塚3基が集合している。江戸時代に活躍した城ヶ崎俳人たちの墓碑が保存されている。

城ヶ崎俳人墓地の墓碑群

131 城ノ下（じょうのした） 宮崎市　地図1−B−4

跡江の丘陵（きゅうりょう）には生目古墳群（いきめこふんぐん）があるが、その丘陵の東端に跡江城があった。建武３年（1336）１月14日、南朝方の瓜生野八郎左衛門尉（うりゅうのはちろうざえもんのじょう）が立てこもる跡江城を、北朝方の土持宣栄（つちもちのぶよし）や伊東祐持（いとうすけもち）らが攻め焼き払っている。地名の由来は城があった丘陵の下にあるので、文字通り城ノ下[※1]になったものである。

132 城の下（じょうのした） 宮崎市　地図1−C−4

大塚の中央に蓬莱山（ほうらいざん）という小さな山がある。平地に独立した山で、長久寺の八十八ヵ所が祭ってある。この山に、永徳（1381〜1384）の頃、県（あがた）（延岡）の領主土持宣弘（つちもちのぶひろ）が築いたという蓬莱山城があった。その城の下ということで付いた地名である。土持氏は古くからの豪族（ごうぞく）であったが、伊東氏に攻められて勢力を弱め、伊東氏が豊後に落ちた後、大友氏に滅ぼされた。

133 城ノ下（じょうのした） 宮崎市　地図1−B−3

北西に白糸城があったことから付いた地名。白糸城跡は有田の白髭神社（白絲大明神）の北西、大淀川右岸にあり、川に面する西側は崖になり、南・東・北は水田を配していた。応永年間（1394〜1428）、島津久豊（しまづひさとよ）が倉岡城とともに築き、穆佐（むかさ）城の支城であったといわれる。

134 城ノ下（じょうのした） 宮崎市　地図1−B−3

倉岡城の下ということから付いた地名。倉岡城は大淀川左岸の独立した丘陵を城構（しろがま）えしたものである。中の本丸を大城、南の一画を大森城、北の一画を旗掛松城（はたかけまつじょう）と呼んだ。この城は薩摩の島津久豊（しまづひさとよ）が応永年間（1394〜1428）に築いたといわれる。その後、伊東氏の城となり伊東氏48城の一つとなった。しかし、天正５年（1577）伊東氏が島津氏に追われてからは島津氏の所有するところとなり、吉利久金（よしとりひさかね）が城主になっている。慶長６年（1601）には伊東氏の兵が攻めたが退けている。大淀川を挟（はさ）んで白糸城があった。

135 志和池（しわち） 都城市　地図3−B−3

大淀川上流左岸に位置し、地域の中央部を丸谷川が流れ、河川敷（かせんじき）は運動広場に整地されている。昔、城の北側近くにある鏡のように波が無く静かな蓮（はす）池をながめて、当時の雲林寺（うんりんじ）の僧が「志の和（やわら）ぐこと、この池のごとくあれ」といったことから地名になったと伝えられている。志和池地区のほぼ中央に上水流（かみづる）町・下水流（しもづる）町がある。この水流（つる）とは川原という意味で、水の流れている広い平らな土地ということである。川の上流を上水流、下流を下水流と名付け、上水流町の大淀川近くの小高い丘には志和池城跡があり、城山公園になっている。

す

136 須志田（すしだ） 国富町　地図2−C−6

南北朝時代には呪師田名（じゅしだみょう）と呼ばれていたが、日向土持[※2]の一族に須志田某という者がいて、この地を須志田としたといわれている。中世のころ、大乗寺を建てることになり、伊東祐胤（いとうすけたね）は大光寺に田地一町歩と屋敷を寄進した。また後に当地から、米、布、筵（むしろ〜わらを編んで作ったシート〜）などが納められたことが『大光寺文書』に記入されている。江戸期初め頃宮崎市の奈古（なご）神社に残る文書に奈古神社と本庄八幡神社の例祭では須志田地区と森永地区が「やぶさみ」[※1]を奉納していたといわれている。

※1 城があった場所には城の下の地名が多い。

跡江城跡

蓬莱山城跡

倉岡城跡

志和地城跡（城山公園）

※2 土持氏は日向で最も古い豪族と言われている。

137 ズンブリ（ずんぶり） 宮崎市　地図1−C−1

大淀川河口右岸にあり、寛文２年（1662）の大地震による津波で村がズンブリ沈んだということで付いた地名。地名のもともとの意味はズブ、ズブズブに通じ「水にぬれた様子、湿地」をいう。

地震のあと、元禄５年（1692）幕府領となり吉村のあずかりとなり、元禄14年（1701）には吉村の庄屋清水清蔵がズンブリの請地を願って許可されている。請地とは一定の年貢を納めて開墾することである。明治初期の人家は４戸とある。津波の被害から200年後で４戸とは人が住めない沼地であったと思われる。

せ

138 瀬頭（せがしら） 宮崎市　地図1−D−5

イザナキノミコトがみそぎはらいをしようとした際に上瀬（かみつせ）は瀬速く、下瀬（しもつせ）は瀬弱く、そのために選んだ中瀬（なかつせ）の始まりということから、瀬頭となったとの説がある。「瀬」とは浅瀬のことで、歩いて渡れる水量の場所であり、上流で連続する川原町と比べると低い土地を意味している。この地から下流側が瀬の始まり（頭）ということから、瀬頭と呼ばれたのかも知れない。

139 関之尾（せきのお） 都城市　地図3−C−1

滝で有名な関之尾は関之丘が正しいといわれる。今からおよそ２万5000年前に、鹿児島湾の奥にあった姶良火山群（あいらかざんぐん）が大噴火して、大量の火砕流（かさいりゅう）を噴出（ふんしゅつ）した。その最も大規模なものを「入戸火砕流」（いとかさいりゅう）[※2]という。この火砕流は県南部から鹿児島県を広くおおった。表面はシラス台地になっているが、下部は高熱の火砕流が溶結凝灰岩（ようけつぎょうかいがん）になり、関之尾の岩盤（がんばん）になっている。それが後に亀甲状（きっこうじょう）の甌穴（おうけつ）となり突端（とったん）は滝になった。そこで水の関所となったことから関之丘とな

※1 本庄では「やぶさみ」というが、本来は「やぶさめ」である。

須志田から法華岳方面を見る

干潮になると、川底の岩が露出する

関之尾滝

※2 鹿児島県国分市入戸（現在霧島市重久）で発見されたので「入戸火砕流」（いとかさいりゅう）と呼ばれる。

入戸火砕流（いとかさいりゅう）

激しい火山活動が起こると、火口から溶岩の破片、火山灰など膨大な噴出物が火山の斜面を流れ下ることがある。これを火砕流と呼ぶ（火山細砕流の略）。

今から約2万5000年前に、鹿児島湾の奥にあった姶良火山の大爆発によって噴出した火砕流を、入戸（いと）火砕流と呼ぶ。この時、地下のマグマが大量に噴出し、火砕流が南九州を広く覆った。この火砕流は多量の軽石を含んでいたので、堆積した火砕流の表層はシラス台地を形成し、底部は溶結凝灰岩となった。観音瀬の川底の岩盤は、この時に形成された溶結凝灰岩である。また、この火砕流の噴出によって、鹿児島湾の奥には巨大なカルデラが形成された。

姶良火山の大爆発は、地球上で1,000年に1回起こる程度の、稀（まれ）な大噴火であったとされていて、噴煙は地上数十キロメートルに達したと考えられている。地上付近は、高温の火山灰や軽石の混じった雲（熱雲）に覆われたので、地表の動植物も死滅して、南九州一帯は、軽石に覆われた一大砂漠に変じたと考えられる。

関之尾滝祭りにおける「朱杯（しゅはい）流し」の行事　都城市

都城初代領主北郷資忠（すけただ）が、ツツジが満開の時ここで花見の宴（えん）を催し、領内一の美人のお雪に、お酒のお酌（しゃく）をさせていた。そこで、お雪はお酌のために厠穴（おうけつ）を跳（と）びこえようとした時、おならが出たのでそれを恥じて、朱塗りの盃（しゅぬりのさかずき）を持ったまま滝壺（たきつぼ）に身を投げて死んだという。それを悲しんだお雪の恋人は、日夜滝の上に来ては、お雪の名を呼んで泣き続けた。するとその思いが通じてか、毎年ツツジ満開の頃になると滝壺に朱塗りの盃（さかずき）が浮かぶと伝えられている。

今は毎年秋に行われる「関之尾滝祭り」の呼び物として、お雪にちなんだ数人の乙女が朱杯を滝の上で流す行事が催されている。

朱盃（しゅはい）流し

り、いつしか関之尾と書かれるようになったという。

水量豊かな庄内川の上流は江戸期から明治期にかけて、開削（かいさく）され、南前用水路や前田用水路の取水口もあり、今も活用されている。

140 千丈（せんじょう）　宮崎市　地図1−C−4

千丈は天上という言葉が転じたもので高い所をさす。千丈は高いことを例えて千をつけたものである。また、千畳（せんじょう）や千城の文字をあて、小さな平地（千畳敷など）をさすこともある。さらに古戦場にちなんで戦場を付ける場合もある。

千丈は生目と大塚の境の丘陵にあり、高い所ということで千丈と名付けられたものと思われる。近くにある戦場坂は千丈にある坂ということも考えられる。

文政５年（1822）に清武の儒学者安井滄洲（じゅがくしゃやすいそうしゅう）は、高岡の月知梅（げっちばい）に行く途中にこの坂を通り千丈越と記している。

千　丈

141 戦場坂（せんじょうざか）　宮崎市　地図1−C−4

大塚と浮田の間に戦場坂という坂があり、『延陵世鑑』※1に「長寛２年（1164）源為朝（みなもとのためとも）が大隅・薩摩を攻め従えて日向に向かったので、土持信綱は蓬莱山（宮崎市大塚）に陣を構え、戦場坂で向かえ戦った」とある。また、『日向郷土事典』でも源為朝と土持氏が大塚で戦った古戦場跡と伝える。

文政５年（1822）に清武の儒学者安井滄洲（じゅがくしゃやすいそうしゅう）は高岡の月知梅を訪ねるとき戦場坂を通っている。「千丈越に休みて、梅が香に腰を掛けたる峠かな」（『梅見囃し』）と詠んで、千丈越と坂の名を書いている。近くに千丈という地名があるので、千丈の坂かも知れない。なお『日向地誌』には戦場越、千町越と記している。

戦場坂

※1「えんりょうよかがみ」「えんりょうせいかん」といわれる。延陵は延岡のことで、延岡の歴史という意味の本。

142 千町（せんちょう）　都城市　地図3−C−6

南部はＪＲ日豊線が走っている。以前早水池の湧き水が溢（あふ）れて、水流となりその下流の広大な湿地を千町牟田と呼んだという。牟田（むた）とは湿地のことである。その後狐や狸の住む荒れ地と化していたが、昭和４年（1929）東原耕地整理事業により住宅地に変わった。地域中央には大きな「東原住宅地整理記念碑」と、千町公民館内敷地にはその記念碑文が建てられている。

東原住宅地整理記念碑

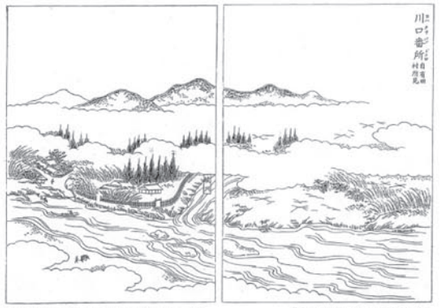
そ

143 杣山（そまやま）　宮崎市　地図1−B−4

江戸時代、綾（あや）や高岡、糸原（いとばる）は薩摩藩領だった。高岡や去川の山々からは、日州御手山（おてやま）※2経営の総支配人山元荘兵衛のもとで、材木や木炭が大淀川を利用して大量に出された。綾の林産物は本庄川（綾南川）から出され、二つの川が合流する糸原の杣山（そまやま）に集められた。もともと杣山とは木の

※2 御手山（おてやま）：山林から材木を伐採したり、林産物（りんさんぶつ〜木炭など〜）を移出することを許可する制度。

茂（しげ）った山とか材木を切り出す山のことをさすが、材木が集められる所も杣山といったのであろう。また、杣山には薩摩藩の川口番所（かわぐちばんどころ）があった。鹿児島から役人を派遣（はけん）し物資や人、舟の出入りを監視（かんし）した所でもあった。


川口番所（かわぐちばんどころ）　『三国名勝図会』十九

杣　山

た

144 大工町（だいくまち）　宮崎市　地図1−C−5

一般に大工町は城下町における大工などの建築業者が住む一帯をさすが、宮崎においては考えにくい。元来の大工町は小松川東側で現在の国道10号を挟（はさ）んで松橋町と和知川原町（わちがわらちょう）の間にあった。江戸時代初期には大淀川・小松川の流域も現在とは異なっており、現宮崎河川国道事務所（大工町）付近に千石船の造船所があって、そこで働く船大工たちが住んでいたことに由来するとの説もある。

145 高木原（たかぎばる）　都城市　地図3−C−3

大淀川右岸に位置する。戦前までは高木街道に松並木があったが、戦時中に松やに採集のため伐採（ばっさい）された。高木原の地名は、高い所の野原という意味で、大淀川からの利水ができず、原野と畑地が多かった。大正４年（1915）に高木原用水路完成により開墾（かいこん）も進んだ。高木原用水路は、近年生活排水の汚濁（おだく）などにより昭和53年（1978）廃止された後、オーツタイヤ工場近くに高木原ポンプ揚水場（ようすいじょう）が新設され、田畑の用水に利用されている。

高木原ポンプ揚水場

146 高崎（たかさき）　都城市高崎町　地図3−A−3

たかざきとも呼ぶ。都城盆地の北東部に位置する。地名の由来は、『高崎町史』によると、高千穂峰の天孫降臨神話（てんそんこうりんしんわ）に関わりがあるという。天上界の神々が常駐（じょうちゅう）する高天原（たかまがはら）が転訛（てんか）して高原となり、祭事（まつりごと）や居住される皇居（こうきょ）の地を崎と呼ぶことから高崎になったと伝えられる。県内ではとても畜産の盛んな町である。

高崎町全景

147 高崎新田（たかさきしんでん）　都城市高崎町　地図3−A−2

町の中心地域は高崎新田と呼ばれる。地域の中央を国道221号が縦断している。江戸期の生活の中心は当時の麓（ふもと）地区であり、この地域は広い湿地帯であったが、その後新しい田畑が広がっていたことから、高崎新田と呼ばれるようになったという。大正２年（1913）旧吉都線高崎新田駅が開業したことにより、駅前の水田地帯にも人家が次ぎ次ぎと建ち並び、発展してきたものである。高崎川流域に高崎小学校が建てられ、周辺は水田が広がっている。

高崎川流域にある松ヵ水流（まつがづる）、牟礼水流（むれづる）の地名も川と関係があるものであろう。

高崎新田の中心地

148 高城（たかじょう） 都城市高城町　地図3−B−5

『三国名勝図会』には「高城の名は皇都（こうと）の遺稿（いこう）なり」とあり、高城（たき）と呼ぶ地名もある。高城が三俣院高城（みまたいんたかじょう）といわれるようになるのは肝付兼重（きもつきかねしげ）と足利尊氏（あしかがたかうじ）の命をうけた畠山直顕（はたけやまただあき）が戦った南北朝時代からである。当時三俣院高城や高岡の穆佐院高城（むかさいんたかじょう）児湯木城の新納院高城（にいろいんたかじょう）を日向３高城と呼び、その地方の重要な拠点（きょてん〜大事な場所〜）であった。三俣院高城は月山日和城（がっさんひわじょう）ともいわれ、現在は一般に日和城（ひわじょう）と呼ばれている。城跡に現在は郷土資料館が建っている。

高城城跡

149 高洲（たかす） 宮崎市　地図1−D−6

大淀川左岸で一ツ葉入江から上流にかけての字（あざ）名であったが、現在の高洲町の町域とは必ずしも一致しない。地名の意味から言えば、高洲は「台地・自然堤防」の意味があり、明治時代初期にはこの地に「高洲松林」があったことが知られている。自然堤防が存在したのか、根固めの松を植えて造った人工の堤防であったのかは不明であるが、周辺よりも土地がやや高くなっているので高洲と呼ばれたものと思われる。

150 高千穂峰（たかちほのみね） 高原町　地図3−B−1

『古事記』・『日本書紀』には、アマテラスオオミカミ（天照大御神）が、孫のニニキノミコトを日本列島に天降りさせたという神話が書かれている。ニニキノミコトは、「筑紫の日向の襲（そ）の高千穂の峰」（『日本書紀』）に降臨（こうりん）されたと伝えている。（『古事記』は、「筑紫の日向の高千穂のくじふるだけ」と書く。）神話に語られている「高千穂の峰」は、霧島の高千穂の峰であると考えられてきたので、この名で呼ばれることになった。

韓国岳から新燃岳、高千穂峰をのぞむ

151 高浜（たかはま） 宮崎市高岡町　地図1−B−2

浜（はま）というのは、海岸を意味する。昔は上流の「川口」まで海が入り込んでいたと推定されている。事実「赤谷（あかたに）」の宅地造成地で、たくさんの貝の化石が出て、海底にあった水成岩層（すいせいがんそう）であることが分かった。ここは奥地にできた「はま」という、土地の成り立ちから付いた地名と思われる。

高浜地域

152 高原（たかはる） 高原町　地図2−D−1

南九州では、平坦地になっている高台を「原…ハル」という。西都原（さいとばる）はそのよい例である。霧島山麓に広がる小高く広い平地を、高原と呼んだのであろう。土地の自然の地形から生れた名称と思われる。

一説には、天孫降臨神話の神々の世界である高天原（たかまがはら）にちなんで、高原の地名になったともいう。

赤谷の大淀川河川敷に露出している貝の化石

153 竹之下（たけのした） 都城市　地図3−D−5

以前は岳之下とも書いた。城山の崖下（がけした）の意味だと思われるが、時がたつうちに竹之下になった。都島町と西町の間に架かる竹ノ下橋周辺は、江戸時代から宮崎の赤江まで続く唯一の水運の拠点（〜活動の足場〜）であり、荷を運ぶ川船が行き来した。平成13年（2001）「川の駅公園」が川岸に建設され、児童の研修などにも利用されている。

竹ノ下橋（岳下橋）

154 竹原田（たけはらだ、たこんだ、たごんだ） 宮崎市　地図1−B−4

柏田の西側に接し、堤防を挟（はさ）んで大淀川に面している。北側には竹篠（たけしの）という地名もあり、一帯には竹林が密集している。正式には「タケハラダ」であるが、地元では「タゴンダ」と呼ぶ。原田は湿地・湿田を意味するが、「ゴンダ」と発音することはない。ただ、原田と同義である「権田」が「コンダ・ゴンダ」と発音することに何か関係があるのかも知れない。

155 田島（たじま） 都城市山之口町　地図3−C−5

田島は山之口町大字（あざ）富吉にある地名で田園が広がる。地名の由来は定かではないが、かくれ念仏堂（ねんぶつどう）と殉難（じゅんなん）[※1]の遺跡があり、見学者も多い。広域農道沿いに「かくれ念仏堂の碑」も建てられている。

田島は早くから開けた地域に関係がある地名のようで、佐土原も古くから田島と呼ばれていた。

※1 難を受けて死ぬ。

田島のかくれ念仏洞

かくれ念仏

薩摩藩では慶長2年（1597）から仏教の一つである一向宗・真宗（いっこうしゅう・しんしゅう）が禁止され、信者は拷問（ごうもん）[※2]や打ち首など厳しく罰せられた。それでも信者の武士や農民は、洞穴（どうけつ）や林に隠れて、お経を唱えたり指導者の話を聞いて信仰を守り通したといわれる。

史跡として、他に高城の国道10号の有水小学校前から約4キロメートルの田辺（たなべ）にある。約30平方メートルの広さがあり中も見学できる。さらに、三股の蓼池（たでいけ）の国道256号の脇にある念仏堂は、入口約1.5メートル、奥行き約3メートル、高さ約1メートルであるが、昔はもっと大きかったと思われる。

山之口町安楽寺に残っている拷問石

※2 からだを痛めつける。

156 田尻（たじり） 国富町　地図1−A−2

戦国時代から本庄川の下流右岸にある地名。本庄川は森永、竹田の長い台地に突き当たり、流れを南東に変えて進み、再び弁天淵の辺りで向きを変え、本庄の鎌田ヶ城の下の断崖に当たって、対岸の田尻と嵐田を襲った。このジグザグコースは何百年も繰り返された。田尻地区は米どころで、田の尻（末尾〜すえのこと〜）は本庄川の広い流域の末端で、木森用水路も綾地区から地区民の努力で元禄14年（1701）に建設されている。

木森用水路

綾町南俣の木森堰　元禄14年（1701）創設

157 田代八重（たしろばえ） 小林市須木　地図2−A−3

田代ヶ八重（たしろがばえ）ともいわれていた。田代は未開発の土地、八重は山が幾重（いくえ）にも重なっている所の意味で、田代八重は山の奥の方にある土地のことである。国道265号を北上する急坂を上りつめた所が輝嶺峠（きれいとうげ〜標高800メートル〜）で、綾南川・綾北川の分水嶺（ぶんすいれい）でもある。この下り坂を降りた所が、田代八重と呼ばれていた。現在はダムになっている。

158 橘通（たちばなどおり） 宮崎市　地図1−C−5

橘橋から北側に延長された道路なので橘通になったとされる。橘橋は明治13年（1880）に福島邦成が私費で架設（かせつ）した際、県に提出した書類に「橋名は橘橋とする」と明記している。だが、その由来については示しておらず、『日本書紀』の「小戸の橘」に由来するといわれる。明治40年（1907）の新聞に「寺町改称橘通何丁目」との記事が散見され、この頃から橘通は通称となり、昭和２年（1927）に正式な町名となった。

橘橋北詰に残っている橘橋の親柱

159 谷頭（たにがしら） 都城市山田町　地図3−B−2

野々美谷川の谷の頭（かしら）にあるので谷頭と名付けられた。谷頭の中央部に谷頭駅があり、ここから山田、庄内、志和地、高崎に通ずる道路が走っており、駅前は商店街になっている。谷頭は自然の地形から起こった名前である。

谷頭町並み

しまうつりの碑 都城市山田町

谷頭駅前の本道を山田方面へ約300メートル行くと十字路の角にこの碑が建っている。安永８年（1779）桜島の大噴火で家や土地を失った33戸の農家が、中霧島地区に17戸、野々美谷地区に16戸と分かれて住むようになった。明治35年（1902）地区民によって建てられた碑である。

しまうつりの碑

石川理紀之助（いしかわりきのすけ）翁夜学跡地と胸像 都城市山田町

夜学跡地標識は、前田君開渠記念碑の脇に建てられている。前田正名（まえだまさな）がせっかく開田事業をすすめたのに、地区民は無関心だった。そこで前田は秋田県から石川理紀之助（いしかわりきのすけ）を農民指導のため招いた。農民指導者理紀之助一行８人は、明治35年（1902）４月、半年間の約束で谷頭に来た。理紀之助は夜は夜学会、日中は地区内巡回指導、農業についてその技術（わざ）や精神をていねいに教えた。10月谷頭を去る時は涙の別れだったという。それ以後急速に開田事業は進んだ。今もその徳は語りつがれている。

胸像は、平成８年（1996）「しまうつりの碑」の脇に説明板とともに建立されたものであり、今でも住民の尊敬の念は厚いものがある。

石川理紀之助翁夜学跡地の碑

前田君開渠記念碑（開渠=かいきょ。渠は水路のこと） 都城市山田町

しまうつりの碑の東30メートルの所にある。地方産業の育成に力を尽くした前田正名は、明治32年（1899）関之尾上流から水を取る用水路工事を行い中霧島谷頭野々美谷地区の開田に努めた。その功績を後の世に伝えるため建てた碑である。

前田君開渠記念碑

160 田之平（たのひら） 宮崎市高岡町　地図2−C−5

谷沿いにできた小平地を、平（ひら）と呼ぶことが多い。ここは浦之名川が深い山間部から出てきて、南向きの日当たりのよい平地を作り、広い田んぼが作られている。それでこの一帯を田之平（たのひら）と呼んでいる。

田之平橋

161 田平・平田（たひら・ひらた） 綾町　地図2−C−5

綾盆地西南部の綾南川右岸沿いに隣接（りんせつ）する地名。隣接するのは平田が飛び地のためであろうか。田平は大半が傾斜した山地である。平（ひら）は急傾斜地の意味で、田平は田地に面した傾斜地の意味と思われる。草などを刈り込んで肥料にするのに便利であった。一方、平田は田平の数メートル下段（南側）に隣接する平坦な小区域で、今は大半が人家になっている。平田は平坦地にある田地・水田の意味と思われる。平らな水田の意味ではおかしい。

162 タンポリ（たんぽり） 宮崎市　地図1−C−2

地元でタンポリ（津屋原沼）と呼ぶ池（入り江）が飛江田にある。一般に水溜（たま）りや溜（ため）池、溝、くぼ地、入り江を、それぞれタンブリ、タンポ、タンボリ、タンボというが、タンポリも同じような意味である。

タンポリ

昭和18年（1943）、日本海軍は赤江（宮崎市）に飛行場を造った。広い水田だった所にグリ石を並べ、そこに浚渫船（しゅんせつせん）で吸い上げた土砂をトロッコで運んで埋め立てたという。その土砂を吸い上げた跡がタンポリである。

ち

163 血捨ノ木（ちしゃのき） 高原町　地図3−A−1

珍しい地名である。伝説では、鵜戸神宮で生誕されたウガヤフキアヘズノミコトが、妃のタマヨリ姫とともに、高千穂の峰の麓の高原に移り住まれた。そこでイツセ・イナヒ・ミケヌ・ワカミケヌの4皇子が生まれた。お産の汚（よご）れものをこの地に捨てられたので、血捨ノ木というようになったという。現実には何から出た地名かはよく分からない。

血捨ノ木の地名表示

164 千代ケ崎（ちよがさき） 宮崎市　地図1−B−4

瓜生野の野首三さ路交差点付近から瓜生野川・前溝川にかけての字（あざ）名である。そのまま読めば千年を意味する千代（ちよ）の前（＝崎）の土地となるが、明治時代の地図には「千代（センタイ）」と振り仮名がある。「センタイ」地名の意味からいうと「崖、台地」を示すように、この地は野首を中心とする瓜生野台地の前の土地である。仙台・川内（センダイ）も同じ意味である。

つ

165 津蟹ヶ迫（つがにがさこ） 宮崎市　地図1−D−5

迫（さこ）とは狭（せま）く細く行き詰ったような谷、セコ（世古、瀬古）、サク（佐久、作）などと同じ意味。大淀川下流南部には30余りの「迫」のついた地名があり、その多くは里山の間に散在し、奥まった水田や平地、小谷である。津蟹（つがに）とは県内のほとんどで使われるモクズガニの方言で、津蟹ヶ迫はツガニが多く棲息（せいそく）していた迫が語源である。似たような地名に大蟹ヶ迫（おおかにがさこ）、蟹ヶ迫（かにがさこ）（郡司分）がある。迫田（大塚）や天ヶ迫など迫が付く地名は、大淀川下流右岸だけでも50ヵ所ほどある。

166 塚原（つかばる） 国富町　地図1−A−3

大淀川から本庄川にさかのぼって、次の合流点の左岸が塚原である。台地の上には『日向地誌』に記されている塚原古墳群の古墳が12基並んでいる。最近、縄文期、弥生期の中期頃の環濠集落（かんごうしゅうらく）※1の跡が発掘され、住居跡やV字溝、墓跡や土器を始め、軽石造りの祭具などをもとに、古代の人々の生活の様子が解き明かされた。まさに「塚（古墳）の原」の地名のとおりである。

塚原古墳群　第11号墳

※1 弥生時代の前期から中期にかけて多く、福岡の板付遺跡や佐賀の吉野ヶ里遺跡のように、二重三重に濠（ほり）をめぐらす大規模なものから一重のものまでさまざまな規模がある。
県内では、高鍋町の中尾遺跡や新富町の鐙（あぶみ）遺跡が知られている。
大規模な環濠集落の発達は、背後に戦争の時代があったことがうかがえる。

167 堤（つつみ） 小林市　地図2−C−2

元禄時代（1688〜1704）には、温水（ぬくみず）村と呼ばれていたらしいが、それは南向きの日当たりのよい土地であったことから付いた地名と思われる。のちに開墾（かいこん）が進み、そのため川を大きく分けて灌漑（かんがい）用水とし、そこに堤（堤防）が多く作られたので、堤と呼ぶようになったといわれる。また、江戸時代以前に佐土原藩から人々が移住し、その人々のかつての地名から堤と呼ばれたという。おそらくそのどちらも正しいと考えられる。

168 堤下（つつみした） 宮崎市　地図1−C−1

宮崎南小学校がある所を池ノ内といい、校庭脇には上ノ池と下ノ池という

「ため池」がある。池ノ内という地名が「ため池」から付いたことは容易に理解できる。その池ノ下の北、地形的には下に当たる所が堤下である。溜池の堤防の下ということから付いた地名であろう。

169 東霧島（つまきりしま） 都城市高崎町　地図3−A−2

高崎川の右岸に連なる長尾山地（ながおさんち）は、昔、霧島の高千穂の峰の大噴火による大量の溶岩流が流れて形づくられたという。長尾山地の東端に東霧島神社がある。当地が霧島山の東方の地であり、東の端を「つま」と呼んだことから東（つま）霧島の地名が発生したといわれる。東霧島神社は、霧島六社権現（ごんげん）※1の一社で、人々の信仰も厚い。境内には神話や伝説による遺跡も数多い。　山間部で谷も多く農業と山林業が主である。

東霧島神社

※1
6社権現（ろくしゃごんげん）
1. 霧島神宮
（きりしまじんぐう・鹿児島県霧島町）
2. 夷守神社
（ひなもりじんじゃ・小林市細野）
3. 霧島岑神社
（きりしまみねじんじゃ・小林市細野）
4. 霧島東神社（別名:祓川神社）
（きりしまひがしじんじゃ・高原町祓川）
5. 狭野神社
（さのじんじゃ・高原町狭野）
6. 東霧島神社
（つまきりしまじんじゃ・高崎町東霧島）

170 水流（つる） 宮崎市　地図1−D−4

川が湾曲した所または川の近くの土地に多く付けられる地名。南に向って流れてきた大淀川が、高松橋あたりから大きく曲がり東に流れるようになる。そのカーブした右岸に水流（大塚）がある。その対岸を鶴島（つるのしま）というが、これは水流が鶴（つる）に変わったものである。大淀川下流右岸には、有田に上水流、中水流、下水流、田吉に水流田、下水流田、下鶴などを始め、水流の地名がおよそ15ヶ所あるがいずれも同じような地形から付けられた地名である。

171 鶴島町（つるのしまちょう） 宮崎市　地図1−D−5

大淀川下流左岸で大きく東へ湾曲する砂州に当たる。大淀川改修工事が終了後の昭和10年頃に鶴島町が誕生し、同44年から鶴島１〜３丁目となった。鶴が飛来していたとの説もあるが、川辺の地や水路を「水流」といい、この地も以前は「下水流、上水流、沖水流」という字（あざ）名であり、「水流」を好い字の「鶴」に変え、砂州地であるから「島」と呼んだと思われる。

戦前の5万分の1地図

て

172 出来床（できどこ） 宮崎市　地図1−C−5

宮崎大橋の東詰（ひがしづめ）、小松川以西の大淀左岸にかつてあった旧字（あざ）名である。文字通り考えると「床が出来た」つまり「かつての川床が土地になった」と考えられる。大淀川が湾曲する凹側にあたり、上流からの土砂が堆積（たいせき）しやすい土地である。かつて川床であった場所に次第に土砂が溜（た）まり、川原のような土地になったことに由来するものと思われる。

173 出水口（でみずぐち） 宮崎市　地図1−C−5

現在の祇園１、２丁目の旧字（あざ）名であり、大淀川に面する土地の地名であった。瓜生野方面からの大淀川が直線的にぶつかる土地で、しばしば堤防が決壊し、「水が出る場所（＝口）」に由来すると思われる。昭和初期に建設省による宮崎市街地の大淀川堤防改修工事が行われているが、昭和29年の時点ですら、この地を「堤防決壊予想箇所」と記している新聞記事がある。

祇園二丁目の出水口公園

174 寺ノ前（てらのまえ） 宮崎市　地図1−D−5

瑞雲寺（ずいうんじ）の前ということから付けられた地名で、曾井（そい）城跡の北西にある。地区の西丘陵の中腹に瑞雲寺という曹洞宗の寺があったが、明治５年（1872）に廃寺となった。寺跡には住職や檀徒（だんと）の墓石、それに室町後期の六地蔵幢（ろくじぞうとう）２基ほかが残っていたが、道路が開通し石塔は移転した。

小山のふもとが瑞雲寺跡、手前が寺ノ前

175 寺ノ前（てらのまえ） 宮崎市　地図1−C−4

霧島寺の前ということから付いた地名と思われる。霧島寺は明治初めに廃寺となった禅宗の寺で、大淀川の堤防下に仁王像や供養塔が残っている。

と

176 働馬寄（どうめき） 宮崎市　地図1−D−5

道目木、泥目木（どうめき）という地名が東北地方に多くあり、これらは川や滝など水の音にちなむ地名といわれる。千葉県に百目木（どうめき）と書く地名、石川県には百成（どうめき）の地名がある。「とど」「どおど（百百）」「とどろき（轟、等々力）」などの地名と同じ意味。また、轟、驫は車や馬がたくさんで「とどろく」意味を表した文字であるという。

働馬寄の近くに小さな川があったか、もしくは曾井城の近くということから、多くの馬が飼われていたとも考えられる。県内に轟、土々呂などの地名は多く見られ、いずれも水の音に関する地名である。

177 遠目塚（とうめづか） 綾町　地図2−C−5

綾盆地の中央に西から東へ錦原洪積（こうせき）台地※1が突き出ている。遠目塚は錦原台地西南部の地名。かつては馬などの屍体（したい）捨て場のあるさびしい所で、狐（きつね）が住みつき美人になって人をばかしたという。トウメは狐の別名で、遠目塚は狐塚（きつねづか）の意味である。県内でも珍しい地名で宮崎市南方町、えびの市原田にある。なお、狐塚は東諸県郡国富町本庄、都城市平塚町・山田町、小林市南西方などにある。

※1 洪積台地
地質時代・第三期・更新世に形成された堆積平野が、その後の地質隆起によって、台地化したもの。

178 ドウメン（どうめん） 宮崎市　地図1−C−5

正確な場所は不明であるが、現在の祇園町と霧島町付近に位置した旧字（あざ）名である。「ドウメン」は全国的に散在し「道面、堂免、百目」などの文字が当てられ「どうめき」と同義である。川辺に多い地名で、水の「ざわめき→どうめき→どうめん」へ転訛（てんか）したとされる。同地においては、湾曲する小松川の水音を模（も）したものと思われる。

179 堂屋敷（どうやしき） 小林市須木　地図2−A−1

本庄川に沿って北上すると、ささやかな集落があるが、ここが堂屋敷である。集落の中央には薬師堂（やくしどう）があり、薬師瑠璃光如来（やくしるりこうにょらい）※1が祭られている。この薬師堂のあったところから堂屋敷と呼ばれるようになったといわれる。この辺りは昔の関所のあった所といわれ、ここには薩摩が辺路（へんろ）番所※2を置いて通行人の取り調べを行い、球磨（くま）地方から日向への取り締まりにあたったものであろう。

180 轟（とどろ） 都城市高崎町　地図3−A−3

太古の時代、都城盆地は広大な湖であった。姶良（あいら）火山の大噴火（約2万5000年前）で湖が埋まり、あふれ出た水がまとまって下流に流れた所が、現在の轟（とどろ）から下流の一帯であった。轟の対岸は高城町田辺地区であり、この両地区が接する地に、古代から落差が10メートル前後の滝があり、轟音（ごうおん）を発してとうとうと落水する状況から轟の地名が起こったという。

大正時代、轟ダムが建設されたが、上流の洪水被害が大問題になり、昭和になって撤去（てっきょ）※3された。

181 富吉（とみよし） 都城市山之口町　地図3−C−6

富吉地区には古来三俣院の宗廟（そうびょう）※4的野正八幡宮（まとのしょうはちまんぐう）があり、この八幡宮を中心に門田、前田、油田など田園地帯を物語る地名も多く、三俣院の倉（くら）などもあってこの地方では豊かな地域だったので富吉といわれるようになったと思われる。

※1 人々の病気をなおし、災害から守ってくれるという仏。

※2 本道以外の裏道などにに設けられた番所を辺路番所という。

「轟ダム跡」記念碑

※3 詳しくは16ページ。

富吉地区　安楽寺

※4 皇室の祖先を祭る宮。

的野正八幡宮（まとのしょうはちまんぐう）と「弥五郎どん祭り（やごろうどんまつり）」 都城市山之口町

奈良平安時代から三俣院の最も大事な八幡宮として敬（うやま）われてきた。今も昔の門前町のにぎわいや、三俣院の倉跡、御料田（ごりょうでん）※5などをしのばせる新町・蔵ヶ迫・油田・後田・角田などの地名が残っている。毎年11月3日に行われる弥五郎どん※6祭りには大勢の観客が訪れ、にぎわいを見せる。

平成元年（1989）文化庁は、弥五郎どん行事として国の無形民俗文化財に選択指定した。平成15年（2003）「弥五郎どんの館」が完成した。

的野正八幡宮

弥五郎どん祭り

※5 八幡宮でお使いになる田んぼ

※6 養老4年（720）、大伴旅人が隼人征伐をしたときの死者の霊を慰めたのが始まりと言い、「弥五郎どん」を先頭に行列は続く。

182 鳥居原（とりいばる） 都城市高城町、高原町　地図3−B−3

国道10号を北に向かって、石山小学校前を通り過ぎて、バス停「香善寺入口」から上り坂となる。この台地を鳥居原と呼んでいる。ここは霧島山の真東に当たる地点で、昔から「霧島遥拝所（きりしまようはいじょ）」と名付けられていた。霧島山を拝むので、山に向かって鳥居が立てられていた。薩摩藩の歴代藩主も、ここを通る時は、乗り物から降りて遥拝したと伝えられている。高原にも鳥居原という地名がある。ここは、狭野尊（さののみこと〜神武天皇〜）が東方に向かわれる時、人々が鳥居を建てて見送った所と伝えられている。

鳥居原

な

183 中河間（なかごま） 小林市須木　地図2−A−3

集落の中央を県道が走り、それに沿って須木川が流れている。この川の両岸に人家があるので付いた地名と考えられる。麓（ふもと）と九瀬（ここぜ）の中間部（点）に位置しており、現在もここには中間姓の人々が点在している。

中河間には、その中に田代・高野谷の地名が残っており、田代は水田の意味で、田代山というのは、田に入れる肥料に山の草を採って入れたので（緑肥＜りょくひ＞）この草を採った山のことをいう。高野谷の高野は、荒野のことで、昔、荒れ地を開墾した所をいうが開墾奨励ということから、初めは無税地とした。

184 中霧島（なかきりしま） 都城市山田町　地図3−B−2

元禄11年（1698）島津氏から徳川氏に差し出した『日向国覚書』（ひゅうがこくおぼえがき）の中に中霧島の名が出てくる。薩摩藩時代は安永郷（やすながごう）にはいっていた。鹿児島の側から見て、霧島山麓にある村々を手前の方から下霧島、中霧島、上霧島と見ていたので、この名前が残ったのではないか。明治22年（1889）宮崎県に町村制が施行（しこう）され、山田村、中霧島は山田村になった。明治30年（1897）代の谷頭一帯の台地は原野や畑作地帯だったが、前田正名（まえだまさな）の開田事業や、石川理紀之助（いしかわりきのすけ）の農民指導、大正2年（1913）の吉都線開通などによって開発整備され人口も増加し、町並みもできた。

中霧島小学校付近

185 永久津（ながくつ） 小林市　地図2−C−1

永久津、永久井野などの地名があるが、川に沿って長く広がる土地ということから、付けられた地名であると考えられる。

186 長田（ながた） 三股町　地図3−C−4

沖水川上流の地域で美しい峡谷の長田峡（ながたきょう）があり、ヤマメの養殖場（ようしょくじょう）やつつじが丘椎八重（しいばえ）公園、しゃくなげ園などあって、都城市近郊（きんこう）の行楽地となっている。渓谷に沿って長く入り込んでいる土地という意味であろう。

長田峡

187 永田（ながた） 小林市須木　地図2−B−3

国道265号で小林から須木に入ると新町で、旧須木村の一番の繁華街であった。経済・文化の中心であるが、明治の末頃までは、わずかにかやぶきの民家が10数軒点在したに過ぎなかった。県道の開通とともに車馬の交通も激増、人家も次々と立ち並んで現在のような新しい町となった。永田集落は村の中心を占めているが、地形から永い田のあったことにちなんで、そう呼ばれるようになったといわれる。

188 中水流（なかづる） 宮崎市　地図1−C−5

現在の祇園3丁目の旧字（あざ）名であり、大淀川に面する土地の地名であった。鶴島の旧字名「下水流、上水流」などと同様に、川辺の地や水路を「水流」ということに由来すると思われる。中水流と出水口との間にはかつて「上鶴」という地名のあったように、水流（つる）は「鶴、津留、都留」などの文字に変わることもある。中水流も現在は「中鶴児童公園」としてその名を残している。

189 永野（ながの） 都城市山之口町　地図3−B−4

山之口町麓（ふもと）に属（ぞく）しているが、高城町有水に近く、この地区の小・中学生は明治以来有水小・中学校に通っている。青井岳の峠を越える道が東岳（ひがしだけ）川沿いに走っている。細長く伸びている土地の状況から付いた名前であろう。

島津寒天製造所跡（しまづかんてんせいぞうしょあと） 都城市山之口町　塩水流忠夫

幕末に薩摩藩が浜崎太平次（はまさきたへいじ）に寒天（かんてん）を製造させた製造所跡が発掘（はっくつ）され、大事に保存されている。ここ永野、星原のほか石山でも製造し、中国、ロシアに密輸（みつゆ）していた。

復元された製造所跡

窯　跡

190 中之坪（なかのつぼ） 宮崎市　地図1−B−3

坪とは深くえぐられた地形や窪地（くぼち）をいう。中之坪は本庄川と三名川が合流する所なので、川が氾濫（はんらん）して水田を崩（くず）すことが度々あったと思われる。さらに、同地内に窪田（くぼた）という地名もあるが、窪は窪んだ所という意味があり、中之坪と同じように川の氾濫で耕作地が崩壊（ほうかい）したことから付いた地名と思われる。

191 中村（なかむら） 宮崎市　地図1−D−5

「中」は地域の地理的な中央、政治的・行政的・経済的な中心地をいい、地域の中央にある「村」を中村、本村、本郷、元郷などと呼ぶ。中、仲、那珂、那賀と同義語である。中村町は太田村の中の地名。近世は鵜戸街道[※1]と飫肥街道[※2]が通り、また、大淀川を利用した物資の交流で商業の町として栄えた。町の起こりは、中世末、島津氏が伊満福寺の門前町として作ったという。江戸時代は延岡藩領で、毎月市が開かれ多くの職人もいた。太田直三郎や岩切与平などの豪商が町を治めていた。

192 中山（なかやま） 宮崎市高岡町　地図1−B−2

縄文時代からの生活の跡などがあることから考えたい。北部低地の水田と南部畑地の間に森や集落があり、そこら一帯を中山と呼び地名として拡がったものと考えられる。それで、江戸時代以前から中の山と呼ばれていたものと考えられる。

193 流合（ながれあい）・吐合（はきあい） 宮崎市　地図1−D−5

水流川が大淀川に流れ込み、合流する所の地名。川の流れが合うという意味で宮崎県内では吐合（はきあい）ということが多い。全国的には渡合とか土合といい、吐合や流合と同じ川の合流点である。近くに水流（つる）の地名がある。

永野の墓地

永野の墓地に行って目に付くのは、ほとんどが伊集院姓と永野姓の墓であることである。これは永野が薩摩藩警備（けいび）上、重要な所であり、そのために伊集院姓の郷士（ごうし）と、永野に移り住んで永野姓を名乗った郷士を中心とする集落であったことを物語っている。

※1 宮崎市の大淀川右岸から神宮までの約４５キロメートル。
江戸時代は「鵜戸神宮往還」といわれた。

中山古墳

流　合

194 奈佐木（なさき） 小林市須木　地図2−B−2

ナセ（斜）キ（場所をいう接尾語）の転訛（てんか）。傾斜地（けいしゃち）の意味であると考えられる。戦国時代にはここに山城[※1]である奈佐木城（那佐木城・奈崎城）があり、明治初年まで寺もあった。現在は奈佐木城址公園（じょうしこうえん）が作られている（平成14年完成）。

195 夏木（なつき） 小林市須木　地図2−A−2

本庄川（綾南川）と九瀬（ここせ）川の合流点に沿って家が散在している集落である。この二つの川が交（まじ）わって、ちょうど釘の形のような丁字形となっているので、そこを古くから釘水流（くぎづる）と呼んでいる。なぜ夏木と呼ぶかについては、古老にもその記憶がないとのことで、はっきりしない。夏木と中河間（なかごま）との間を「川内（かわうち）」という。ここは山越えで、城越（じょうこし）と呼ばれていた。

196 波島（なみしま） 宮崎市　地図1−C−6

波島は昭和53年に誕生した新しい町名で、大淀川左岸北側の砂列上で阿波岐原町に隣接する。波島の言葉に広島や大島などと同じく洪水時にも島となっていた場所や波をかぶるような島を考えてしまう。しかし、実際は阿波岐原町の「波」と大島町の「島」から成る合成語で、新町誕生に際して地域住民の投票によって名付けられた。

197 縄瀬・塚原（なわぜ・つかばる） 都城市高崎町　地図3−A−3

高崎川下流地域の左岸から大淀川左岸の観音瀬（かんのんぜ）一帯の地域を縄瀬という。大淀川の川の瀬に漁猟（ぎょりょう〜魚取り〜）の縄張（なわばり）をする所が多いことから、縄瀬の地名が起こったという。瀬というのは、川底の浅い川の意味であり、高崎町内には観音瀬の地名もみられる。

地域内の塚原（つかばる）の地名は、古代の古墳群や地下式古墳群が、いろいろ残っていることから付けられた地名である。山田町には万ヶ塚、宮崎市には大塚の地名も見られる。

198 七日市（なんけち） 都城市高城町　地図3−B−5

高城中央公民館東側の旧薩摩街道[※2]に沿って七日市（なんけち）と呼ばれる地名がある。これは南北朝時代肝付兼重を高山へ敗走させた畠山直顕（ただあき）が敵・味方の戦死者を供養（くよう）するため建てた高称寺（こうしょうじ）付近で、７日の日に市（いち）が開かれるようになって名付けられた地名である。

に

199 錦原（にしきばる） 綾町　地図2−C−5

錦原は綾盆地に西から東へ突き出た標高70メートルの洪積台地。上代の頃は居住の中心地で、古くは吉井原といった。『日向地誌』に「原野　錦原…相伝フ古ハ吉井原（ヨシヰ）ト呼シカ後今ノ名ニ改メシト」とある。『三国名勝図会』には「錦原　百穀植ゑざることなし、其花五彩をなして鮮やかなり、故に土人其原野を錦原といふ、和泉式部の語より出たとかや」とある。和泉式部は平安中期（977年頃〜1036年頃）の恋愛経験や伝説の多い歌人。11〜12世紀の頃には錦原に青・黄・赤・紫・緑の五色の美しい花々が咲いていたのであろう。

※1 山の形を利用して造った城で、山頂に盛り土をしたり石垣を築いて、土累（どるい）、柵（さく）、塀（へい）、掘（ほり）などで守りを固めたもの。山城では、山の麓の川も守りに利用していた。山城は、いくつかの城（くるわ）で構成されることが多く、それらをまとめた城全体の大きな名前があった。
「くるわ」はそれぞれ独立し、簡単には城全体を落とせないようになっていた。

大淀川から縄瀬小学校をのぞむ

七日市と高称寺跡

※2 鹿児島から福山、都城、高城、国見峠を通って去川に出、高岡から佐土原に通じていた藩政時代の幹線道路。

200 西能登越（にしのとごえ） 宮崎市　地図1－D－5

天文10年（1541）、都於郡伊東氏（とのこおりいとうし）に謀叛（むほん）を企（くわだ）てた長嶺の長倉能登守（ながくらのとのかみ）は、飫肥の島津氏の援護を得たが、伊東義祐に討たれた。それで付いた地名という。しかし、天正15年（1587）に曾井で謀反をくわだてた領主の伊東祐兵に討たれた漆野能登守（うるしののとのかみ）という武将もいる。ただ、能登は狭い所に付けられる地名でノド（咽喉）と同源といわれ、野登、野遠、納戸などの地名も同じという。また、ヌ（沼）とト（処）で湿地を表すともいう。能登越は地形的には青柳川があり、その左岸は丘陵（現在団地）があり、対岸は天神山から続く丘陵がせまり狭い地形である。また、川も流れているので湿地だったことも十分考えられる。

能登越

201 仁田尾（にたお） 宮崎市高岡町　地図2－D－5

地形の特徴から付いた地名と思われる。「仁田（にた）」は谷間の湿地の意味で、「尾（お）」は山の尾根・峠を意味する。ここは仁田尾川の低地と奥深い山々に囲まれた地形である。昔、山の木材を切り出すのにトロッコ鉄道が敷かれていた。山に向かうときは数十匹の犬が引いていたが、後には機関車に変わった。対岸の面早流（もさる）が貯木場で、ここから大淀川河口へ運ばれた。

仁田尾川と大淀川の合流点

ぬ

202 温水平（ぬくみずでら） 高原町　地図2－D－3

山間地の谷底にできた小平地を、平（でら）と呼ぶことが多い。温水は、谷の南向きの土地で日当たりのよい所に付いた名称ではないかと思われる。温水が流れ出ていたかも知れない。自然の状態から出た地名である。谷沿いの小平地には、五ケ瀬川上流に鶴ノ平（つるのだいら）、浦之名川の上流に田之平（たのひら）など似た地名がある。

の

203 野首（のくび） 宮崎市　地図1－B－4

瓜生野に野首下のバス停があるが、これは野首という土地の下という意味であり、地名ではない。野首との表現からか、かつてこの地に首切り場があり、さらし首にしていたとの噂もあるがその史実はない。地名としての「首」は野山の細くなっている土地をさす。同地は裏手の台地が首のように細くなり、県道宮崎須木線に沿って再び小台地を形成している。まさに野首である。

類似の地名は、佐土原に野久尾（のくび）、高鍋町に野頸（のくび）があり、小林市に野頸城跡がある。

野首の地形

204 野尻（のじり） 野尻町　地図2－C－3

霧島山系から下ってくる大淀川の流れに沿って、高度は低くなる。山系の末端の野原なので野尻と言われたというが、『延喜式』※1にも出てくる古代日向16駅の一つで、古くから開けていたと思われる。これには「野後」（のじり）と記され、野の終わりの意味だろうと解されている。土持氏は恩賞として緒方次郎＝野尻次郎に野後を与えたといわれるが、その地名を自分の姓野尻に改めたといわれている。野尻町には、紙屋（かみや）・東麓（ひがしふもと）・三ヶ野山（みかのやま）の三つの大字（あざ）名がある。

大淀川支流の岩瀬川に「オオヨドカワゴロモ」の自生地がある。

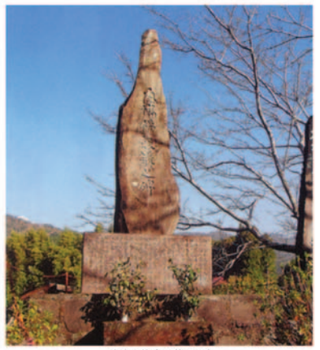
※1 平安時代にまとめられた国の儀式や制度などのきまりごとを記した規則集。延喜年間（901～923）につくられたので、延喜式という。
式とは、ものごとの施行規則のこと。

オオヨドカワゴロモ自生地
大淀川の支流岩瀬川にしか生育していない稀少（きしょう）植物である。カワゴケソウ科の一種で河川の急流に張りついて成育する水生の顕花（けんか）植物。かつてはカワゴロモと同種と考えられ、岩瀬川がカワゴロモ最北限と考えられてきたが、新種であることが平成11（1999）年に分かり「オオヨドカワゴロモ」として発表された。大淀という名の付いている生物としては珍しい。ちなみに「広辞苑」には「カワゴケソウ」として「南九州の深山の急流の岩上に生ずる。きわめて稀産（きさん）。」とある。

内場仏飯講の碑（うちばぶっぱんこうのひ） 野尻町

「内場（うちば）」とは霧島盆地にある里、つまり西諸県、北諸県、大隅地方の総称である。「講」とは同宗同門の団体（具体的には浄土真宗の信者団体）のことで「仏飯」を捧げ、そのお下がりを食べたことから仏飯講とも言われている。

藩政時代の250年を通じて、島津氏はその領地全域の浄土真宗（一向宗）の信仰を禁止したが、この地方はそれ以前に「薩州内場仏飯講」の講名と秘宝の二尊仏絵像を永正10年（1513）本願寺からもらったと伝えられている。寛政10年（1798）には弾圧の手が全体に及ばぬように講を三つに分けたといわれる。秘密のうちに集まり、浄土真宗の念仏を唱えたので、古来かくれ念仏と言われ、この顕彰碑は昭和16年５月５日に一番組子孫によって建てられ、昭和56年９月８日町指定史跡となった（場所は野尻町大字三ヶ野山南八所）。


内場仏飯講の碑

は

205 吐合（はきあい） 綾町・国富町　地図2－C－6

大淀川の支流本庄川は、国富町と綾町との境で綾南川（本庄川）と綾北川の二俣（また）に分かれる。逆に上流から下ると両川が合流して一つになる。吐合は川の合流点の意味である。現に合流地あたりを吐合（はきあい・はけあい）といい、いつの頃からか同じ地形を「マタ」とも「ハキ」ともいったのであろう。県内には吐・内吐・小又吐・大吐・三ッ吐（ばき）・砂吐（すなは）・吐合（はき・はけあい）・波喜・波帰・流合（はき・はけ）・流合（はけあい・ながれあい）や、落合・又合・合又などもある。

吐　合

206 花木（はなのき） 都城市山之口町　地図3－B－6

『歴代鎮西要録』（れきだいちんぜいようろく）に「太宰府（だざいふ）の役人、藤原隆家の子孫、実遠（さねとお）が日向三俣院（みまたいん～高城・山之口・勝岡などの地～）花木の地に初めて入り、花木氏の祖（そ）となった」と記している。それは平治元年（1157）ごろと思われる。藩政時代は麓が中心地であったが、現在は花木を花之木と呼び山之口町の中心地となっている。

古くからある地名であるが、その起こりは分からない。

山之口小より花之木地区をのぞむ

207 花見（はなみ） 宮崎市高岡町　地図1－B－3

大淀川の流れが現在のように粟野神社の下を流れ宮水流の飯山寺裏にあたり、倉岡糸原神社の辺りに流れていた頃、ここにはすでに自然堤防ができていた。それは「はなみ」（端水・端回・端波・鼻曲・鼻水）と呼ばれていたが、それが現在のはなみ（花見）となったのであろう。また、ここには宮水流の「渡し」※1があった。現在の国道10号花見橋のすぐ上流にあり、宮崎から高岡・穆佐に通ずる宮崎往還を結ぶ主要な幹線の「渡し」であった。

対岸から花見をのぞむ

※1「渡し」とは「渡し舟」のことで、橋が架けられる前の大淀川には、たくさんの「渡し」があった。昭和46年（1971）、宮崎市の「柏田渡」がなくなるまでは、大切な生活の足だった。

208 馬場崎（ばばさき） 宮崎市　地図1－C－4

蓬莱山城（ほうらいざんじょう）のすぐ南にあるので、馬場として使った所に付いた地名と思われる。蓬莱山城は平地に隆起している自然の丘を利用して城構えしたもので、県（あがた～延岡～）の領主土持宣弘が、永徳年間（1381～1384）に築城して、その末子染をここに置き、三須時信（みすときのぶ）を後見（こうけん）として万事を執行（しっこう）させた。

209 馬場田（ばばだ） 宮崎市　地図1−C−4

北に石塚城、南に高蝉城（たかせびじょう）があったので、武将の馬術鍛錬場であったことが考えられる。高蝉城は本勝寺の北西、生目南中学校の東の丘陵にあった。丘陵の上は平地となっており城跡と確認できる。近年まで畑地だったようだが現在は杉が植林されている。西の端には妙円寺跡の石塔が残っている。高蝉城の築城年、築城者は不明。応永８年（1401）島津氏の兵が立てこもって石塚城の伊東祐武を攻めようとしたが、祐武はこれを撃退（げきたい）している。馬場は婆、祖母などの文字もあて、崖や傾斜地、畦（あぜ）の意味もあるという。浮田の馬場田は水田が広がるので、畦の意味であることも考えられる。

石塚城跡

210 早水（はやみず） 都城市　地図3−C−6

大淀川右岸に位置する。早水神社境内の早水池からは盛んに湧き水（わきみず）が吹き出し、水の流れが早いことから早水という地名になったという。早水神社は、仁徳天皇の后（きさき）になった髪長姫（かみながひめ）の生誕地（せいたんち）と伝えられ、仁徳天皇、髪長媛、媛の父・諸県君牛諸井（もろかたのきみうしもろい）が祭られて、池の縁には沖水古墳もある。早水公園内には各県のあやめを集めた花だん「あやめ園」も造られている。

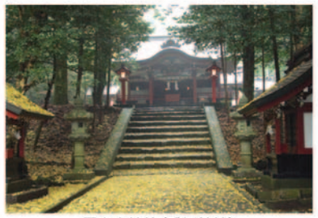
早水池

211 原（はら） 小林市須木　地図2−B−3

現在は行政・文化の中心である。平坦地の高台である土地の自然の地形から生まれた地名と思われる。かつて田んぼに面した所に一の宮大明神（だいみょうじん）という神社があり、その前には広い参道があり、大きな鳥居も建っていたが、今はない。この前面の田んぼは宮田と呼ばれており、今も古老の中には覚えている人もいる。

212 祓川（はらいかわ） 高原町　地図3−B−1

霧島東神社（祓川神社）の麓にある小さな川。イザナキ・イザナミの神が矛（ほこ）を持って降り立たれた時、多くの神々がここに集まり、おはらいをされた所という。霧島東神社に参詣する人は、ここで手を洗い、口をすすいで身を清めて神社に上ったといわれている。神社に近いおはらいの場からきた地名と思われる。


霧島東神社（祓川神社）

213 原（はる） 宮崎市　地図1−D−1

南九州では台地上の平地を原（はる・ばる）という。また、原、春、治、晴、榛は田畑のある所に付けられる地名である。本郷南方の原は南北に長い砂丘上にあり、西側と東側は低地で水田となっている。

214 番所下（ばんしょした・ばんどこした） 宮崎市　地図1−C−1

大淀川右岸河口近くにある地名。『日向国那珂郡之内』という絵図（宮崎県立図書館蔵）に津口番所とあり二階建ての建物が描いてある。八重川が大淀川に合流するあたりである。番所とは、江戸時代に道路や港など交通の要所に設け、通行人や船の出入りを見張ったり税をかけたりした所である。津とは船着場、港のことで、津口番所は大淀川を行き来する舟や上方など、他所からの船の出入りを監視した。今、八重川に「番所」の名が付いた橋がある。

現在の番所橋

昭和7年の番所橋　岩切八郎氏提供

ひ

215 東方（ひがしかた） 小林市　地図2−C−2

かなり広いが、真方（まがた）の東にあるところから、このように付けられたものであろう。南西方、北西方と同じようにその方角から付けられたと考えられる。

216 東麓（ひがしふもと） 野尻町　地図2−D−3

薩摩藩の外城（とじょう）[※1]の一つであるが、ずっと麓（ふもと）と呼ばれてきた。地頭仮屋の周囲の武士集落のことであるが、高原にも麓の地名があり、それと区別するため明治18年（1885）に野尻の麓が東の方角にあるので東麓と呼ばれるようになった。ここは現在も野尻町の中心で役場が置かれている。国道268号下の石窟（せっくつ）内には東麓石窟仏がある。かつての旧道沿いにあったといわれ、県指定史跡。鎌倉時代の作とされている。

217 提原・堤原（ひさげばる・つつみばる） 綾町　地図2−C−5

綾町の公共施設が集中している町民センターあたりの土地台帳にある小字（あざ）名。かつては雑木雑草の生えた川原であったという。ヒサゲ提は、ヒサギ楸・ヒサギ柃[※2]の当て字で、提原はヒサギ楸・柃の多い原野・川原の意味であろう。日向市富高に楸原（カワラヒサギの生育地）がある。

『日向地誌』に「提（ヒサゲ）原」とあり古くからの地名であるが、『綾郷土誌』（昭和57年発行）に「提原（ひさげばる）」ではなく「堤原（つつみばる）」とあり、町道名（堤原線、堤原川久保線）や橋名（堤原橋）にも使われている。町民の中には「提原」を知らない人や「堤原」と思っている人も多い。道路名の「堤原」は、昭和60年5月の町議会で承認されている。

218 一ツ葉（ひとつば） 宮崎市　地図1−C−6

宮崎市東部の大淀川以北の海浜を一ツ葉浜という。その南部の砂丘内側に一ツ葉入江と呼ばれる潟湖[※3]が形成され、かつては大淀川河口に達していた。戦前は宮崎近郊第一の名勝地とも言われたが、現在この入江に宮崎港が造られ、河口とは防波堤と水門で仕切られている。この浜にある松の木の中に往々に見られるという「一葉（＝単葉）」に由来する地名である。

219 姫城（ひめぎ） 都城市　地図3−D−5

中央部を姫城川が西流している。かつて旧領主館のあった地域を含む地名である。古くは姫木と書き、肝付兼重（きもつきかねしげ）の武将が姫木山に姫木城を築いた後、姫城と書くようになったのは、城との関わりだろうか。姿の美しいことを姫というので、城をさしていたのかもしれない。その姫木山も、戦後は壊されて市街地になり、市役所、図書館、美術館などがあり、市の中心地である。

220 広沢（ひろざわ） 綾町　地図2−C−4

綾町の最西南部、西諸県郡野尻町や小林市須木との境、大淀川の支流浦之名川（瀬越川）の上流にある集落名。広沢は広い沼沢地の意味である。かつては須木村岩前から綾村に入る西の玄関口であった。天明２年（1782）に薩摩藩の辺路番所（へんろばんしょ）が置かれた。平成12年３月浦之名川に農業用水確保のための広沢ダムが完成し、18年４月に用水の供給が始まった。灌漑（かんがい）面積は宮崎市・綾町・野尻町の1,664ヘクタールに及ぶ。

※1 外城（とじょう）とは、薩摩藩独特の支配制度で、領内を102の区画に割り、それぞれ地頭仮屋を設けた。周囲に麓（ふもと）といわれる武士集落をつくり、その地域の行政を管轄させ、これを「外城」といった。戦時には、そのまま麓の武士が軍団を形成して地頭の指揮に従って動員される仕組みだった。

※2 ヒサギ楸はキササゲまたはアカメガシワの古名。キササゲはノウゼンカズラ科の落葉高木で高さ5〜10メートルになり、河岸などに自生する。アカメガシワはトウダイグサ科の落葉高木。ヒサギはツバキ科の常緑低木。

※3 河口部の入り江にできる地形。海岸では、一ツ葉入江や一ツ瀬川入江のように、砂丘に囲まれて浅い湖になる。干潮の時には広い干潟になる。このような湖を潟湖またはラグーンという。

大淀川河口にわずかに残っている一ツ葉入江

姫城　都城市役所

浦之名川の広沢ダム（平成12年3月完成）

221 広島（ひろしま） 宮崎市　地図1−C−5

広島県の人々が多く移住したことに由来するという人もいるが、宮崎県の移民政策※1以前から存在する地名である。かつてこの地に多数の古墳が存在していたことからもわかるように、周辺よりもやや高い土地である。かつて広い島であったというよりも、周辺が浸水しても島のように水没しない広い土地に由来するものと思われる。「大島」も同じ意味と思われる。

222 広原（ひろわら） 高原町　地図2−D−1

文字通り土地が広く開けた所に付く地名。宮崎市の中心部から、佐土原に入る所にも同じ地名がある。村の前面が広く開けた土地である。高原町の広原は小林市との境界に近い所である。土地が広いので、上広原、下広原、西広原などがある。

ふ

223 笛水（ふえみず） 都城市高崎町　地図2−D−3

大淀川中流左岸と岩瀬川下流右岸に挟（はさ）まれて位置し、両川は北東で合流する。以前は水量も多く激流であり、岩に激しくぶつかる水音と風の混じり合う音がいかにも笛の音のように聞こえたことから笛水の地名が起こったという。昔は険しい深山で人も入り込まない奥地であったという。狭い谷間に人家と耕地が散在し、人口も少なく僻地（へきち）指定校の笛水小・中学校周辺が地区の中心地になっている。川の水量は多く、下流には岩瀬ダム（昭和42年竣工）と大淀川第一発電所が建設され、そのダムの貯水池として川面はおだやかであり、釣り人も訪れている。

224 福島（ふくしま） 宮崎市　地図1−D−5

寛文２年（1662）の大地震以前は、大淀川右岸河口近くにあった延岡藩の村。村人は大地震で村が海没したので、上流の延岡領内今江（今の福島町）に移った。その後、海没した所は土砂が堆積して島ができ、元禄５年（1692）幕府領となった。宝暦年間（1751〜1764）同じ幕府領であった吉村（宮崎市）の甚兵衛を、島番としてこの島に移住させた。明治初期に田吉村となった。現在、大淀川河口近くに福島の地名がある。島から起こった地名である。

225 船塚（ふなつか） 宮崎市　地図1−C−5

『日向地誌』には「宮崎神宮の後ろにある山陵を、地元の人はその形から船塚山と呼び、神武天皇の御船を埋めた場所とか、東征の際に御船を繋（つな）いだ場所と呼んでいるが、盲説なり」と記されている。その真偽はともかく、宮崎神宮内の船塚古墳が地名の由来であるとされる。地質調査によって、はるか昔は宮崎神宮付近も海や川であったとされるが、神武天皇の存在は明らかではない。

226 麓（ふもと） 都城市山之口町　地図3−B−6

奈良・平安時代の官道、日向16駅の一つ水俣駅（みまたえき）があったのはこの麓地区だといわれている。救仁駅（くにえき〜田野町七野〜）に向かう険しい青井岳（あおいだけ）山中の入り口であるから山之口の地名が付けられた。薩摩藩時代から、ここに地頭館があったので府本（ふもと）といわれていた。それが麓となった。同じような所が高崎麓で、学校名は山之口は「麓小学校」、高崎は「高崎麓小学校」として区別している。

※1 藩政時代には薩摩藩の政策で西諸県郡や北諸県郡に移民が行われた。明治36年（1903）〜大正3年（1914）の間に県は移民事業を進め、東諸県郡や宮崎郡などに約1700戸の移民が行われた。

広原小学校付近

笛水地区

福島町

水俣駅跡六十田付近

※国重要無形文化財指定
「山之口麓文弥節人形浄瑠璃（ぶんやぶしにんぎょうじょうるり）」
（人形の館）

この麓地区に伝わる一人づかいの人形芝居「文弥人形」が1995年国の重要無形民俗文化財に指定され、人形の館も建設されて、定期的に毎年上演され多くの観客が訪れている。

人形浄瑠璃

地頭館跡の人形の館

227 麓（ふもと） 宮崎市高岡町　地図1−C−2

フモトとはフミモトすなわち山をフミ始める所、山のモト（ハジマリ）の意味だという。ここは山に囲まれた自然豊かな所で、文字通りその「ふもと」に位置する。昔は城南と呼ばれていた。穆佐城（むかさじょう）の南に位置し穆佐地区の中心として栄えた。城の麓にあるので麓と呼ばれるようになったと思われる。

228 麓（ふもと） 高原町　地図2−D−2

麓は、郷の中心をなす城山の麓のことである。薩摩藩では、鹿児島の鶴丸城の外に、領内の要地に102の外城（とじょう）を置いた。外城と言っても城郭（じょうかく）があるわけではなく、地頭仮屋を置いて、その周囲に武士集落をつくり、そこを麓と呼んだ。麓は、屋敷割がなされ武家屋敷が並んでいた所であった。

229 麓（ふもと） 小林市須木　地図2−B−3

旧薩摩藩領には多数の麓がある。かつての須木城（松尾城・鶴丸城）の城山を中心として麓と呼ばれた。

230 古城（ふるじょう） 宮崎市　地図1−D−4

伊満福寺（いまふくじ）に連なる山の尾根に、曾井（そい）城が築かれる以前から城があった。新しい曾井城に対して古い城、つまり古城といったことから村名なった。明治初期にはその城跡に９戸の人家があったということから、その城は早い時期に廃棄されたと思われる。

ほ

231 法華嶽（ほけだけ） 国富町　地図2−B−5

「法華経」はお経の中の一つの略称、法華嶽は寺域と周辺の山や村落を含めて言う。霊山ということから、この名が出たと思われる。

古くから法華嶽薬師寺は日本三薬師の一つとして、日本国中の人々の信仰を得て、中世にこの地一円を支配した伊東氏や島津氏の庇護（ひご）を受け、広大な寺内に御堂、宿坊、三重塔、鐘楼、山門などをいくつも備え、栄華を誇っていた。平安中期の女性歌人和泉式部（いずみしきぶ）がこの寺で修業して難病を治したという伝説がある。

穆佐城跡

古城跡

法華嶽薬師寺の参道

232 細野（ほその） 小林市　地図2−C−1

火山の噴火によって、裾野（すその）に作られた段丘に挟（はさ）まれた、低地の細い野原という地形からきたものと考えられる。細野、長野、野尻など、自然の地形に関連する地名は多い。

233 穂満坊（ほまんぼう） 都城市高城町　地図3−A−5

大井手井堰、松山池、中池を水源とする大淀川に近い一帯で、水田面積は高城郷内で最も広く「ほまんたんぼ」といわれてきた。穂満坊の地名もこの田んぼにちなんだ名で、稲が豊かにみのるようにと願って近世以降に使われるようになった当て字だといわれている。

穂満田んぼを見守る田の神

234 本郷南方・北方（ほんごうみなみかた・きたかた） 宮崎市　地図1−D−1

本郷とは郷の一部で最初に開け、付近の発展の基礎になった土地で本村（もとむら）ともいう。本郷の地名は古く、鎌倉時代初期、建久8年（1197）に作られた土地台帳『建久図田帳（けんきゅうずでんちょう）』にある八条女院領国富庄の本郷に由来する。国富庄は、北に新田、佐土原、那珂、穂北などの児湯郡と南に左右恒久、田吉、加納、国富本郷、熊野などの宮崎郡があり、国富本郷は土持太郎宣綱（つちもちたろうのぶつな）という人物が治めていた。

国富本郷は地理的に国富庄の中心部にあり本郷の地名が付いたものと思われる。後に国富本郷は本郷北方、本郷南方、郡司分に分かれた。

235 本庄（ほんじょう） 国富町　地図1−A−2

本庄は古くから交通の便も良く、古代の古墳などが町の中に多く残っている。荘園の中でも中心地で、人も多く集まったので本庄と呼んだ。江戸時代に幕府は本庄などを幕府領（天領）にした。九州の天領を治める代官所は大分県日田にあり、日向（宮崎県）を治める役所は日向市富高（とみたか）にあった。そこから手代が本庄にある「仮屋」と呼ばれる役所に来て、年貢などの用務を済ませていた。本庄は殿様がいなくて、庄屋と町の年寄りの手で運営されていた。

本庄は古墳の町である

236 本庄稲荷町（ほんじょういなりちょう） 国富町　地図1−A−2

この神社は本庄古墳群の第38号「剱ノ柄古墳（けんのつかこふん）」の上に建てられている。ここに古墳が造られた後に、神話に出てくる神々が祭られたと由緒に書かれている。その後、稲の豊作を願う稲荷信仰が本庄商人などを中心に広がり、この地を稲荷町と呼ぶようになり、たいへんにぎわった。旧暦２月の初午（はつうま）の日にある縁日に、杉の小枝を挿し木にする風習があり、植木市が始まったといわれている。

樹木の茂った稲荷の境内

ま

237 前田（まえだ） 都城市高崎町　地図3−A−2

霧島山麓の湧水が高崎川となり南東に流れ、国道221号バイパスが縦断している。水量豊かな水田は古代から開発され、昔、高天原の神々の食する稲田が設けられていたことから「前から開けていた田」の意味で前田の地名が付いたと言われる。以前は麓（ふもと）とも呼ばれた。前田橋の近くにある高崎麓小学校にその歴史が感じられる。麓は島津氏領では、地頭館（ぢとうやかた）を中心とする武士の集落である。山之口町の麓も同類である。明治の中頃に高崎村の発足で、役場が大牟田地区に設置されるまでは数百年にわたり、政治、行政の中心地であった。旧国道沿いには以前の郷士屋敷（ごうしやしき）の町並みの名残りも見られる。

集落の中心地にある郷士屋敷

238 真方（まがた） 小林市　地図2−C−2

『日向地誌』には、「本村は元禄（1240〜1688）の頃は、大別府村と二つに分かれていたが、いつかはっきりしないが、後に合併して真方村となった」とあり、かつての麓のあった所といわれる。地域の中心部であるところから、このように呼ばれてきたと思われる。

239 牧の原（まきのはら） 都城市高城町　地図3−B−6

大井手の北側高台一帯を牧の原という。前方後円墳３基と円墳13基の県指定古墳群と髪長媛のブロンズ像で知られている。

牧の原という地名は髪長媛の父牛諸井（うしもろい）の牧場がここにあったから牧の原といわれるようになったと考えられている。高崎町の古墳群の中に小牧という地名があり、野尻町に牧の平という地名が残されているが、同じ頃の牧場跡ではないかと思われる。

牧の原にある髪長媛のブロンズ像

240 間越（まごえ） 宮崎市　地図1−C−4

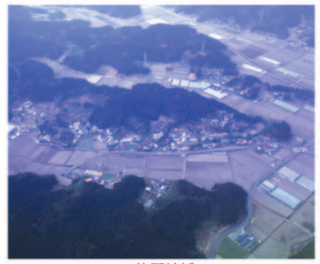
間越、間越前、間越後と三つの地名が南北に連なっている。越は峠道とか越える場所に付けられる地名と言われる。間越の西側は水田が広がり間越はやや高くなっている。間（ま）は馬、真、万などを用い、真のという意味や場所を表す意味があるという。小高い丘を越えるということから付いた地名と思われる。

241 松山（まつやま） 宮崎市　地図1−D−5

大淀大橋の北詰（きたづめ）一帯の地名であり、藩政時代には瀬頭村の字（あざ）地だった。江戸時代末期の絵図には、この地の大淀川左岸に松林が描かれており、『日向地誌』にも根固め松・竹のある堤防があったことが記されている。松林のある堤防（＝小山）があったことから寛永年間（江戸時代初期）に松山と呼ばれたとの説がある。

242 的野（まとの） 宮崎市高岡町　地図1−C−3

周囲を山林に囲まれ、その裾野（すその）に水田地帯が広がっている。この地は、明治の初めまで薩摩藩領であった。地区の人々は、西郷隆盛の家来が「的場」（まとば）として弓の練習をしたことから「的野」と呼ばれるようになったと伝えている。


的野地域

243 馬登（まのぼり） 高原町　地図2−D−2

伝説では、狭野尊（さののみこと〜神武天皇〜）が、東に向かって旅立たれる時、住民が馬を献上（けんじょう）した所という。迎（むかえ）という所があるが、狭野尊をお迎えした所という。神話・伝承をもとにした地名である。

み

244 三ヶ野山（みかのやま） 野尻町　地図2−C−2

薩摩方言ではずっと「みかんやま」と呼ばれてきた。そのせいか、古文書には「密柑山」あるいは「甘柑山」と記されているものもあるが、当て字であろう。

三ヶ野山には、77の小字（こあざ）があり、そのうちの一つに三ヶ野山がある（ここは現在アサヒサッシ工場とアルス工場の間になる）。かつて、この付近は一面の山林で、三つの森に分かれ、その中に祠（ほこら）が三ヵ所祭（まつ）ってあった。そこは三方を山に囲まれ、その向こうに霧島の山が望まれる。霧島信仰の一つとして三つの山からも霧島を望むことができるので、三ヶ野山と言われるようになったと伝えられる。

この山林は次第に開墾されて畑地となり、現在の姿になったといわれる。かつての三つの祠は、現在でも北八所の永迫家に、氏神として祭られているという。三ヶ野山氏が栗須（くりす）を中心に統治していたので、そう呼ばれるようになったとの説もある。

245 水窪・水久保（みくぼ） 綾町　地図2−C−5

綾盆地の西部、綾南川Ｖ字渓谷に入り込む所の左岸沿いに水窪（みくぼ）があり、大正４年（1915）に発電開始の綾南発電所がある。また、水窪の北側の広い台地上には戦後入植地（にゅうしょくち）の水久保（みくぼ）がある。久保は窪（くぼ）の当て字で、ミクボは水の湧く窪地の意味である。今も小さな湧き水の窪地が何ヵ所もある。綾北川の下流、綾町と国富町との境の川久保は川沿いの窪地の意味である。

綾町南俣の綾南発電所（大正4年発電開始）

246 三股（みまた） 三股町　地図3−C−6

三股町のいわれは、明治３年（1870）高城郷（たかじょうごう）が上三股郷（かみみまたごう）と改められ、勝岡郷（かつおかごう）と梶山郷の二つの郷を合わせて下三股郷ができたことから生じた。

明治５年（1872）樺山（かばやま）村、宮村、蓼池（たでいけ）村、餅原（もちばる）村、長田村の五村が三股郷となり、明治22年（1889）三股村となった（５村は大字（あざ）名として残った）。明治23年三股町となった。

三股町中心街　三股町役場

247 三松（みまつ） 小林市　地図2−C−2

かつては、いずこにも街道筋には松並木があった。ところが後にはこの地域の中心部だけ三本になってしまったという。そこから三松という名が付いたといわれる。三本松の意味であろう。

248 宮王丸（みやおうまる） 国富町　地図1−A−3

特別な宮の一郭（かく）をなす地名といわれている。丸は区切られた土地のことである。本庄台地の東の突端部に位置し、北村と南村から成立っているが、村の中心の場所に大原神社があるので、この一郭をさしたのであろう。お城でも一の丸、二の丸などの同語がある。創建は天文10年（1541）頃と言われている。

また、この地は県内で唯一の藺（いぐさ）[※1]栽培と加工が昭和の終わり頃まで行なわれた所である。『日向地誌』によると、藺の栽培・加工をする農家が90戸、加工品は丸藺のござなどが1600枚、七島藺（しちとういぐさ）の蓆（むしろ）など5,000枚が作られていたと記されている。

地区の中央に大原神社がある

※1 イ（イグサ）
茎を畳表やゴザの材料にした。また、茎の髄（ずい）を燈心にしたのでトウシンソウとも言われる。

249 都城（みやこのじょう） 都城市の市名　地図3−D−5

初代領主の北郷資忠（ほんごうすけただ）が、文和元年（1352）足利尊氏（あしかがたかうじ）から島津荘内（しまづしょうない）に北郷（今の庄内・山田）300町歩を与えられ、山田の古江に治所を設けた。二代領主北郷義久（よしひさ）は、天寿元年（1375）神代（かみよ）の時代に神武天皇（じんむてんのう〜初代の天皇〜）の宮居（みやい）の跡と言われる「南郷都島（みやこじま）」（今の城山辺り）に城を築いて移住したので「都之城（みやこのしろ）」の名が起こり、その後、都城（みやこのじょう）の名の起源となったという。元和元年（1615）幕府の一国一城令で廃城となり、城主は今の市役所辺りに領主館を建て移住した。その後、城山公園として整備され、本丸跡には歴史資料館が建てられている。宮丸、都原、都島も神武天皇伝承にちなんだ地名であろう。

本丸跡は歴史資料館になっている

250 宮崎（みやざき） 宮崎市　地図1−C−5

神武天皇が日向の国に居られた時代に、宮居（御殿）を置かれた所を宮崎の宮と称したので、そこから起こった地名と伝えられている。伝承では、宮居の地は宮崎市下北方町の皇宮居（こぐや）という所。宮の前に開けた土地であるから、宮崎というようになった。前・先は崎と同義で「さき」と読む。奈良時代の神護景雲（じんごけいうん）２年（768）７月に「日向国宮崎郡の大伴人益（ひとます）が白亀を献上した」ことが『続日本紀（しょくにほんぎ）』[※1]に書かれている。この時期、すでに宮崎の地名があった。

皇宮屋

※1 日本書紀についで編さんされた歴史書。

251 宮水流（みやづる） 宮崎市高岡町　地図1−C−3

地元では、瓜田川（うりたがわ）が粟野神社の横を流れており、「お宮の横を清らかな水が流れる」ということから「宮水流（みやづる）」と呼ばれるようになったと伝えられている。水流（つる）は川の流域のことを意味する。また、昔の交通・輸送は大淀川を利用していたので、船着場のある宮水流は商店街として大変にぎやかだったらしい。古い文書に「宮津留」の地名があるが、津は港を意味するので、その地名で呼ばれたのであろう。それがいつから今の宮水流（みやづる）になったかは、分からない。

下倉 粟野神社

252 宮ノ下（みやのした） 宮崎市　地図1−B−3

有田の鎮守白髭神社（しらひげじんじゃ）の下ということから付いた地名。白髭神社は工藤祐経が日向国の地頭に任じられたとき、同地方の鎮守（ちんじゅ）として勧請（かんじょう）したものと伝えられ、鎌倉幕府から社禄50石が給された。後にこの地は島津氏の所領となっている。

白髭神社

253 宮ノ谷（みやのたに） 綾町　地図2−C−5

綾盆地西南部の綾南川右岸沿いの集落名。宮ノ谷はお宮近く谷間の意味である。かつては三宮（みつのみや）大明神が祭られていたが、流鏑馬（やぶさめ）中に人馬とも馬場尻の池に沈む不慮（ふりょ）の事故があり、天和元年（1681）に錦原台地の東部に遷宮（せんぐう）された。遷宮以前は五ヶ所であったが、以後は元宮神社を祭り宮ノ谷（小字（あざ）名）という。宮ノ谷橋の所に「宮ノ谷地名発祥（生）の地」の石碑がある。なお、三宮大明神は明治５年に綾村内（入野村は含まれず）の25社を合祀（ごうし）して綾神社となった。

宮ノ谷地名発祥（生）地石碑

254 宮ノ馬場（みやのばば） 宮崎市　地図1−B−4

跡江城は生目古墳群がある丘陵の東端にあった。築城年、廃棄年は不明。建武３年（1336）浮田荘の預所（よは）瓜生野八郎左衛門尉がこの城にいた記録がある。宮ノ馬場は跡江城の北１キロメートルにあり、馬術の鍛錬場であったと思われる。しかし、馬場という地名は通路の名称にも使われるので宮ノ馬場は跡江神社前の通りということも考えられる。

跡江城跡

255 宮ノ前・宮ノ後・宮ノ元（みやのまえ・みやのあと・みやのもと） 宮崎市　地図1−C−1

恒久神社に関係する地名。恒久神社は寛治４年（1090）の創建で、コノハナサクヤヒメノミコト・ニニキノミコトなどを祭る。社伝によると、毎年９月９日に都万神社（西都市）に参り豊作を祈願していたが、寛治元年大雨が降り大淀川が増水して川を渡ることができなかった。この年から大淀川右岸の村々は五穀が実らず疫病が流行した。それで都万神社から神を勧請して一ノ宮大明神を創建、明治４年（1871）には恒久神社と改めた。神社があるあたりが宮ノ元、その前後が宮ノ前・宮ノ後である。

256 宮村（みやむら） 三股町　地図3−D−6

この地区には御年神社（みとしじんじゃ）や諏訪（すわ）神社があるので宮村と呼んだのではないかと思われる。昔は「宮」（みや）といっていた。藩政時代になると寺柱（てらばしら）村と呼ばれた。今の宮村は、寺柱、大鷺巣（おおさぎす）、小鷺巣の三つの地区から成っている。これは明治５年（1872）のことだと言われている。宮村小学校は、栄仁寺（えいにんじ）の跡に明治８年（1875）に建てられた。宮村と同様に寺村の地名も各地にある。

宮村小学校前

寺柱（てらばしら） 三股町

三股町立宮村小学校の近くに寺柱という地名がある。地名のいわれはさだかでないが、室町時代から使われていたようである。江戸時代に関所が置かれ、今は「寺柱関所跡」という石碑が建てられている。この番所より先は牛之峠（うしのとうげ）を越えて飫肥（おび）領に続いていた。江戸時代は都城と飫肥を結ぶただ一つの道で、幕府の巡見使（じゅんけんし）※1もここを通って飫肥領に行っていた。９回通った記録が残されている。

寺柱関所跡

※1 徳川幕府の命をうけて、各藩の様子を見てまわる役人。

257 名田（みょうで） 宮崎市　地図1−C−5

『日向地誌』には、大淀川が瓜生野方面から南へと湾曲する左岸あたりに明治８年（1875）まで名田村があったと記されている。現在県道宮崎須木線沿いにある名田神社（みょうでじんじゃ）がその地名を今に伝える。名田（なた）には、川岸の地を意味するとともに、名田（みょうでん）は所有者の名を付けた田の意味がある。同地においては前者が地名由来と思われる。

名田神社

む

258 六日町（むいかまち） 国富町　地図1−A−2

市（いち）の立つ日が町の名になった例である。本庄は天領になるとまわりの村や町からいろいろな物や多くの人が集まるようになり、物と物を交換したり、また余った物を売ることができるようになった。そこで、毎月六の付く日（６日・16日・26日）に市が立つ町を六日町、毎月十の付く日（１日・10日・20日）に市が立つ町を十日町（とおかまち）と呼ぶようになり、競い合ってよい町を作るように力を合わせた。町の名前と伝統は今も守られている。

市の立つ日が町名になった町

259 穆佐（むかさ） 宮崎市高岡町　地図1−C−2

穆佐が歴史に現れたのは平安時代で、日向28郷の一つとして穆佐郷（むかさごう）とある。早くから開けた土地である。ビタミンの父高木兼寛（たかきかねひろ）の出身地でもある。「むかさ」のムカは「向かいの地」の意で、穆佐の低湿地帯をス（三角州）といい、川向こうからながめてこの地域を「ムコス」と呼んだのが、「ムカサ」になったといわれている。穆佐の漢音は「ボクサ」と読み「ムカサ」とは読めない。住民がわきあいあいと助け合う姿を願い、この漢字が当てられたのではないかといわれている。

高木兼寛（かねひろ）（1849〜1920） 旧穆佐村小山田出身

郷土の誇れる世界的医学者で、当時、不治の病（ふじのやまい）とされていた「脚気（かっけ）」の予防・治療法（ちりょうほう）を確立した。ビタミンが発見される20年も前に脚気の原因は栄養の欠陥（けっかん）で、食事を改善すれば病気を治せるという「栄養説」をとなえ、ビタミン発見のもとを築いたのでビタミンの父と呼ばれている。

また、有志共立東京病院（現在の東京慈恵会医科大学病院）の設立・日本初の看護婦教育所を開設した。

ビタミンの父・高木兼寛像

260 牟田町（むたちょう） 都城市　地図3−C−5

ムタマチとも呼ばれる。北部は西流する年見川を挟（はさ）んで大王町と接する。牟田（むた）は湿地のことで、かつてこの地が湿地であったことによる。高崎町の大牟田や高原町の蒲牟田の地名と同様であろう。戦後、戦災復興事業（せんさいふっこうじぎょう）※1により湿地が埋め立てられ、住宅地に変わった。その後市内最大の飲食店街になり夜間はにぎわう。

牟田町

※1 戦争の被害を直し、盛んにする。

261 無田ノ上（むたのうえ） 宮崎市　地図1−C−4

牟田や六田は、湿地や沼地をいう。宮崎でもぬかり込む湿田をいう。川の近くや麓で山水がじめじめとしみ出てくる、ぬかった田をいう。本郷南方に上無田、富吉に六田という地名があるが、意味は同じである。

左の方の集落が無田ノ上

262 六野原（むつのばる） 国富町　地図1−A−5

六野原台地は昔「牧原」、「大原」、「中原」、「前原」、「出水原」、「牟田原」の六つの原野が連なっていたことから付いた地名といわれている。昭和17年に陸軍飛行学校が置かれることになり、ここに飛行場が建設されて福岡県太刀洗飛行学校木脇飛行隊が置かれた。

工事の始まりと共に数多くの古墳や地下式墳墓が見つかり、貴重な埋蔵文化財が発掘された。現在でも県立博物館などに展示されているものがある。広い平原は中世から伊東勢と島津勢の戦いの場となった。

飛行場を守るために造った陣地（トーチカ）

も

263 面早流（もさる） 宮崎市高岡町　地図2−D−5

昔は浦之名郷の中にあり、去川への大淀川に沿った集落であった。ここの川は岩石が多く、しかも高低の差が大きいので流れは激しく早流川（さるかわ）と名付けられていた。それに高岡郷の頃、薩摩街道から見ると流れの速い水面がキラキラと光っていたので、ここ一帯の集落は面早流といわれている。

面早流バス停

264 母智丘（もちお） 都城市　地図3−C−2

横市に標高300メートルの丘陵（きゅうりょう）があり、母智丘という。元は餅丘（もちのようなおか）と呼ばれていた。丘上には大きな石が露出し、昔は石峰（いしみね）と呼ばれ、岩穴には白狐が住んでいたということで、稲荷（いなり）社も祭られている。明治のはじめに創建（そうけん）された母智丘神社があり、麓からの長い桜並木（千本桜と呼ばれる）は毎年桜祭りでにぎわう。

稲荷神社

母智丘神社

母智丘の桜祭り

265 本城（もとじょう） 宮崎市　地図1−D−3

古城の西の時雨（しぐれ）に本城という城があった。地名はこの城名による。この城は時雨の北東約800メートルの山頂にあり、自然の丘陵を利用して築かれた。築城年、築城者不明。古い城跡で、元禄11年（1698）10月に伊東氏の家臣川崎祐盛が建白した書に、「もし天下大乱の世になったら、中野の清武城を本城とし、この城を取り立てて支城として戦うべきである」と述べているほどで、要害堅固（ようがいけんご）な地に造られた城であった。

本城跡

266 元町・八日町（もとまち・ようかまち） 綾町　地図2−C−5

綾盆地の綾南川下流左岸沿いの江戸時代から栄えた集落。今はその面影もない。元町は元からの町・中心の町の意味、八日町は八の付く日に蔵（くら）の出し入れが行われたことにちなむ。江戸時代には薩摩藩の米蔵があり、昭和の初めまでは綾村の表玄関口であった。夕方白い帆を張った舟が綾南川を上ってくる光景はのどかな綾村を象徴する一幅（いっぷく）の絵であった。

267 森永（もりなが） 国富町　地図1−A−1

モリ＝盛り土がナガク続いているような地形の所をさして「もりなが」と呼んだといわれる。九州山地に続く台地の間を綾北川と綾南川が豊かな水を運び、合流点あたりの扇状地（せんじょうち）は水の便が良く、作物がよく出来た。『日向地誌』によると、森永とその周辺の竹田、須志田、深年、八代、綾の村々の一戸あたりの馬の平均飼育数は1.16頭である。このあたりでは牛馬の飼育が盛んで、合流点の近くの川原では明治37年頃から、昭和21年頃まで競（せ）り市が年２回ほど開かれてにぎわった。

本庄川の橋から見る森永地区

268 門前（もんぜん） 宮崎市　地図1−D−4

伊満福寺（いまふくじ）の門前に当たるので、このように呼ばれた。伊満福寺は山号を池上山といい真言宗、本尊は聖観音である。寺伝によると推古天皇の勅願所（ちょくがんしょ）として、推古天皇21年（613）に聖徳太子の命（めい）で百済国僧日羅上人（くだらこくのそうにちらしょうにん）が開山した。日向七堂伽藍（ひゅうがしちどうがらん）※1の一つ。中世には都於郡伊東氏、近世には延岡内藤氏などに保護された。明治４年（1871）に廃寺、同17年復寺した。

門前という地名は大塚町の長久寺前にもあり、同寺の山門の前ということである。お寺や神社の前にできる町を門前町という。

伊満福寺

※1 **日向七堂伽藍**
日之御崎寺（白浜）
円南寺（加江田）
勢田寺（清武町勢田）黒坂観音
松崎寺（松崎）
伊満福寺（古城）
朝倉寺（金崎）
久峰寺（広瀬）

や

269 屋倉下（やぐらした） 宮崎市　地図1−D−5

曾井城跡の南にある。城の櫓（やぐら）の下に当たるのでできた地名。櫓（やぐら）は矢倉とも書く。武器を置く倉とか、四方を展望するために設けた高楼（こうろう）、または射撃のために城門・城壁の上に設けた建築物である。曾井城は高さがおよそ25メートルあったようだから、高楼であったと推測できる。

270 弥次川（やじがわ） 綾町　地図2−C−5

水源（すいげん）は綾町錦原台地の西側山地で、錦原台地・野首谷・平地の開元（かいもと）集落を東流する一級河川で、錦原台地の大字南俣と大字北俣の境になっている。地元では耶治川と書きヤジュ川ともいう。ヤジは谷地（やち）のなまりで、ヤジ川は低湿地・谷地を流れる川の意味である。開元集落で浦田（うらんた）用水と合流し、途中から東流する郷鳴川（ごしきがわ）と南流する中坪川（なかつぼがわ）に分かれ、綾盆地東南部の灌漑（かんがい）用水となる。

屋倉下

271 安久（やすひさ） 都城市　地図3−D−5

萩原川の支流に安久川がある。島津の祖の忠久（ただひさ）が島津の庄を治めるために、当地に南郷堀之内（なんごうほりのうち）の堀内御所（ごしょ）※1を設けた時、領内の安穏長久（あんのんちょうきゅう）※2を願いその内の２字をとって「安久」と名付けたという。堀之内御所（ほりのうちごしょ）の記念碑が立てられていた。都城地方の代表的な民謡の安久節（やっさぶし）も伝えられている。堀の内は、堀をめぐらせた館のある所を意味する。

安久節（やっさぶし）踊り

※1 身分の高い人の住む建物。

※2 無事におだやかに暮らすこと。

272 柳本（やなぎもと） 宮崎市高岡町　地図1−C−2

島津八代久豊が穆佐（むかさ）城主の時、ある年の正月に山で初狩りをした帰り、橋口の前の道ばたで休憩をした。一休みし、ここを発つ時ちょっとした思いつきで「柳を逆さにさしても根付くものと聞くが、狩りの記念にここに柳の枝を挿（さ）しておこう」と言って、道の西寄りの所に挿（さ）しておいた。この柳は翌春から芽ぶいてスクスクと伸びたという。そのことから、この地名が生じた。

273 梁瀬（やなぜ） 宮崎市高岡町　地図2−D−5

早瀬などで川魚をとるための仕掛けを「梁・築（ヤナ）」といい、その場所をヤナセという。ここは浦之名川の下流で以前は梁が仕掛けられていた。しかし、現在は幅は狭いがトラックでも通行可能な永久橋が架けられている。梁瀬の地名は各地にある。

梁瀬橋

274 柳瀬（やなせ・やなぜ〜本庄川にかかっている〜） 宮崎市　地図1−B−4

大淀川と本庄川が合流する所にある。ヤナは築、梁、柳、魚梁などとも表記し柳が生えていることによる地名や、魚をとる梁にちなむ地名。また、畑の縁（ふち）の斜面や堤（つつみ）に付けることもある。柳瀬は柳が生えており、柳から付けられた地名であることは明らか。ここには柳瀬橋が架かっている。

柳瀬橋

275 山下（やました） 宮崎市高岡町　地図2−D−5

藩政時代までの交通手段は、牛・馬や舟を利用する方法しかなかった。そこで、陸路では山越えの峠の下には集落ができた。高岡では、高城から山越えの薩摩街道と野尻から大淀川の急流を下った到着地点のあたりに集落ができた。そのような場所に山下の地名がある。峠の両側には集落ができる。このような集落は、峠下集落という。

山下バス停

276 山田（やまだ） 都城市山田町　地図3−B−2

元禄15年（1702）頃は、黒池村、牧野村、是位村（ぜいむら）、小牟礼村（こむれむら）、下椎屋村、山菅村（やますがむら）、上中原村、瀬戸口村の九つの村であった。その後合併して山田村となったが、年月ははっきりしない。山田という地名は、山や田んぼの地形から名付けられたものと思われる。現在の山田支所付近が山田城跡である。

山田城跡（現山田支所）

277 山ノ城（やまのじょう） 宮崎市　地図1−D−4

古城の時雨、本城（もとじょう）の東２キロメートルほどの所に独立した山があり、その嶺（みね）に山ノ城という城があった。場所は古城小学校の近くである。この城は伊東祐時（いとうすけとき）の第７子、門川祐景の子孫が城主で山ノ城を名乗った。今はその城名が地名となった。

山ノ城跡

ゆ

278 柞木橋（ゆすのきばし） 宮崎市高岡町　地図1−D−2

穆佐（むかさ）から田野方面に進んだ山間に民家が点在する地区である。この地名の由来は、昔、殿様が通りかかった時小川に「柞（ゆす）の木で、橋を架けたことから「柞木橋（ゆすのきばし）と名付けられた」と地区の人々は伝えている。昔の関所跡や街道があり、田野方面への交通路として大きな役割を負っていた所である。

柞木橋地区

279 柚木崎（ゆのきざき） 宮崎市高岡町　地図2−D−5

戦国時代ここの山頂に柚木崎城という山城があり、城主は柚木崎丹後守正家（ゆのきざきたんごのかみまさいえ）であった。文武両道にすぐれ、特に弓の名手であったという。1572年の木崎原合戦は伊東・島津の日向における争覇戦（そうはせん）であったが、伊東軍が大敗した。丹後守は敗走する伊東軍の中にあって、ふみとどまり勇敢に戦い敵将の前で、自ら腹をかっ切って戦場の露と消えた。歴史上のできごとから付いた地名だと思われる。

柚ノ木崎橋

280 湯之元（ゆのもと） 高原町　地図3−A−1

湯という文字が地名に使われる所は、温泉に関係がある土地と思われる。湯之元は、泉源のある場所に付いた地名。ここには、湯之元温泉がある。

湯之元温泉

よ

281 吉村（よしむら） 宮崎市　地図1−C−6

戦後の区画整理以後、吉村町は稗（ひえ）原町、曽師町、日ノ出町など新たな町を分離し、その面積を減じているが、大淀川下流左岸に広く存在した旧大字（あざ）で檍村に属した。大字になっても「村」を外さず、昭和８年（1933）に宮崎市の町名となっても「村」を付けたまま「吉村町」となるなど、他の町村にはない変名である。同地の多くは低地帯であり、そこに生える「葦（よし）→吉」の転訛と思われる。

282 四枝（よつえ） 綾町　地図2−C−5

四枝は綾盆地西部を南流する綾南川（本庄川）の左岸にある集落名。綾南川が四つに枝分かれして流れていたことにちなむ。かつて大洪水のたびに流れが変わったのであろう。上畑橋のすぐ上流に四枝堰（ぜき）、上畑橋の東岸に「四枝堰堤水路工事記念碑　紀元二千六百年」（昭和15年・1940）と刻まれた石碑がある。四枝堰が最初に築かれたのは元禄14年（1701）という。

四枝堰

り

283 龍官須（りゅうかんず） 綾町　地図2−C−5

綾町中心部（役場）から約２キロメートル西南へ行った所の、今は酒泉の杜北側あたりの地名。かつては中州であったのであろうが、今は田地に整理されている。たぶん官は頷（あご）、須は州の当て字で、龍官須は龍（りゅう）のあごのように雑木雑草の生えている中州（なかす）の意味であろう。ユリ科多年生常緑草のリュウノヒゲ（龍の髭）も生えていたかも知れない。あるいは龍官が龍眼の当て字ならば、ムクロジ科常緑高木のリュウガン（龍眼）の生えている中州の意味であろう。あるいは龍官須は、竜ガ水（土石流）の当て字かも知れない。

284 両国橋（りょうごくばし） 宮崎市　地図1−D−5

江戸時代、古城川の中流に両国橋という橋が架かっていた。「源藤（げんとう）村と恒久村との境・源藤川に架かる。長さ11間（約20メートル）幅１間４尺（約２メートル）で欄干（らんかん）がある。明治以前、恒久村は飫肥藩、源藤村は延岡藩に属していた。それで伊東氏と内藤氏が協力して橋を架けたのである。地元ではこの橋を「両国橋あるいは寄合橋（よりあいばし）という」とある。

現在はコンクリートの橋になっている。

両国橋

わ

285 和知川原（わちがわら） 宮崎市　地図1−C−5

宮崎市街地を南流する大淀川の左岸に位置する。戦国時代の日記には「和知川原に舟を繋（つな）ぐよい入江がある」と記載され、現在とはかなり違う地形であった。皺地（しわち）の転訛（てんか）説もあるが、「和知→輪地」と考えると、元々の和知川原が現在の霧島１丁目にある馬頭観音（ばとうかんのん）を中心として西側に半円を描く輪地（わぢ）の小高い土地であることに由来するとも考えられる。

カワの四つの意味

日本の川は「旧仮名遣ひ」ではカハといい、昭和21年11月公布の「現代かなづかい」以後はカワ・ガワという。カワは一般に水が集まって凹地を流れる細長い水路を意味し、大小さまざまのカワを総称する場合は河川という。

日本のカワには、(1)水、(2)水のある所、(3)水の流れ、(4)水の流れる路、の四つの意味がある。

(1)水

古語のカハは水を意味した。『万葉集』（８世紀後半）には水をカハと詠んだ歌がある（315・224・1110）「湯種蒔く　あらきの小田を求めむと　足結出で濡れぬ　この水（かは）の瀬に」（315）。

鴨長明の随筆『方丈記』（1212）年に、「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず・・・」とある。

(2)水のある所

古くは井戸・池・堀・泉などの水のある所・水のわく所を「カハ」とも「ヰ」ともいった。川には①井戸、②湧き水を村の飲料水としてためてある井戸、③堀、④池、の意味がある（東条操　編『全国方言辞典』）。井戸は井処の意味、井は流れる水を飲み水としてくみ取る所、池に穴を掘り飲み水をためてくむ所、の意味である。

(3)水の流れ

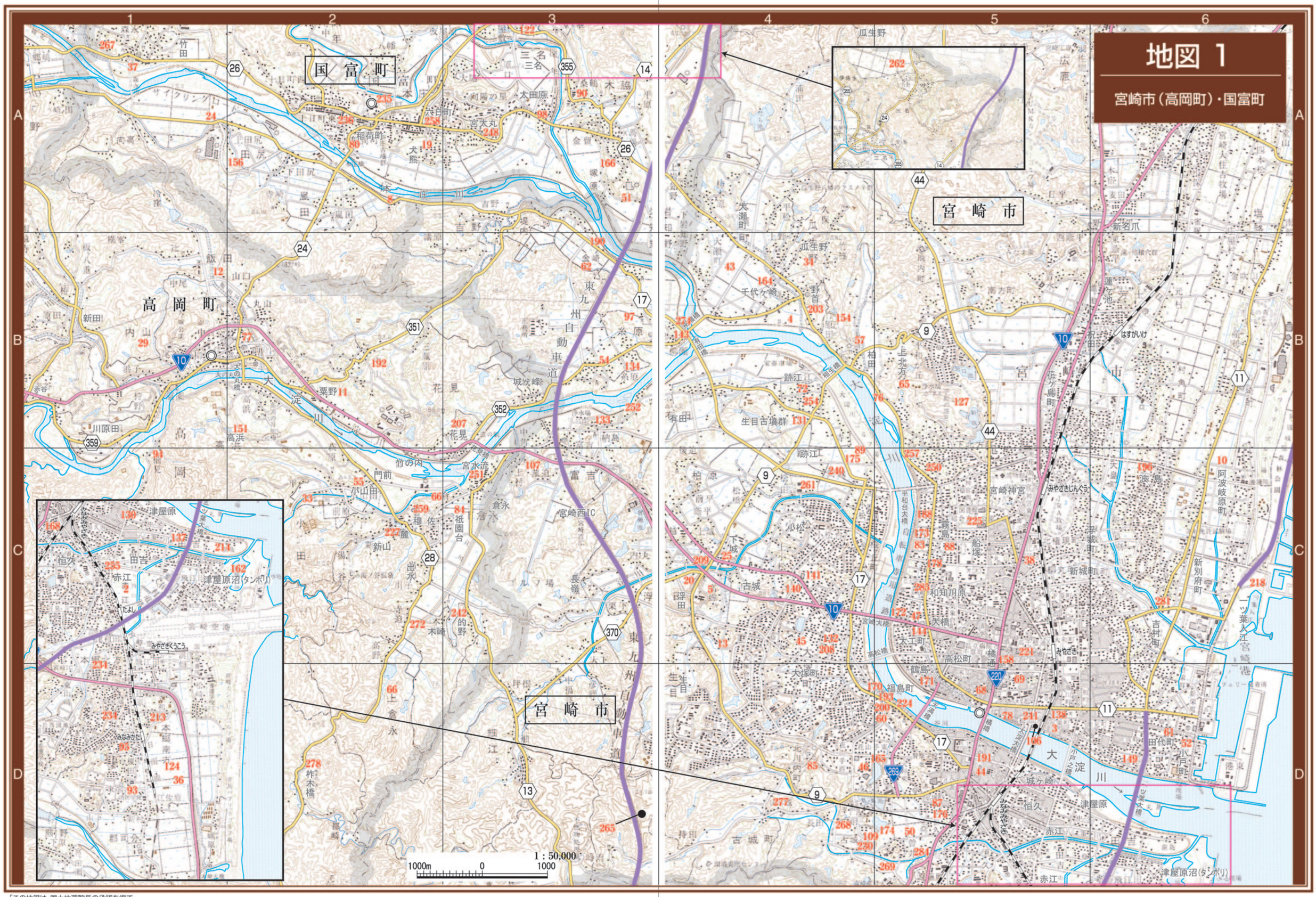
水は引力により地上の凹地を高い所から低い所へ向かって流れる。川は水の流れである。漢字の川は「巛」印（しるし）で川の流れを描いた象形文字である。沖縄で川を普通にはカーと言っているが、山原（やんばる）では多くハーという。ハーはハルすなわち走る義で、流水の意味である（宮城信治著『沖縄地名考』）。

(4)水の流れる場所

川は水の流れる路、すなわち水路・流路・河道である。川には流れる水の側（がわ）、流れる水を包む皮（かわ）という意味がある（鈴木理生 著『川を知る事典』）。水は低地に集まって溝川となり、山川・谷川・岩川・石川・滝川・砂川・土川・野川・原川などの中を下って湖や海に注ぐ。川原川・川端川・川辺川・川脇川などもある。

地図 1

宮崎市（高岡町）・国富町



「この地図は、国土地理院長の承認を得て、
同院発行の5万分の1地形図を複製したものである（承認番号　平18九複、第 331号）」

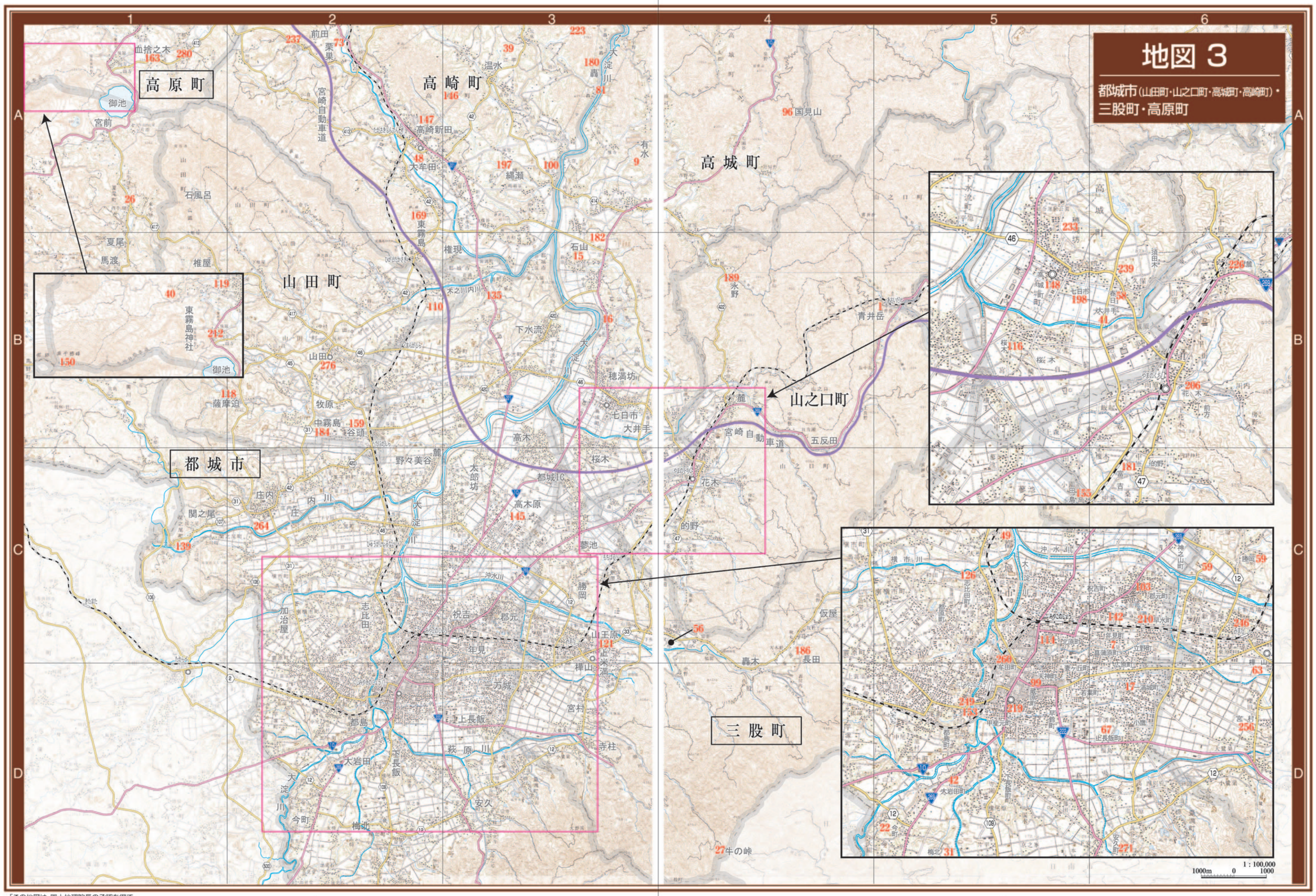
地図 2

小林市（須木）・綾町・国富町・
野尻町・高原町

「この地図は、国土地理院長の承認を得て、
同院発行の5万分の1地形図を複製したものである（承認番号　平18九複、第 331号）」

地図 3

都城市（山田町・山之口町・高城町・高崎町）・
三股町・高原町



「この地図は、国土地理院長の承認を得て、
同院発行の5万分の1地形図を複製したものである（承認番号　平18九複、第 331号）」

文　献	著者・編者	出版社	発行年度
綾郷土史	郷土誌編集委員会	綾町	昭和40年
綾郷土誌	綾町郷土誌編纂委員会	綾町	昭和57年
いつまでも忘れないで(須木村閉村記念誌)		須木村	平成18年
岩波古語辞典補訂版	大野晋ほか 著	岩波書店	平成２年
瓜生野・倉岡郷土史	高岡町 編集	北地区振興会事務局	昭和61年
学研漢和大字典	藤堂明保 著	学習研修社	昭和53年
角川日本地名大辞典		角川書店	昭和61年
角川日本地名大辞典宮崎県	野口逸三郎 監修	角川書店	昭和61年
久遠の遺産		高岡町	昭和51年
国富町郷土史	坂本貞義 編	国富町	昭和52年
国富の歴史		国富町	平成13年
広辞苑第１版	新村出 編	岩波書店	昭和30年
古代地名語源辞典	楠原佑介ほか 編著	東京堂出版	昭和56年
小林市史上・下巻	小林市史編集委員会	小林市	昭和41年・42年
小林市史第3巻	小林市史編集委員会	小林市	平成12年
小林町郷土史	小林町教育会	小林町教育会	昭和５年
小林の移り変わり(明治・大正・昭和史年表)	中丸三郎	後援・小林市教委	昭和55年
薩隅日地理纂考		鹿児島県教育会	昭和46年改訂
三国名勝図会(復刻版)		青潮社	昭和62年・昭和57年
島津斉彬「御道中記」		都城島津家蔵書	昭和52年
じゃがじゃがすきむらいっぺこっぺ物語		須木村小林農業改良普及所	平成２年
新編大言海	大槻文彦 著	冨山房	昭和57年
須木村郷土誌		須木村教育会	昭和５年
須木村史		須木村	平成６年
石仏の里―田尻史物語―	比良元静香		平成11年
続・日本の地名	谷川健一 著	岩波新書	平成10年
たかおか　復刻版	たかおか編集委員会	たかおかを語る会	平成７年
高岡町合併40周年記念誌(翔)		高岡町	平成７年
高岡町史〔上・下〕		高岡町	昭和62年
高岡町閉庁記念誌〔結いの心〕		高岡町	平成17年
高岡名勝志	県地方史研究会 編	県地方史研究会	昭和47年
高崎町史		高崎町	平成２年
高城町史		高城町	平成元年
高原町史		高原町	昭和59年
地質・地形からみた地名事典	田代学 著	江南書房	
地図からみた宮崎市街成立史	田代学 著	江南書房	平成８年
宮崎市街字町名誌	田代学 著	江南書房	平成10年
地名	丹羽基二 著	秋田書店	昭和50年
地名語源辞典	山中襄太 著	校倉書房	昭和43年・昭和57年
地名の研究	柳田国男 著	角川文庫	昭和42年
地名の研究	松尾敏郎 編	大阪教育図書	昭和34年
地名の語源	鏡味完二・鏡味克明 著	角川書店	昭和52年
地名の博物史	谷口研語 著	ＰＨＰ新書	平成９年
地名用語語源辞典	楠原佑介・溝手理一郎 編	東京堂出版	昭和58年
奈佐木城址公園(パンフ)		須木村	平成14年
西諸県郡誌(復刻版)		名著出版	昭和49年
日本史辞典(第2版)		角川書店	平成４年
日本城郭大系　第16巻		新人物往来社	昭和55年
日本地図地名辞典	三省堂編集所	三省堂	平成３年
日本地名事典	吉田茂樹 著	新人物往来社	平成３年
日本地名大辞典(宮崎県)	竹内現三	角川書店	昭和61年
日本地名大事典上・下	吉田茂樹 著	新人物往来社	平成16年

文　献	著者・編者	出版社	発行年度
日本地名ルーツ事典	池田末則・丹波基二 監修	創拓社	平成４年
日本の地名	藤岡謙二郎 著	講談社現代新書	昭和49年
日本の地名	鏡味完二 著	角川文庫	昭和39年
日本の地名	谷川健一 著	岩波新書	平成９年
日本民俗大辞典		吉川弘文館	平成12年
日本歴史地名大系46		平凡社	平成９年
野尻史年表		野尻町青年郷土史研究クラブ	昭和52年
野尻町の文化財(パンフ)		野尻町	平成16年
東諸県郡誌(復刻版)	宮崎県教育会西諸県郡支会	名著出版	昭和49年
日向郷土事典	松尾宇一 著	歴史図書社	昭和55年
日向郷土辞典		文華堂	昭和29年
日向纂記	平部嶠南	歴史図書社	昭和51年
日向地誌(復刻版)	平部嶠南	青潮社	昭和51年
日向の国・諸県の伝説	瀬戸山計佐儀編 著	都城史談会	昭和55年
日向の伝説	瀬戸山計佐儀編 著	第一法規	昭和51年刊
日向の伝説	鈴木健一郎 著	文華堂	昭和55年
南日本の地名	小川亥三郎 著	第一書房	平成10年
三股町史改訂版	編集委員会編	三股町	昭和60年
みまた歴史散歩	桑畑初也 著	私書版	平成15年
都城市史 別編民族・文化財	都城市史編さん委員会編	都城市	平成８年
宮崎県山林沿革資料		宮崎県史料編纂会	昭和40年
宮崎県史資料編民俗２	宮崎県	宮崎県	平成3年・平成４年
宮崎県神社誌	宮崎県	宮崎県神社庁	昭和63年
宮崎県叢書　日向記		宮崎県	平成11年
宮崎県大百科事典		宮崎日日新聞社	昭和58年
宮崎県地方史研究紀要		宮崎県立図書館	平成２年
宮崎県の地名	野口逸三郎 編	平凡社	平成９年
宮崎県の地名	編纂委員会 編	平凡社	昭和62年
宮崎県の歴史	日高次吉 著	山川出版社	昭和45年・昭和48年
宮崎県の歴史散歩	県高校社会科研究会歴史部会 編	山川出版社	平成２年・平成18年
宮崎市史	宮崎市史編さん委員会　編	宮崎市役所	昭和53年
宮崎市の回顧と展望		宮崎市役所	昭和29年
宮崎の元祖調べ　第1巻	高岡町	宮崎経政評論社	昭和４年
みやざき民俗第55号		宮崎県民俗学会	平成14年
民俗地名語彙事典上・下	松永美吉 著	三一書房	平成６年
安井滄洲紀行集(梅見囃し)		安井息軒顕彰会	昭和53年
山田町史		山田町	平成６年
山之口町史		山之口町	平成11年
大淀川の歴史	「大淀川の歴史編修委員会」	建設省宮崎工事事務所	平成10年
筑紫巡遊日録			
昭和10年大阪毎日新聞宮崎版「宮崎新風土記」			
昭和48年宮崎日日新聞「ふるさとミニ紀行」			

編集委員
（順不動）

甲　斐　亮　典　（宮崎県文化財保護審議会会長）
塩水流忠夫　（前都城史談会会長）
首　藤　光　幸　（宮崎市文化財審議会委員）
竹　本　重　幸　（元宮崎市立生目南中学校）
田　代　　学　（田代クリニック院長）
日　高　篤　盛　（宮崎県地方史研究会会員）
星　野　初　男　（国富町文化財専門委員）
前　田　博　仁　（宮崎県民俗学会事務局長）
柳　田　康　博　（元川南町立国光原中学校）
山　元　辰　彦　（都城史談会事務局次長）

編集協力
参考資料・写真提供
（敬称略）

・小林市
・小林市須木庁舎
・野尻町教育委員会
・野尻町文化財保護審議会
・国富町教育委員会
・前田宏
・園田誠
・薗牟田英一
・川添貴文
・岩切八郎
・加藤建夫

編集後記

地名はたいへん身近で、普段その意味を改めて考えてみることはしません。しかし、地域の特徴やできごとを表わしていることが多く、何よりも先人の知恵がつまっています。それは農業に関するものであったり、洪水が起こりやすい場所への警告であったりします。

そして、私たちの心にも深く根付いています。人は生まれ育った地域の影響を強く受けて育ちます。それは気候や食べ物、地形の条件であったりします。子どもの頃に受けた様々な影響は強く心に残り、その人の人格形成にも影響してきます。ふる里への愛情は、これらから生まれるものと思います。

地名のいわれを考えてみることは、生まれ育ったふる里の歴史やできごとにも通じ、それらを知ることで私たちの住んでいる地域にも愛情がわいてきます。

地名の「いわれ」には俗説や伝承も多く、今の時代となっては何故そのような「いわれ」があるのか定かでないものも数多くあります。とくに宮崎は神話伝承が多く、史実との関係で疑問符が付く「いわれ」もあります。しかし、その地域に伝えられてきたことも事実です。この本ではそういった「いわれ」と、「地形」や「地名学」からみた「地名の意味」も考えるように努めました。いろいろな「考え方」もありますので、疑問に思った地名は、皆さんも調べたり考えたりしてください。

この本が、皆さんの住んでいる地域の「名前のいわれ」を知り、「できごとや歴史」に興味を持つ手がかりになれば幸いです。

また、刊行に当たっては、たくさんの方々のご協力をいただきました。各関係機関の方々、市町村、取材にご協力いただいた方々に厚くお礼を申し上げます。

「大淀川流域地名のいわれ事典」編集委員　一同

大淀川流域　地名のいわれ事典

編　集　特定非営利活動法人　大淀川流域ネットワーク
「大淀川流域地名のいわれ事典」編集委員会
発　行　国土交通省九州地方整備局　宮崎河川国道事務所
〒880-8523 宮崎市大工2丁目39
TEL.0985（24）8505（調査第一課直通）
E-mail／miyazaki@qsr.mlit.go.jp
発行日　平成19年3月

国土交通省 九州地方整備局

宮崎河川国道事務所

〒880-8523 宮崎市大工2丁目39 ☎(0985)24-8505(調査第一課)
ホームページ http://www.qsr.mlit.go.jp/miyazaki/